岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第162集

梅ノ木台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第１６２集
梅ノ木台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書正誤表

頁	行	誤	正
5	8	第３図	第４図
5	9	第４図	第５図
5	１０	第５図	第６図
１１	調35	上友町	上反町
２２	第１２図		出土遺物のスケールS＝1/2
３９	第３表	リタッチドフレ	リタッチドフレーク
６７	写真図版１	調査風景・空中写真	調査前風景・空中写真
６８	写真図版２	基本層序・陥し穴状遺構	基本土層・陥し穴状遺構
８７	埋文調査調査部 資料課長	小野田哲憲 松村義夫	小田野　哲憲 村松義夫

梅ノ木台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特にも高速道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成元年度・2年度に発掘調査した梅ノ木台地Ⅰ遺跡の調査結果をまとめたものであります。梅ノ木台地Ⅰ遺跡は、和賀川右岸の段丘の縁辺部に立地し、調査の結果、縄文・弥生時代の遺物や平安時代の竪穴住居跡が発見され、新しい資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、和賀町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成3年6月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　工藤　巌

例　言

1　本報告書は岩手県北上市和賀町岩崎19地割11－1ほかに所在する梅ノ木台地Ⅰ遺跡の発掘調査を収録したものである。

2　本遺跡の調査は東北横断自動車道秋田線建設に伴う記録保存を目的とした調査である。調査は日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会文化課との協議を経て、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが実施した。

3　本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び遺跡調査略号は次のとおりである。
遺跡番号ＭＥ64－2126調査略号ＵＭＩ－89・90

4　発掘調査は平成元年度と平成２年度の２年度にわたって実施した。調査期間、調査面積、調査担当者は次のとおりである。

	調査期間	調査面積	調査担当者
平成元年度	５月30日～８月25日	6,000㎡	平井　進　佐々木信一
平成２年度	６月27日～８月28日	3,000㎡	川村　均　星　雅之

5　整理期間と整理担当者は次のとおりである。
平成元年11月１日～平成２年３月31日　平井　進
平成２年11月１日～平成３年３月31日　川村　均

6　各種鑑定にあたっては、次の方々に依頼した。
石材鑑定　佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）
木材鑑定　早坂松次郎氏（岩手県木炭協会）

7　野外調査にあたっては、北上市教育委員会及び地元の方々のご協力をいただいた。

8　本遺跡から出土した遺物及び調査資料は岩手県立埋蔵文化センターに保管している。

目　次

本文目次

序
例言
Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　位置と環境……1
　1　位置……1
　2　地理的環境……3
　3　地形と地質と基本土層……3
　4　周辺の遺跡……7
Ⅲ　調査方法と整理方法等……12
　1　調査方法……12
　2　整理方法……12
　3　報告書の掲載図版等について……13
Ⅳ　検出された遺構と遺物……17
　1　縄文～弥生時代……17
　2　平安時代……21
　3　時期不明……23
　4　遺構外の出土遺物……25
Ⅴ　まとめ……62

表目次

第1表　周辺の遺跡一覧表……11
第2表　焼土遺構一覧表……20
第3表　石質別集計表……39
第4表　石器・石製品一覧表(1)……58
第4表　石器・石製品一覧表(2)……59
第4表　石器・石製品一覧表(3)……60
第4表　石器・石製品一覧表(4)……61

図版目次

第1図　遺跡位置図……2
第2図　地形分類図……4
第3図　地質調査図……5
第4図　表層地質図……6
第5図　表層地質図……6
第6図　梅ノ木台地Ⅰ遺跡基本層序模式図…6
第7図　周辺の遺跡位置図……9
第8図　遺構配置図……15
第9図　陥し穴状遺構・1～5号焼土…18
第10図　6・7号焼土……19

第11図　8号焼土……20
第12図　竪穴住居跡・出土遺物……22
第13図　1･2号土坑、1･2号溝跡……24
第14図　遺構外の出土遺物土器1……29
第15図　遺構外の出土遺物土器2……30
第16図　遺構外の出土遺物土器3……31
第17図　遺構外の出土遺物土器4……32
第18図　遺構外の出土遺物土器5……33
第19図　遺構外の出土遺物土器6土偶……34
第20図　遺構外の出土遺物土器7……35
第21図　遺構外の出土遺物石器1……40
第22図　遺構外の出土遺物石器2……41
第23図　遺構外の出土遺物石器3……42
第24図　遺構外の出土遺物石器4……43
第25図　遺構外の出土遺物石器5……44
第26図　遺構外の出土遺物石器6……45
第27図　遺構外の出土遺物石器7……46
第28図　遺構外の出土遺物石器8……47
第29図　遺構外の出土遺物石器9……48
第30図　遺構外の出土遺物石器10……49
第31図　遺構外の出土遺物石器11……50
第32図　遺構外の出土遺物石器12……51
第33図　遺構外の出土遺物石器13……52
第34図　遺構外の出土遺物石器14……53
第35図　遺構外の出土遺物石器15……54
第36図　遺構外の出土遺物石器16……55
第37図　遺構外の出土遺物石器17……56
第38図　遺構外の出土遺物石器18……57

写真図版目次

写真図版1　調査前風景、空中写真…67
写真図版2　基本層序・陥し穴状遺構……68
写真図版3　竪穴住居跡……69
写真図版4　7･8号焼土、1･2号溝跡…70
写真図版5　竪穴住居跡(1～8)・遺構外の出土遺物土器1……71
写真図版6　遺構外の出土遺物土器2…72
写真図版7　遺構外の出土遺物土器3…73
写真図版8　遺構外の出土遺物土器4…74
写真図版9　遺構外の出土遺物土器5…75
写真図版10　遺構外の出土遺物石器1…76
写真図版11　遺構外の出土遺物石器2…77
写真図版12　遺構外の出土遺物石器3…78
写真図版13　遺構外の出土遺物石器4…79
写真図版14　遺構外の出土遺物石器5…80
写真図版15　遺構外の出土遺物石器6…81
写真図版16　遺構外の出土遺物石器7…82
写真図版17　遺構外の出土遺物石器8…83
写真図版18　遺構外の出土遺物石器9…84
写真図版19　遺構外の出土遺物石器10…85
写真図版20　遺構外の出土遺物石器11…86

Ⅰ　調査に至る経過

東北横断自動車道東和秋田線は、岩手県北上市で東北縦貫自動車道青森線から分岐し、湯田町を経由して秋田市に至る総延長107kmの高速道路である。このうち第９次、第10次施行命令区間は総延長で33.9kmで、北上ジャンクションから秋田県境までの区間である。

これに関連する埋蔵文化財包蔵地について、岩手県教育委員会は、昭和56年から分布調査を行っており、取り扱いについては日本道路公団仙台建設局との間で協議された。協議の経過は以下のとおりである。

昭和62年４月13日付け　仙建北工第35号による分布調査の依頼

５月25日付け　教文117号による分布調査結果の回答

昭和63年９月９日付け　教文第320号による平成元年度における発掘調査事業の照会

９月16日付け　仙建北工515号による平成元年度発掘調査事業の回答

昭和63年12月27日及び平成元年１月21日　日本道路公団仙台建設局、岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団の三者による埋蔵文化財調査に関する協議

これにより、岩手県教育委員会は調整のうえ、平成元年度に柳上遺跡、岩崎台地遺跡群、岩崎城西遺跡、梅ノ木台地Ⅰ・Ⅱ遺跡、兵庫館跡、本郷遺跡、石曾根遺跡、月館跡、八幡館跡、八幡野Ⅱ遺跡、田中館跡、越中畑Ⅴ遺跡の13遺跡、合計92,000㎡の調査を岩手県文化振興事業団の委託事業にすることとした。

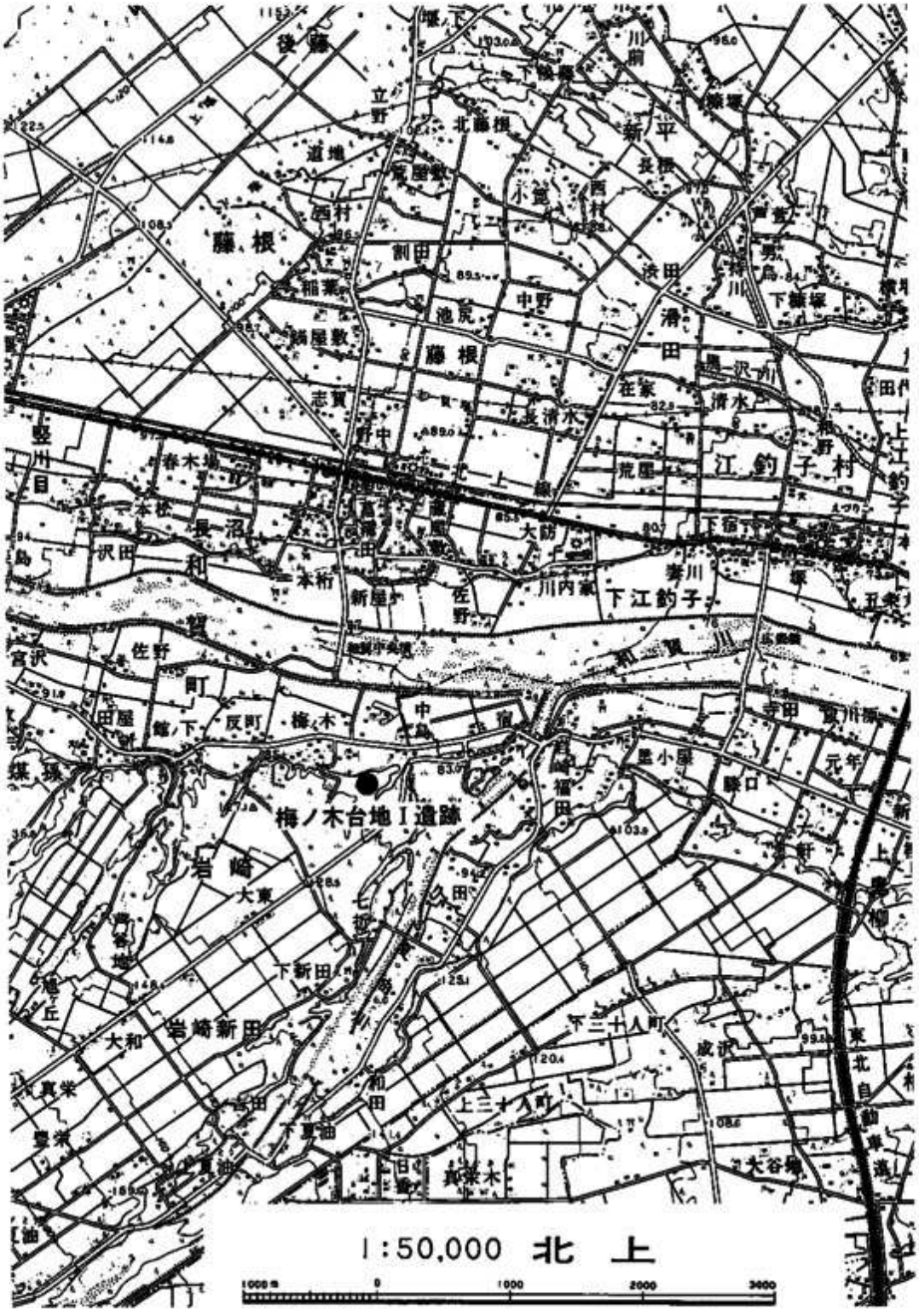
これをうけて当埋蔵文化財センターは平成元年４月１日付け委託契約により、発掘調査に着手したものである。しかし、用地内の買収未了や保安林解除遅延により、梅ノ木台地Ⅱ遺跡と越中畑Ⅴ遺跡は着手できなかった。また、同じ理由で梅ノ木台地Ⅰ遺跡、兵庫館跡、本郷遺跡の３遺跡では、調査区域の一部を平成２年度までの継続調査とした。

梅ノ木台地Ⅰ遺跡の未了区域については、平成２年４月１日付け契約により調査に着手した。

Ⅱ　位置と環境

１　位置

本遺跡の所在する北上市和賀町は、岩手県の南西部に位置し、北は花巻市、南は金ケ崎町と胆沢町、西は湯田町と沢内村に接する。中央部を東日本旅客鉄道北上線が東西に横断する。本遺跡は、東日本旅客鉄道藤根駅の南約2.3kmに位置する。同地 点は北緯39度17分、東経141度２分付近である。



第1図　梅ノ木台地Ⅰ遺跡位置図

2　地理的環境

北上市の年平均気温は10.8℃であり、年間降水量は1,334mmで県内では中程度である。ただし、市の西部は奥羽山脈の一部で あり冬季の積雪量は多量であり、隣接する沢内村などは県内では有数の豪雪地帯である。初雪は11月中旬、終雪は３月下旬で積雪期間は約４ケ月である。風向は年間を通じ西風が多いが、特に冬季間は北西の季節風が強い。

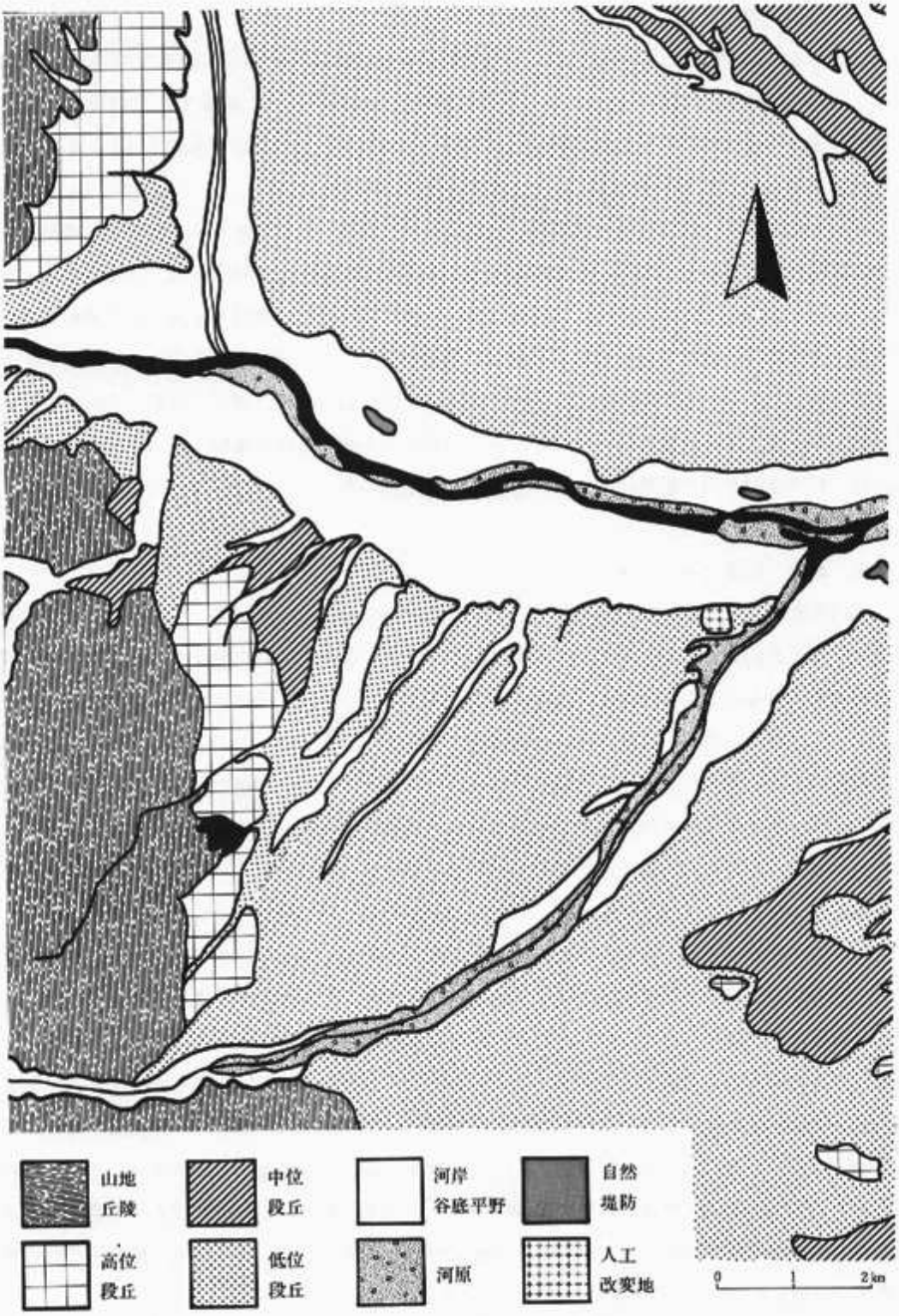
本遺跡の北約１kmには和賀川が東流し、東約８kmには北上川が南流する。和賀川は奥羽山脈の和賀岳に端を発し、沢内村、湯田町を経て北上市和賀町に入り、同市古川で北上川に注ぐ全長75kmの１級河川である。同河川は夏油川等１級河川だけでも13河川を支流とする当地では最大の河川であり、古来から同流域には多くの集落が発生した。現在の北上市和賀町に限ってみても、西（上流域）から順に仙人、岩沢、横川目、堅川目、藤根、長沼、媒孫、岩崎の９集落が並んでいる。また、湯田町との境界にある当楽峡谷をせき止めた湯田ダム（錦秋湖）は、市西部一体の水田を潤す農業用水として重要な役割を担っている。

3　地形、地質と基本土層

本遺跡が所在する北上市和賀町岩崎は北上盆地のほぼ中央に位置する。北上盆地は古生界を主とする北上山地と第三系を主とする奥羽山脈が南北に並走する間にあって、北上川とその支流が開析したものである。北上川に注ぐ支流のうち大きな河川の殆どは奥羽山脈に水源をもつことから、北上川西岸には河岸段丘や扇状地などがよく発達しているのに対し、東岸には極めて部分的にしか見られない。したがって、北上川の本流は著しく東側によって流れている。このように、北上盆地の主体部は東流する何本かの大きな河川によって作り出されたものであるため、大小の段丘や扇状地、河岸平野及び起伏量の小さい丘陵地が互いに入り組む構造となっている。

北上市の地形はこのような北上盆地のもつ特徴をそのまま持っている。市の西部は奥羽山脈の一部である山地、その東麓に広がる台地は三期に大別される洪積世の段丘とその縁辺に認められる沖積世の段丘、それに自然堤防や氾濫原を含む河岸平野から成り立っている。本遺跡が所在する岩崎地区は地学上「金ケ崎段丘」[注1] と呼ばれる洪積世の低位段丘と河岸平野とから成り立ってる。この段丘は「岩崎新田台地」と呼ばれ、標高100mから200mで起伏量の乏しい平坦地であり、一部は山林として利用されている所もあるが、その大部分は水田として利用されている。また、河岸平野は和賀川と夏油川及びその支流である多くの小沢によって開析されたもので同台地とは急崖となって接する。遺跡は台地の北縁に位置し、和賀川と夏油川との合流点までは約1.7kmの距離にある。現況は山林である。

岩崎地区周辺は奥羽山脈第三系の地質を基盤とし、その上を「和賀川統」とか、「籠野統」、

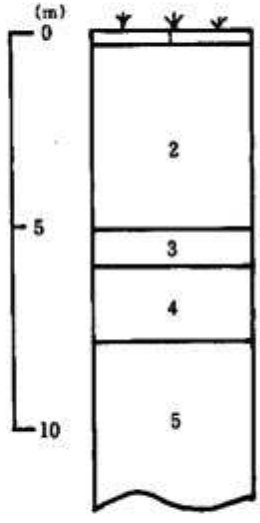


第２図　地形分類図

「好地統」と呼ばれる黒ボク土壌が覆う構成となっている。黒ボク土壌の層厚は30cm前後であり、同層内には極めて限定的、かつ少量ではあるが灰白色の沖積世の火山灰（十和田ａ降下火山灰か？）が認められる。また、現況が山林のところではその上に腐葉土が堆積している。

岩崎新田台地は洪積世段丘の中では最も新しい段丘であり、しかも夏油川によって作られた扇状地である。したがって、その基盤層は砂礫層とローム層の火山灰の互層となっているため、所によっては一見異なる土層や層序となっている。

本遺跡のⅢＢ４ｇグリット付近で実施した日本道路公団のボーリングによる地質調査によれば第３図のようになっている。また、筆者が調査したⅡＢ０ａとⅣＢ０ａでの表層地質は第３図、第４図のとおりである。これらを勘案して模式図的に遺跡の基本層序を捉え、さらに遺構と遺物の係わりを表したのが第５図である。遺構の検出面はⅡ層の上面とⅢ層ないしⅣ層の上面の２カ所である。遺物を内包しているのもⅢ層より上位であり、特に縄文前期末から中期初頭にかけての遺物が比較的まとまって出土するのはⅡ層中位から下位の間である。Ⅳ層以下は遺構も遺物も発見されない。



第3図　地質調査図
（日本道路公団によるボーリング）

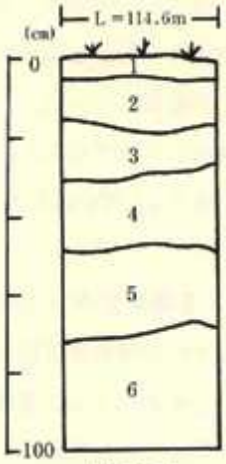
1　表土

2　粘性土(1)Ｔ１－ｃ１　褐・黄褐色を呈する火山灰質の砂質シルト、礫混じり砂質粘土、粘土などからなる

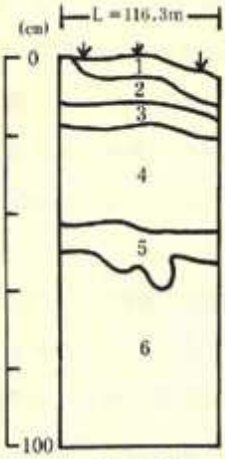
3　軽石　Ｔ１－ｐｕ　粒径５～60mmの亜円礫状を呈し礫は指圧で砕けない

4　粘性土(2)Ｔ１－ｃ２　黄褐、灰、青灰色を呈す凝灰質の粘土、砂質粘土、砂質シルトなどからなる

5　礫質土Ｔ１－ｇ　段丘堆積物の主体をなす、褐、黄褐色の粘土質～粘土混じり砂礫からなり、所々玉石混入



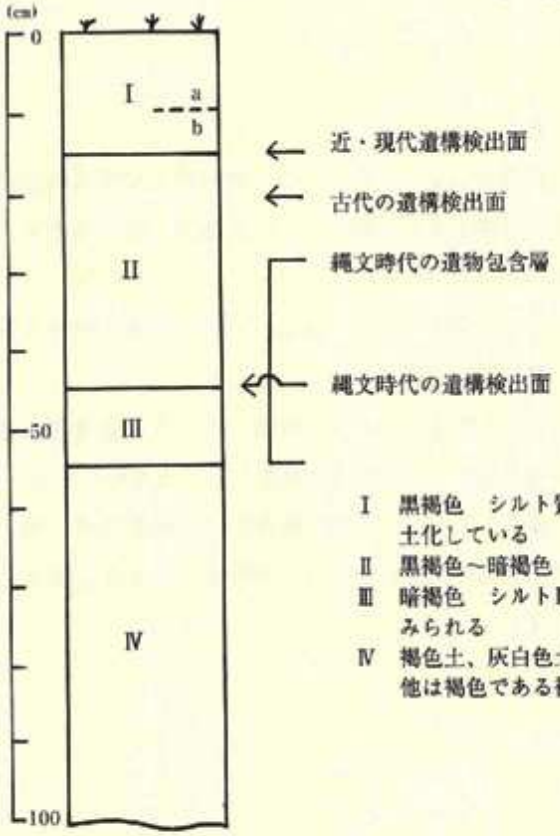
第4図



第5図

第4図
1　10YR2／2黒褐色　草根が繁茂
2　10YR2／2黒褐色　草根が繁茂　柔らかくしまりなし
3　10YR3／2黒褐色　硬くしまっている
4　2.5YR5／4黄褐色　粘土質シルト　硬くしまっている
5　2.5YR6／3にぶい黄色　粘土質シルト　硬くしまっている
6　10YR5／8黄褐色　粘土質シルト　硬くしまっている

第5図
1　10YR2／2黒褐色　草根多い　柔らかくしまりなし
2　10YR2／2黒褐色　柔らかくややしまっている
3　10YR2／1黒色土　締まりを欠く柔らかい
4　10YR3／2黒褐色　一部締まりを欠く　3と5のフラックション
5　10YR5／3にぶい黄褐色　粘土質シルト硬く粘性強い
6　10YR5／6黄褐色　粘土質シルト硬く粘性強い



第6図　梅ノ木台地Ⅰ遺跡
基本層序模式図

Ⅰ　黒褐色　シルト質　Ⅰaは腐葉土Ⅰbは締まりがなく部分的に焼土化している
Ⅱ　黒褐色～暗褐色　シルトⅠbよりは締まっている
Ⅲ　暗褐色　シルトⅣ層がフラックションをおこしたものが部分的にみられる
Ⅳ　褐色土、灰白色土　粘土質シルト灰白色土はⅠ～Ⅱ区にみられ、他は褐色である褐色土には人頭大の円礫が若干含まれる

4　周辺の遺跡

北上市和賀町には現在120カ所をこえる遺跡が登載されている。[注2]（第７図、第１表参照）和賀川を中心として遺跡の分布をみると、和賀川左岸では、中位段丘やその縁辺部及び開析された小支谷沿いに縄文時代の遺跡が比較的多く分布し、河岸低地にも若干認められる。調査された主な遺跡としては、鳩岡崎遺跡(縄文・奈良～平安時代の竪穴住居跡、フラスコ状土坑、縄文土器等)、新平遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等)、藤沢遺跡(平安時代の竪穴住居跡、溝状遺構、縄文土器等)、九年橋遺跡（竪穴住居跡、土坑、縄文晩期の土器）等があげられる。また、低位段丘上や河岸低地上に形成された自然堤防上には、奈良～平安時代にかけての遺跡が多く分布する傾向が認められる。調査された主な遺跡としては、下谷地遺跡（縄文土器、土師器、須恵器)、長沼古墳群、五条丸古墳群等があげられる。和賀川右岸では丘陵の縁辺や中～低位段丘及び開析された支谷に沿って縄文時代～平安時代の遺跡が分布し、段丘の北側縁辺部には湧水や深く入り込んだ沢や急崖を利用した城館遺跡が分布している。調査された主な遺跡としてはまず和賀仙人遺跡があげられる。この遺跡は昭和40年と翌年の２次にわたって調査が行われ、段丘構成層から旧石器が出土している。そのほか、低位段丘上に立地する下岩沢Ⅰ遺跡（土坑、縄文土器、弥生土器等)、岩崎城跡（土塁、溝、掘立柱建物跡、中近世陶器等)、岩崎城跡の西半分にあたる梅ノ木遺跡（縄文・古代・中世竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、縄文土器等)、成沢遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土師器等）等があげられる。中位段丘上に立地する遺跡としては下成沢遺跡（旧石器、縄文土器、土師器等)、上大谷遺跡（平安時代の竪穴住居跡、縄文土器、土師器等）等があげられる。

また、平成元年度から２年度にかけて、横断自動車道建設に関連して低位段丘上の縁辺部に立地する21カ所の遺跡が調査されている。[注3]調査の結果、田中館跡（土坑、縄文土器、土師器等)、八幡野Ⅱ遺跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、縄文土器等)、八幡館跡（平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、土師器等)、月館跡（堀跡、柵列状遺構、陥し穴状遺構、縄文土器等)、石曽根遺跡（縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等)、本郷遺跡(縄文、平安時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器等)、法量野Ⅰ遺跡（縄文土器、土師器、陥し穴状遺構、土坑等)、媒孫遺跡（縄文時代の竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、縄文土器、平安時代の竪穴住居跡、土師器、須恵器等)、観音館（陥し穴状遺構、時期不明の掘 立柱建物跡)、上反町遺跡（縄文土器、土坑、弥生土器、炭窯跡)、岩崎台地遺跡群（平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝、土坑、陥し穴状遺構、古墳、土師器、須恵器)、上鬼柳Ⅰ遺跡（縄文土器、陥し穴状遺構、弥生土器、弥生時代の竪穴住居跡、平安時代の墓壙、土師器、須恵器)、上鬼柳Ⅱ遺跡（縄文土器、陥し状遺構、平安時代の竪穴住居跡、土師器等)、上鬼柳Ⅲ遺跡（縄文時代の土器、竪穴住居跡、陥し穴状遺構、土坑、平安時代の竪穴住居跡、

円形周溝、掘立柱建物跡、土師器の窯跡、土師器、須恵器等)、上鬼柳Ⅳ遺跡（縄文土器、土坑多数、陥し穴状遺構、平安時代の竪穴住居跡、畑跡)、柳上遺跡（縄文時代の竪穴住居跡、土坑、平安時代の竪穴住居跡等）の遺構、遺物が発見されている。

本遺跡で主体をなす縄文時代の遺物とほぼ同時期の遺跡は鳩岡崎遺跡、北上市滝ノ沢遺跡、媒孫遺跡がある。鳩岡崎遺跡は和賀川左岸に位置するが、他は和賀川右岸の低位段丘上に位置しており、本遺跡ののる地形面上に立地している。これらの遺跡からは縄文時代前期末葉～中期初頭にかけての大木６から７ａ式併行の土器が多くに出土している。また、特徴的な事として、石器のなかで石錘の出土例が多いことがはやくから指摘されており、[注4] 今後該期の生業、地域的特色を把握するうえで極めて好資料をあたえる遺跡群と思われる。

<注>

1. 岩手県（1975)「土地分類基本調査・北上」Ｐ３
2. 岩手県教育委員会文化課の遺跡台帳による。
3. 1990年岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第147集
   「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」
4. 岩手県教育委員会「東北縦貫自動車道関連発掘調査報告書江釣子村鳩岡崎遺跡」

第７図　周辺の遺跡位置図

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	和賀仙人	散布地	旧石器	仙人
2	切留 I	散布地	縄文土器(中・後期)	仙人
3	人当 I	散布地	縄文土器(中期)・石器	仙人
4	法ケ松 I	散布地	縄文土器、石器	岩沢
5	水沢館	館跡	中世	岩沢
6	岩沢 I	散布地	縄文土器(後・晩期)	岩沢
7	下岩沢 I	集落跡	土坑、縄文土器、弥生土器	岩沢
8	鳥谷森	散布地	縄文土器(晩期)石器	横川目
9	岩沢館	館跡	縄文土器、陶器	下仙人
10	愛宕山	散布地	縄文土器、石器	横川目
11	田代	集落跡	縄文土器(晩期)石器	山口
12	福田	散布地	縄文土器(中・晩期)石器	山口
13	馬場館	館跡	中世	山口
14	福田塚	塚		山口
15	山口館	館跡	中世	山口
16	八幡館	館跡	縄文土器(晩期)弥生土器石器	横川目
17	館森	散布地	縄文土器(中・後期)石器	横川目
18	大橋	散布地	縄文晩期注口土器、石器	横川目
19	姫川館	館跡	堀、土塁、縄文土器(中期)	横川目
20	薬の森古墳群	古墳群	古銭、人骨	横川目
21	田中館	館跡	土師器、石器	山口
22	八幡野 I	散布地	縄文土器	煤孫
23	八幡野 II	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	山口
24	八幡館	館跡散布地	縄文土器、中世	山口
25	月館	館跡散布地	堀、土塁、磁器縄文土器	煤孫
26	石曽根	集落跡 集落跡	竪穴住居跡、縄文土器、石器、弥生土器、土師器	煤孫
27	本郷	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器(中期)石器、土師器、須恵器	煤孫
28	荒屋沢	散布地	縄文晩期壺	煤孫
29	林崎館	館跡	縄文土器、中世	煤孫
30	中屋敷	散布地	土器、土師器	煤孫
31	法量野 I	散布地	石器	煤孫
32	法量野 II	散布地	縄文土器、石器	煤孫
33	煤孫	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器(中期)土師器、須恵器	煤孫
34	観音館	館跡	堀、土塁、須恵器	煤孫
35	上友町	散布地	縄文土器、弥生土器、石器	煤孫
36	兵庫館	散布地	縄文土器剥片石器	岩崎
37	梅ノ木台地 II	集落跡	縄文土器	岩崎
38	梅ノ木台地 I	集落跡	縄文土器	岩崎
39	岩崎城西	散布地	縄文土器、溝跡、陶器	岩崎
40	岩崎城	館跡	銅鉄鉱、鉄鏃、縄文土器	岩崎
41	岩崎台地遺跡群	集落跡	竪穴住居跡、土師器須恵器	岩崎
42	窪野 I	散布地	縄文土器(中期)石器	煤孫
43	窪野 II	集落跡	縄文土器(前後期)旧石器	煤孫
44	代官森 I	散布地	縄文土器・石器	岩崎新田
45	代官森 II	散布地	土坑・石器	岩崎新田
46	神楽	散布地	縄文土器・石器	岩崎新田
47	溜沢	散布地	縄文土器	岩崎新田
48	水神	散布地	縄文土器・石器	岩崎新田
49	七折館	館跡	中世	岩崎
50	花曽根上	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	岩崎
51	七折	集落跡	縄文土器、石器、紡錘車	岩崎
52	花曽根	散布地	須恵器	岩崎
53	新田 I	散布地	石碑、土師器、須恵器	岩崎
54	八天坂	散布地	土師器、須恵器	岩崎
55	久田 I	散布地	土師器、須恵器	岩崎
56	寺村	散布地	縄文土器、土師器	岩崎
57	小寺	散布地	土師器、須恵器	岩崎
58	小平	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	岩崎
59	里小屋	散布地	土師器、須恵器	岩崎
60	上鬼柳 I	集落跡	弥生竪穴住居跡、土師器	上鬼柳
61	上鬼柳 II	集落跡	竪穴住居跡(平安)	上鬼柳
62	上鬼柳 III	集落跡	竪穴住居跡(縄文平安)掘立柱建物跡土師器窯跡	上鬼柳
63	上鬼柳 IV	集落跡	土坑(縄文)竪穴住居跡(平安)畑跡(平安)	上鬼柳
64	柳上	集落跡	縄文土器、竪穴住居跡(平安、縄文)	鬼柳
65	六軒	散布地	縄文土器(晩期)	鬼柳
66	下成沢 I	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	成沢
67	成沢	集落跡	土師器、須恵器	成沢
68	大谷地	集落跡	縄文土器	相去
69	吉浦田古墳群	古墳群	土器、蕨手刀	長沼
70	長沼古墳群	古墳群	蕨手刀、勾玉、切子玉	長沼
71	念仏車	散布地	縄文土器、弥生土器	長沼
72	蔵屋敷	集落跡	弥生土器、土師器	江釣子村
73	稲葉 I	散布地	土師器、須恵器	藤根
74	蓮見館	館跡	縄文土器、土師器、須恵器	藤根
75	長清水 I	散布地	縄文土器(前期末)土師器	藤根
76	新平	駅家跡	縄文、弥生土器土師器	江釣子
77	声笛	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	江釣子
78	下江釣子羽場	集落跡	土師器	江釣子
79	五条丸古墳群	古墳群	土師器	江釣子
80	熊谷地古墳群	古墳群	蕨手刀、勾玉、土師器	江釣子
81	本宿	散布地	縄文土器、土師器	江釣子
82	下谷地	散布地	平安	相去
83	鳥岡崎高台	散布地	縄文土器、土師器	江釣子
84	鳥岡崎上の台	散布地	縄文土器、土師器、須恵器	江釣子
85	滝ノ沢	集落跡	土坑、縄文土器(中期)	相去

Ⅲ　調査方法と整理方法

1　調査方法

＜グリッドの設定＞

調査区はほぼ東西に広がっている。最大長300m、最大幅65mである。調査区内には日本道路公団が中心杭を20m間隔で設置していたので、その中のＳＴＡ33＋80とＳＴＡ34＋20の杭２点を選び、それを結ぶ線を基準線とした。前者を基点１、後者を基点２とした。基準線上を基点１から東へ40m進み、更に基準線に直交する線上を北へ40m進んだ点を原点とした。原点より基準線に並行ないし直交するように40m間隔で調査区全域を網羅するようにメッシュを切り、大グリットとした。各大グリットはそれぞれ10等分し小グリットを設定した。

グリット名は東西方向は数字で、南北方向はアルファベットを用い、その組み合わせによった。大グリット名はローマ数字と大文字のアルファベット、小グリット名は大グリット名を冠した後算用数字と小文字のアルファベットを用いてＩＡＯａのごとく表した。

なお、基準線に直交する線は座北に対して約９度東偏する。また、平面直角座標による各点の位置と基点１の標高はつぎのとおりである。

基点１	Ｘ＝－80,192.98106	Ｙ＝17,750.96089	Ｈ＝114.722m
基点２	Ｘ＝－80,187.07883	Ｙ＝17,711.39878	Ｈ＝115.596m

＜粗掘と精査＞

上物が散乱し、熊笹やバラが繁茂していたため、それらを除去するためバックホーを使用したが、それ以外の粗掘は人手によって進めた。精査は東端の１区から西に向かってグリット単位で進めた。遺物は小グリット単位で層位を記入して取り上げた。

＜遺構名の命名と実測＞

当初の計画では遺構が多いことを想定して、大グリット単位で種別に連番を付すつもりであったが、遺構が少なかったため、グリット名は省略し種別に連番を付した。

実測は第１次検出面で検出された焼土群と溝跡は平板実測で、他は遣り方実測を行った。実測は調査員と作業員とで行った。

＜写真撮影＞

35mm版ではモノ・クロとリバーサルの２種類、６×７cm版ではモノ・クロのフィルムを使用し、遺構の平面・断面と遺物の出土状況を中心に撮影した。

2　整理方法

＜整理の進め方＞

野外調査は２年間の継続調査となったが、野外調査で得た記録や遺物等の整理はその年度内

に処理するように計画を立て遂行した。遺物の洗浄や図面の点検等の一部は野外調査と並行して現場で行った。

＜遺構図面＞

現場で作成した図面は点検後登録番号を付し、台帳に登録した。必要に応じて第２原図を作成した。

＜遺物処理＞

遺物量は石器206点、土器はコンテナ５箱。土製品１点である。これらの遺物は通常の処理（洗浄、注記、接合、復元）をした後、報告書に掲載する遺物を選び出し仮番号を付した。登録番号は報告書で使用した番号とし、台帳に記載した。登録しなかった物は縄文のみの土器片、文様等はあっても小片な縄文土器や小片な土師器片などである。

実測図または拓影図として報告書に掲載した遺物は写真撮影をし、報告書に掲載した。

＜写真整理＞

野外調査中に撮影した写真は35㎜版と６×７版に分けてネガ・アルバムに、スライドはスライド・ファイルに整理した。いずれも撮影順に整理し、台帳に記載した。遺物写真は撮影順に整理した。

３　報告書の掲載図版等について

＜遺構図版・遺物図版＞

遺構図版は原則として１／40の縮尺とした。また、遺構配置図等一部のものは任意の縮尺とし、そのつど縮尺を記載した。使用したスクリーントーンは凡例に示した通りである。方位記号の北は座北を示す。

遺物の実測は原寸大で行った。しかし、報告書の掲載にあたっては、土器、礫石器は１／３、剥片石器は１／２を原則とし、縮尺が異なるものについてはそのつど縮尺を記載した。

遺物番号は土器・土製品は１から、石器は301から連番を付した。

＜写真図版＞

遺物は原則として１／３の縮尺を用いたが、遺構やその他の写真の縮尺は不定である。遺物番号は実測図番号と同一である。

遺構図版・遺物図版を作成するにあたり、使用したスクリーントーンの種別は以下のとおりである。

地山

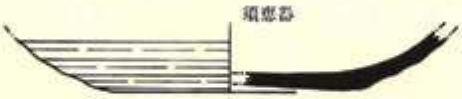
焼土

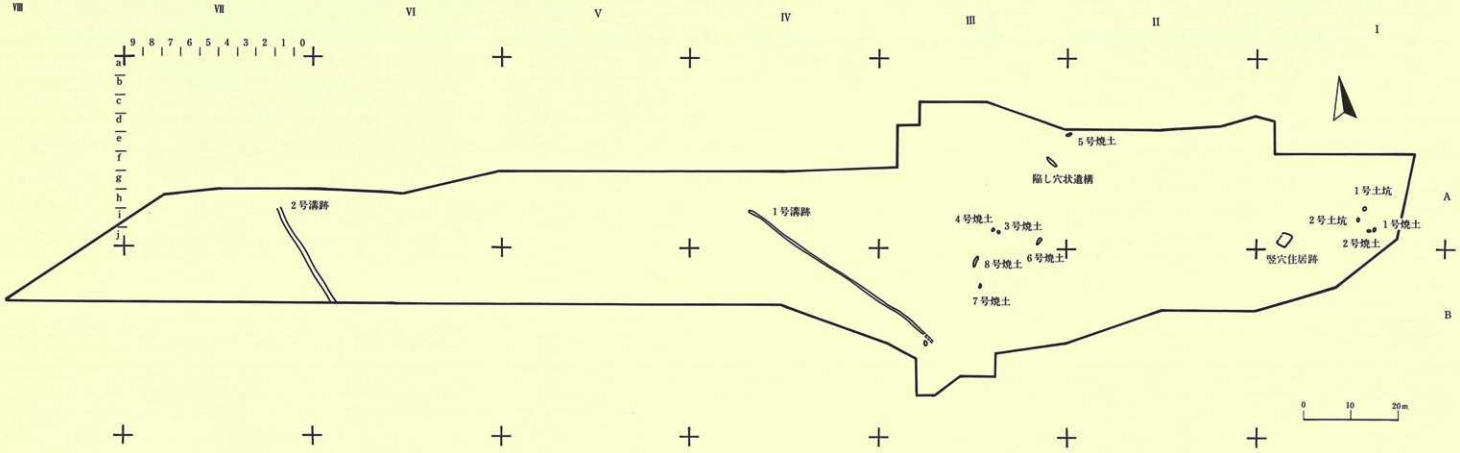
凹面

磨り面

光沢のある面

土器実測図凡例





第8図　梅ノ木台地Ⅰ遺跡　遺構配置図

Ⅳ　検出された遺構と遺物

1　縄文時代～弥生時代

該期の遺構は陥し穴１基、焼土８カ所である。出土した土器の総量はコンテナ５箱、石器206点である。

遺構

陥し穴（第９図、写真図版２）

ⅢＡ８ｈに位置する。同地点は調査区北辺、蛇食い沢から西へ約85m、段丘崖から約60m南の位置である。平面形は溝状、断面形は幅の狭いＵ字状である。開口部で短軸方向は北東を向く。この方向は段丘崖と蛇食い沢とに挟まれた小屋根に向かっている。規模は長さ2.9m、幅35cm、底部規模は長さ2.7m幅10cm、検出面からの深さは53cmである。両端部も側壁もほぼ垂直に近い立ち上がりとなり、崩壊している所はない。底部は水平かつ平坦である。杭跡はない。出土遺物もない。

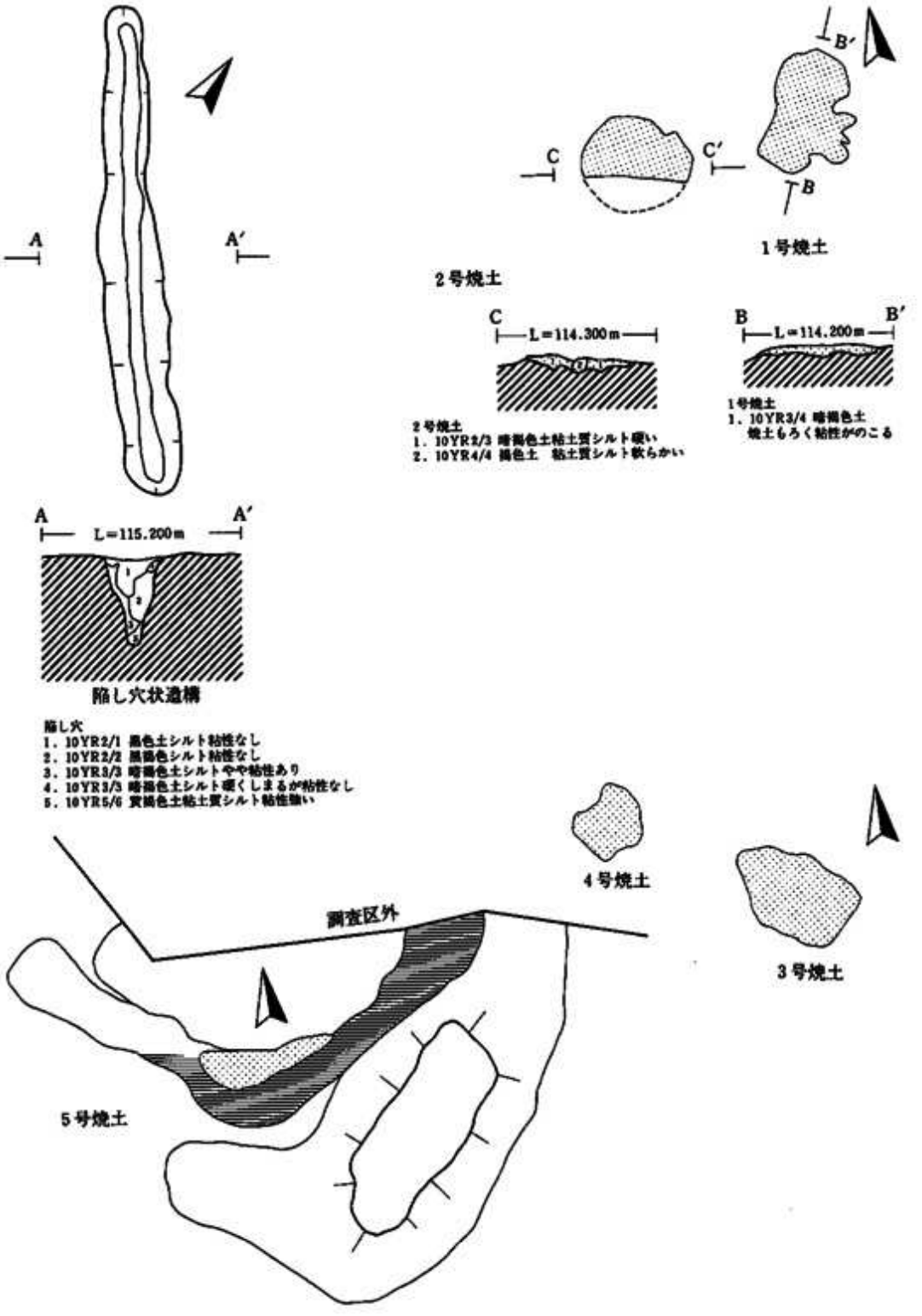
焼土遺構（第９～11図、写真図版４）

ここで取り上げる焼土遺構は層位的にみて縄文時代に属するものと考えるもの８カ所である。位置、形状、規模は表２のとおりである。１号焼土遺構から４号焼土遺構までの４カ所は基盤層（褐色または灰白色の粘土質シルト）直上の黒褐色土から加熱を受けて焼土化したものである。

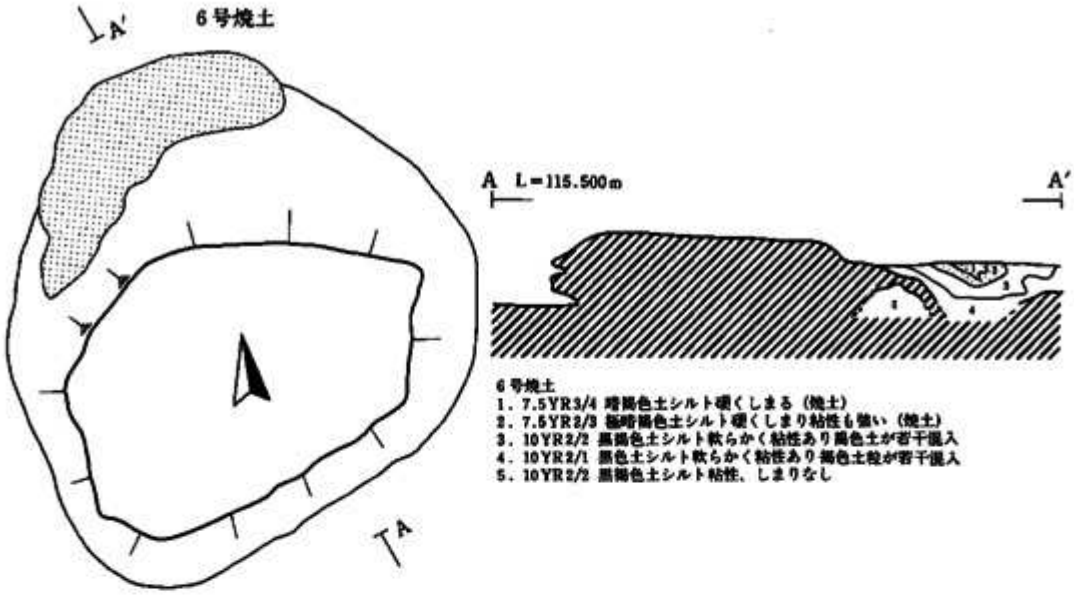
１号と２号、３号と４号は互いに隣接し、ほぼ同様の規模をもつ。周囲に掘り込みや礫を埋設した跡などは全くみられず、共伴する遺物もない。なお、３号と４号は焼土の厚さが１cm未満と薄かったので断面図は省略した。

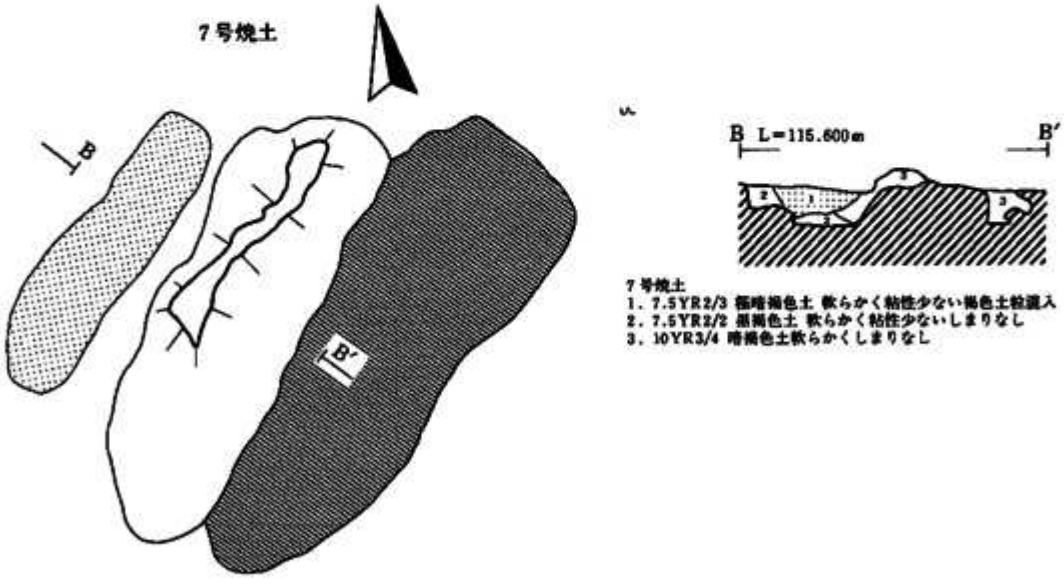
５号から８号までの４カ所は風倒木痕に形成された焼土遺構である。これらはいずれも基盤層の中に潜り込む黒褐色土が焼土化したものである。その周囲の褐色土にはきわめて淡く、薄い焼土が形成されていたが、その範囲は不明瞭であり図化はできなかった。５号と６号は倒れた木の反対側に７号と８号は木の倒れた側に火を焚いているが、いずれの場合も盛り上がった褐色土の西側である。共伴する遺物はない。

これらの遺構が形成された時期であるが、検出された層は大木６式を中心とする土器が出土しているため、縄文前期末葉の頃と考えられる。

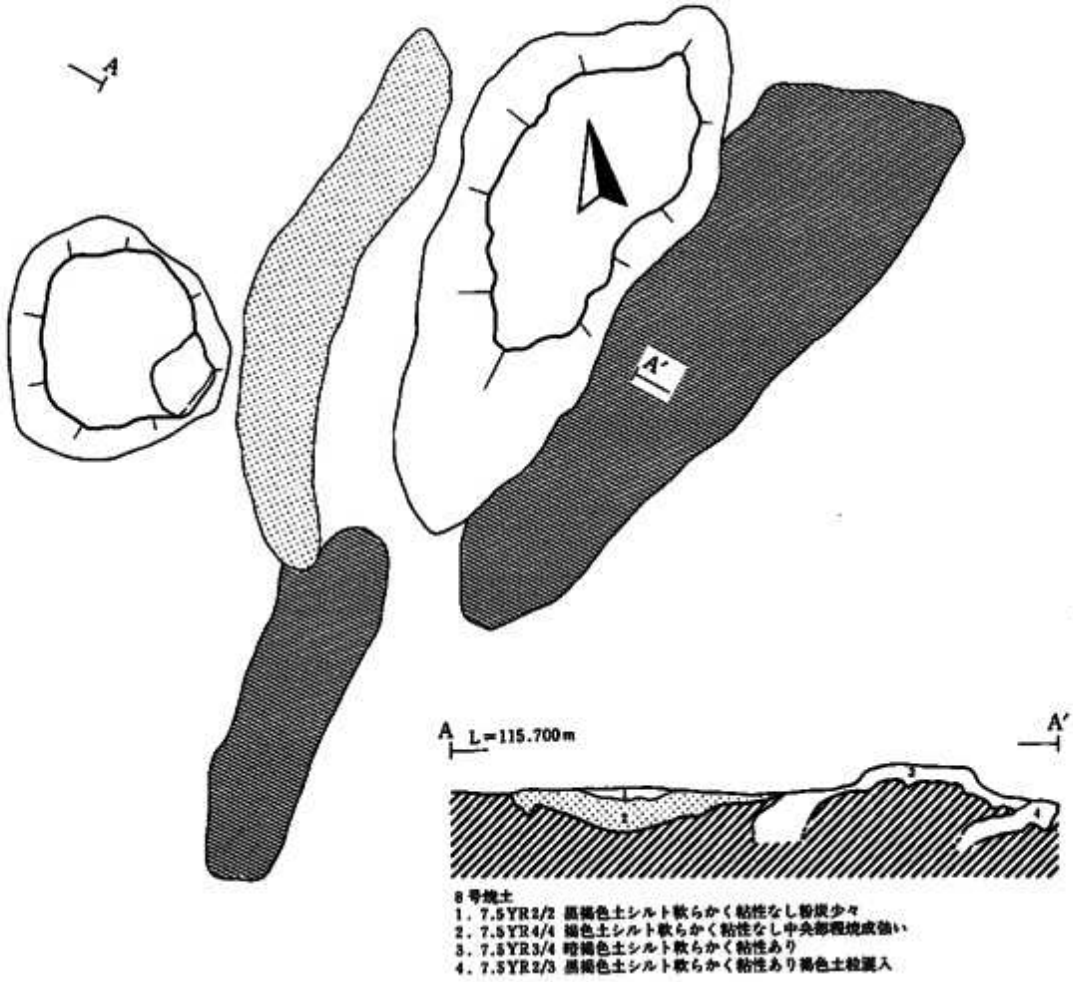


第９図　陥し穴状遺構・１～５号焼土遺構





第10図　6・7号焼土遺構



第11図　8号焼土遺構

第2表　焼土一覧表

	位置	形状	規模		焼成	その他
			平面	厚		
1号焼土遺構	ⅠA3i	不整楕円形	76×45	5	淡	
2号焼土遺構	ⅠA4i	円形	58×63	10	良	
3号焼土遺構	ⅢA3j	台形	44×75	3	淡	断面図なし
4号焼土遺構	ⅢA3i	不整方形	40×30	2	淡	断面図なし
5号焼土遺構	ⅡA9d	不整三日月	75×15	5	淡	断面図なし、風倒木痕跡
6号焼土遺構	ⅢA1j	三日月	190×49	13	良	風倒木痕跡
7号焼土遺構	ⅢB4b	長方形	160×42	12	良	風倒木痕跡
8号焼土遺構	ⅢB4a	不整長方形	295×48	16	良	風倒木痕跡

2　平安時代

該期の遺構は竪穴住居跡１棟である。出土遺物は土師器、赤焼き土器及び須恵器の坏である。

竪穴住居跡（第12図、写真図版３）

＜位置＞ＩＡ８ｊグリットに位置する。蛇食い沢の崖縁までは30ｍである。床面の標高は114.2ｍである。

＜検出状況＞本遺構は表土を除去した段階で、黒褐色土の地山に対してそれより黒ぽい土の広がりとしてとらえられたが、明瞭な輪郭は得られなかった。カマドの芯材として利用された亜角礫の一部は露出していた。検出面から床面までの深さは最大20㎝、平均10㎝程度であり、一部は流失しているところもある。

＜埋土＞黒色土、黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土の４層に大別され、さらに大半を占める黒褐色土は三つに細分される。しかし、土色、粘性等に若干の違いはあるものの基本的には締まりのない柔らかなシルトである。層厚が薄く土層も入り組んではいるが基本的な層序を保っており自然堆積である。埋土内には炭化材、焼土、降下火山灰等は含まれていない。

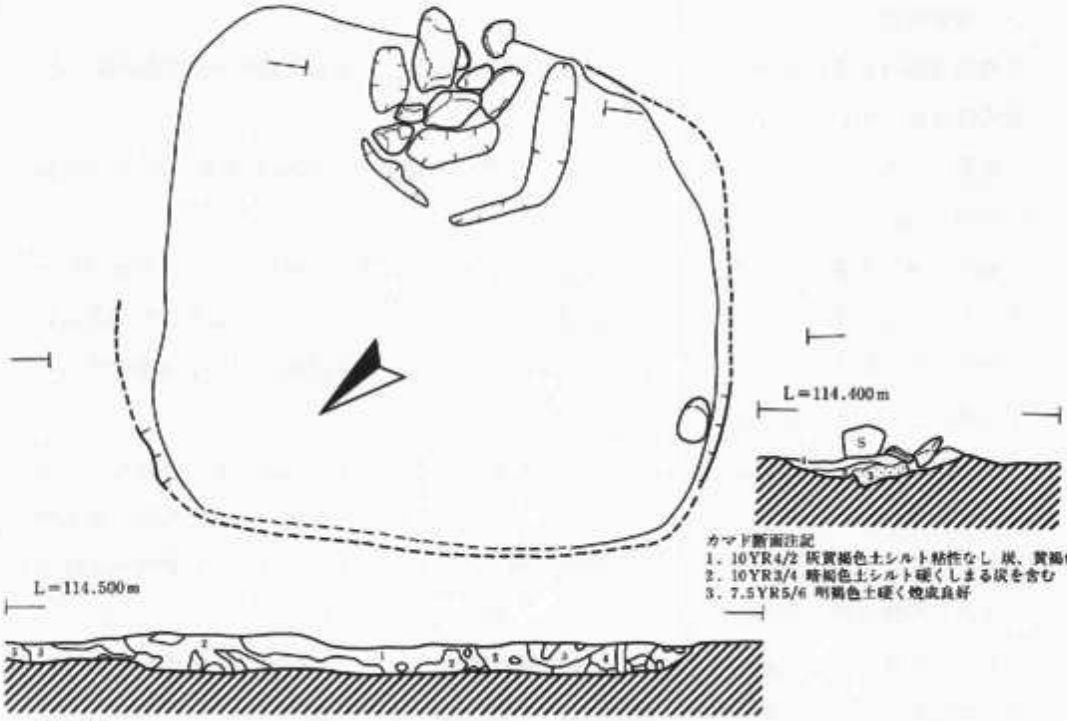
＜形状と規模＞埋土と地山の区別が非常に困難であることや、一部の壁が流失していることから、隅丸方形に近いと思われる。規模は約2.8×2.5ｍと思われる。

＜床＞ほぼ水平かつ平坦である。特に踏み固められた所や土坑等はみられず、貼床もない。灰白色粘土（基盤層）の上面を床としており、やや黒ずんでいる。

＜カマド＞南東壁の中央に設置されている。本体および煙道部はすべて破壊されている。僅かに燃焼部に形成された焼土と動いてはいるが袖部の芯材に使用された亜角礫が残っている。また、焚き口部が想定される所には若干の粉炭が見られる。

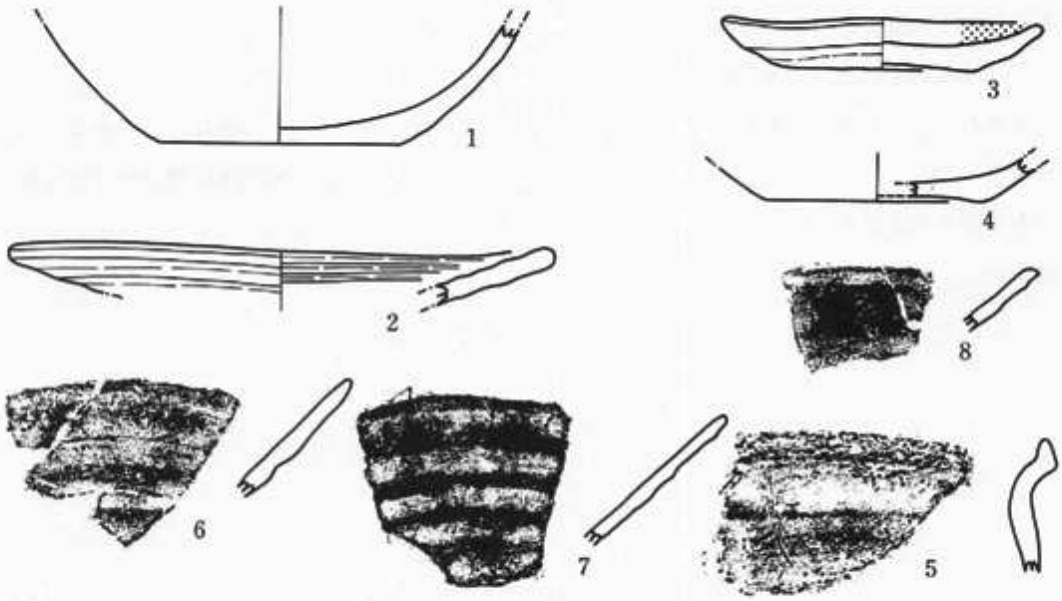
＜遺物の出土状況＞（第12図、写真図版５）

８点の出土である。いずれも土師器である。５は甕の口縁部破片、その他は坏のである。２は底部は欠失しているがロクロ使用成形で皿状の器形である。３は内面黒色処理されほぼ完形であるが２次焼成を受け、風化が著しい。これらは住居跡内に広く分布しており、集中する所はない。



カマド断面注記
1．10YR4/2 灰黄褐色土シルト粘性なし 炭、黄褐色土含む
2．10YR3/4 暗褐色土シルト硬くしまる炭を含む
3．7.5YR5/6 明褐色土硬く焼成良好

住居跡注記
1．10YR2/2 黒褐色土 シルト 粘性ややありしまりなし
2．10YR2/1 黒色土　シルト 粘性ややあり
3．10YR2/2～2/3 黒褐色土シルト 粘性ありややしまりあり
4．10YR2/3 黒褐色土 シルト粘性ありしめりけあり
5．10YR3/3 暗褐色土シルト粘性、しまりなし灰白色の粘土含む
6．10YR3/3 暗褐色土シルトしまりあり黄橙色の粘土塊含む
7．10YR2/2 黒褐色土シルトぼろぼろする
8．10YR5/3 にぶい黄褐色シルト粘性なし黒褐色土粒を含む
9．10YR3/2 黒褐色土シルト粘性ややあり



第12図　竪穴住居跡・出土遺物

3　時期不明の遺構

本項に一括される遺構は土坑２基、溝跡２条である。いずれも時期決定資料を欠き、時期は不明である。

土坑

２基の土坑は隣接し、形状、規模、埋土等ほぼ同じであり同時期のものと考える。

１号土坑（第13図）

＜位置＞調査区東端のＩＡ４ｈグリットに位置する。蛇食い沢の崖縁から約15mである。

＜形状＞平面形は楕円形、断面形は浅い皿状である。

＜規模＞開口部径65cm×85cm、深さ10cmである。

＜埋土＞底部に若干にぶい黄褐色土が混在するが、大部分は黒褐色土である。柔らかく締まりのないシルトである。

＜壁＞やや外傾しながらしだいに立ち上がる。

＜底部＞水平かつ平坦である。

２号土坑（第13図）

＜位置＞ＩＡ４ｉグリットに位置する。１号土坑の南西2.6mに位置する。

＜形状＞平面形はやや不整な楕円形、断面形は浅い皿状である。

＜規模＞開口部径73cm×105cm、深さ15cmである。

＜埋土＞黒褐色の単層である。柔らかく締まりのないシルトである。

＜壁＞外傾しながら立ち上がる。

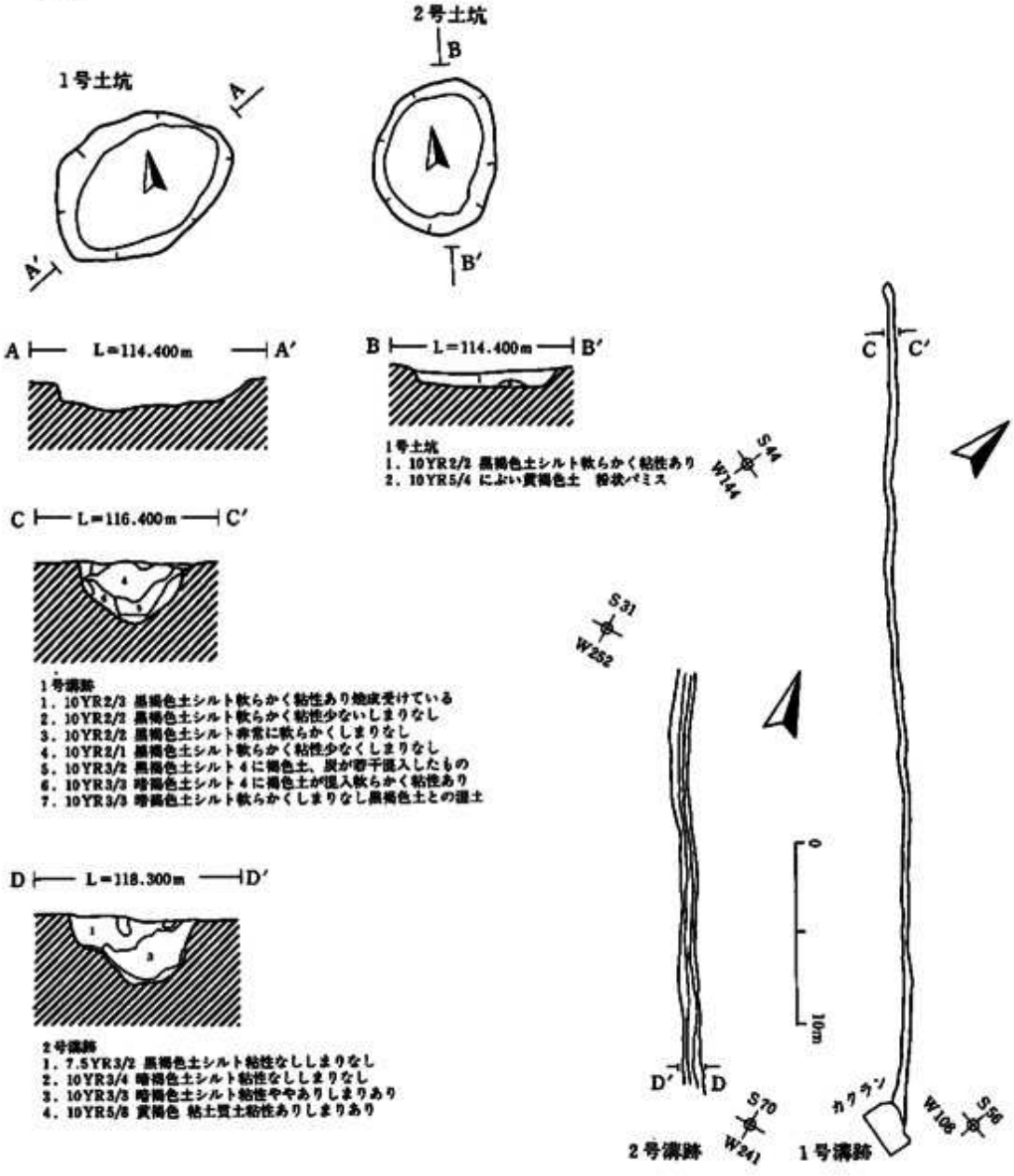
＜底部＞水平かつ平坦である。

１号溝跡（第13図、写真図版４）

調査区のほぼ中央部を北々西から南々東に延びる。表土の草を除去した面で一部を検出したことから、表土直下から切り込んでいるものと思われる。横断面形はＵ字状をなし、底部は基盤層の褐色土を数センチ掘り込んでいる。幅は開口部で55cm、深さ35cm、長さ45cmである。埋土は黒褐色土で柔らかい。埋土と黒褐色の地山との区別は土色では困難である。締まりには相違は認められるが、掘り進めるときの指標とまではなりえず、明瞭に遺構を確認できるのは褐色の地山においてである。南々東の端は抜根によって撹乱されているが、現在使用されている農道に接続し、それ以上は延びて行かない。溝の勾配は殆ど認められず、水が流れていたとも思われないことから地境溝と思われる。埋土などから新しい遺構であるが共伴遺物もなく時期は特定できなかったものである。

2号溝跡

調査区西側で検出され、南東から北西に崖に向かって一直線に延びている。溝の上幅70cm～90cm、深さ40cm、長さ24mである。埋土は黒褐色シルト主体である。断面形はU字状でⅡ層より地山まで掘り込まれている。1号溝跡同様水の流れた形跡は認められない。南東端の埋土から縄文土器（78）が一点出土しているが共伴するものではない。時期、性格については不明である。



第13図　1・2号土坑、1・2号溝跡

4　遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物は縄文土器、弥生土器、土製品、土師器、須恵器等、コンテナ（32×4×30cm）で5箱である。とくに縄文前期末葉、中期初頭の土器が多い。また、土偶1点が出土している。石器・石製品等は206点で礫石器が多い。登録数は土器・土製品157点、石器・石製品206点である。

（1）土器

出土した土器の大半は縄文土器であり、弥生土器、土師器等は少量である。器形、文様等から縄文時代の土器をⅠ～Ⅲ群、弥生土器をⅣ群、古代以降をⅤ群に分類した。

Ⅰ群　前期に属する土器（第14・15図、9～40、写真図版5～6）

中期に続いて比較的出土量が多い。前期の中でも末葉の土器群である。

a類　大木5式に併行するもの（9～13）

9は口縁部で交互刺突文、10は口縁部に粘土紐貼付による鋸歯状文、11、12は鋸歯状沈線がそれぞれ施文される。13は体部に粘土紐による隆帯をもつ。

b類　大木6式に併行するもの（14～40）

14～25は口縁部または頸部に平行または波状の沈線を有するものである。14は平行沈線と鋸歯状沈線、15、16は口縁部がやや外反する山形口縁でコブ状突起と2本同時沈線による鋸歯状文が施文される。17～18は波状の沈線が施文される。17は頸部から口縁にかけて内弯し口縁は強く外反する。また、口縁部に縦位に粘土紐が貼付される。19～21は平行、波状沈線が施文され21は体部に結節羽状縄文が施される。22～25は頸部に平行または波状の沈線が施文される。

26は口縁部に逆三角形状の沈線が描かれ、頸部には木目状撚糸文が縦に施文される。

27～28は同一個体である。28は口縁に沿うように沈線が伸びさらにその下に横位の沈線と押し引き文あるいは刺突文が施文される。また、波状口縁部の波頂部下に瘤状突起が貼付される。

29は体部に縦位の綾絡文が施文される。

30～32は半截竹管による刺突文が施文されるものである。30は口縁部の2本の沈線間に半截竹管刺突文が、31は頸部破片で横位の半截竹管刺突文が施文される。32は体部から頸部にかけての破片である。上部は平行沈線が施文され、下部に粘土紐が貼付される。それらの間に刺突文がみられる。地文はＲＬ縄文である。

33～40は半截竹管による平行沈線が施文されるものである。33は体部上半部で、半截竹管による大波状の沈線（3単位）が描かれる。波状の底部と頂部はコンパス文がみられる。34は頸部で弧状沈線の一部、弧状の沈線との接続部分から縦位に2本の沈線とその両側に小波状形の沈線が描かれる。地文はＬＲ縄文である。35は菱形状に3～5本の沈線が描かれる。地文は縦

に羽状縄文が施文される。

36と37は同一個体とみられ、ＲＬ縄文に４本の沈線が施文され、沈線が交差する部分にボタン状突起が貼付される。39は体部で縦位の沈線を中心として斜位または弧状に平行沈線が施文される。一部に竹管背面による２本の弧状沈線もみられる。40は縦位に垂下する沈線を中心として山形状に沈線が横位または斜位に施文される。地文は無文である。

Ⅱ群　中期に属するもの（第16～18図、41～87、写真図版６～８）

本遺跡で最も多量に出土した土器群である。

ａ類　大木７ａ式に併行するもの。

41～48は、口縁部がほぼ直立するものである。41～45は同一個体で粘土紐を貼付し、その中に半裁竹管による斜め沈線と刺突文がみられる。46は口縁部が折り返され地文は無文。47、48は複合口縁である。47は地文はＬＲ縄文である。

49～51は、口縁がいくぶん内弯するものである。49は口縁に結節羽状縄文が施文され、口縁部下部には横位に太い沈線状の区画があり、半円状の一対の粘土紐が貼付される。50は綾絡文が横位に施文。51は綾絡文が横位に施文され、「へ」の字状の粘土紐と２個一対の突起が貼付される。

52～53は、胴部から頸部にかけてやや内弯し口縁がわずかに外反するものである。52は肥厚した口縁部に３本の太めの沈線が横位に引かれる。頸部には半裁竹管による小波状の沈線と平行沈線が施される。また、横位の沈線を区画する縦位の沈線もみられる。53は頸部に段をもち、口縁端部に縦に刻み目があり、その下に半裁竹管による浅い沈線が口縁下部まで４～５㎝の幅で施される。

54～57は口縁が外反するものである。54はなだらなか小波状口縁と思われる。肥厚した部分には竹管背面による太い沈線がみられ、その下端から半裁竹管による平行沈線が巡り、さらにその下は小波状沈線が胴部まで施される。55は頸部に刻みの入った隆帯が貼付され、その上部に文様帯がある。文様帯は太目の沈線で上下に分かれ弧状沈線と斜向沈線が向かい合うように施文される。56と57は頸部に粘土紐の隆帯をもつものである。56は口縁部から頸部にかけて弧状の沈線が施される。体部には縦位に綾絡文が施文される。57は口縁が強く外反し隆帯から上は無文、下は多軸絡条体が施文される。

58～60は、胴部が球状に膨らむ器形で胴部から頸部にかけて強く内弯し、口縁がやや外反するものである。これらは同一個体で口縁部上下に半裁竹管による平行沈線を横位にひき、その間に刻み目をいれてる。また、その平行沈線間に鋸歯状文が施文される。

61は小型鉢で頸部から口縁部にかけて内弯し口縁部上部で外反するものである。撚糸文施文。

内側に不整の撚糸文がみられる。

62～76は頸部及び体部破片類である。62～64は同一個体で太い沈線で三角形状の文様帯を区画し、沈線内に刻みを施している。66は棒状工具による刻みを施した粘土紐を縦位に貼付している。67、69、72は胴上半部が球状に膨らみ円筒形の胴下半部に続く器形の一部分である。67は綾絡文が縦位に施文される。68は上部は刺突文その下部に棒状工具による沈線が7状横位に施文される。69、72は地文はＬＲ縄文。70は木目状撚糸文。71は綾絡文が横位に施文される。73、74は同一個体で半截竹管による逆Ｕ字状の沈線がみられ、刻みのついた粘土紐が貼付される。75、76は渦巻き状の粘土紐が貼付される。77は縦位の綾絡文が施文される。

ｂ類　大木７ｂ式に併行するもの（78～85）

78は口唇部に刻み目があり地文は縄文である。79は肥厚する波状口縁部分に粘土紐を貼付し、隆帯上に原体の側面圧痕を施している。80は口縁貼付太めの沈線施文。81は波状口縁部分円形の沈線。82は波状口縁上部で渦巻き状を基調とした粘土紐が貼付される。口唇部分は太めの沈線を施している。83、84は折り返し口縁である。

ｃ類　大木９～10式に併行するもの（86、87）

86、87は体部で曲線状の沈線が施文されている。また、沈線と沈線の間に磨消部分がみられる。

Ⅲ群　晩期に属するもの（第18図、88～91、写真図版８）

88は山形口縁部Ａ状突起がみられる。89は口縁部から体部にかけての部位で下半は欠失している。注口土器状の器形をしており内外面丁寧に磨かれ黒斑がある。90は上部に連続刻みの文様、その下部には縄文が施される。大洞Ｃ１式に併行するものと思われる。91は小型鉢と思われる土器の口縁部で口唇部羊歯状文が、また、口縁部から体部にかけて連続刻目文が施文される。大洞Ｂ－Ｃ式である。

Ⅳ群　縄文時代の土器ではあるが時期不明のもの。（第18・19図、92～112、写真図版８）

92、93は多軸絡状体回転文施文である。94は横位の平行沈線、95、96は羽状縄文、97は不正撚糸文、99横位の綾絡文、108は付加状、109～112は底部に網代痕が施文される。

Ⅴ群　弥生時代に属するもの（第20図、114～136、写真図版９）

弥生土器は９号袋にして３袋分出土しているが細片が多く器形が推定できるように復元できたものはない。いずれも撚糸文施文が多い。

114～119口縁部片である。114、115、116はやや肥厚した口縁で斜位に撚糸文が施文、117は

頸部がやや屈曲し口縁部がいくぶん外反する器形と思われる。原体を結束し回転施文していると思われる。118は重菱形文の一部とみられる沈線が施文されている。121と同一個体と考えられる。119は口縁部無文口唇に沈線がはいる。

120～129頸部～体部片である。120は上部に沈線があり、横位に撚糸文が施文されている121は無文帯に竹管による重菱形文が施文される。122は116と同一個体であり沈線を用いたた区画内に撚糸文が施文されている。123は頸部無文で体部はＬＲ縄文が横走する。125と同一個体と思われる。124は頸部の括れ部分で、括れ部分を除きＬＲ縄文が施文される。126は撚糸文が縦位に、また、127は斜位に施文されている。

130～136は、底部破片である。132はＬＲ縄文施文。そのほかは撚糸文施文である。

Ⅵ群　古代に属するもの（第20図、137～145、写真図板９）

若干量の出土であり、かなり摩滅しており、接合できたものは極僅かである。(137～145)

137、138は須恵器の坏破片である。

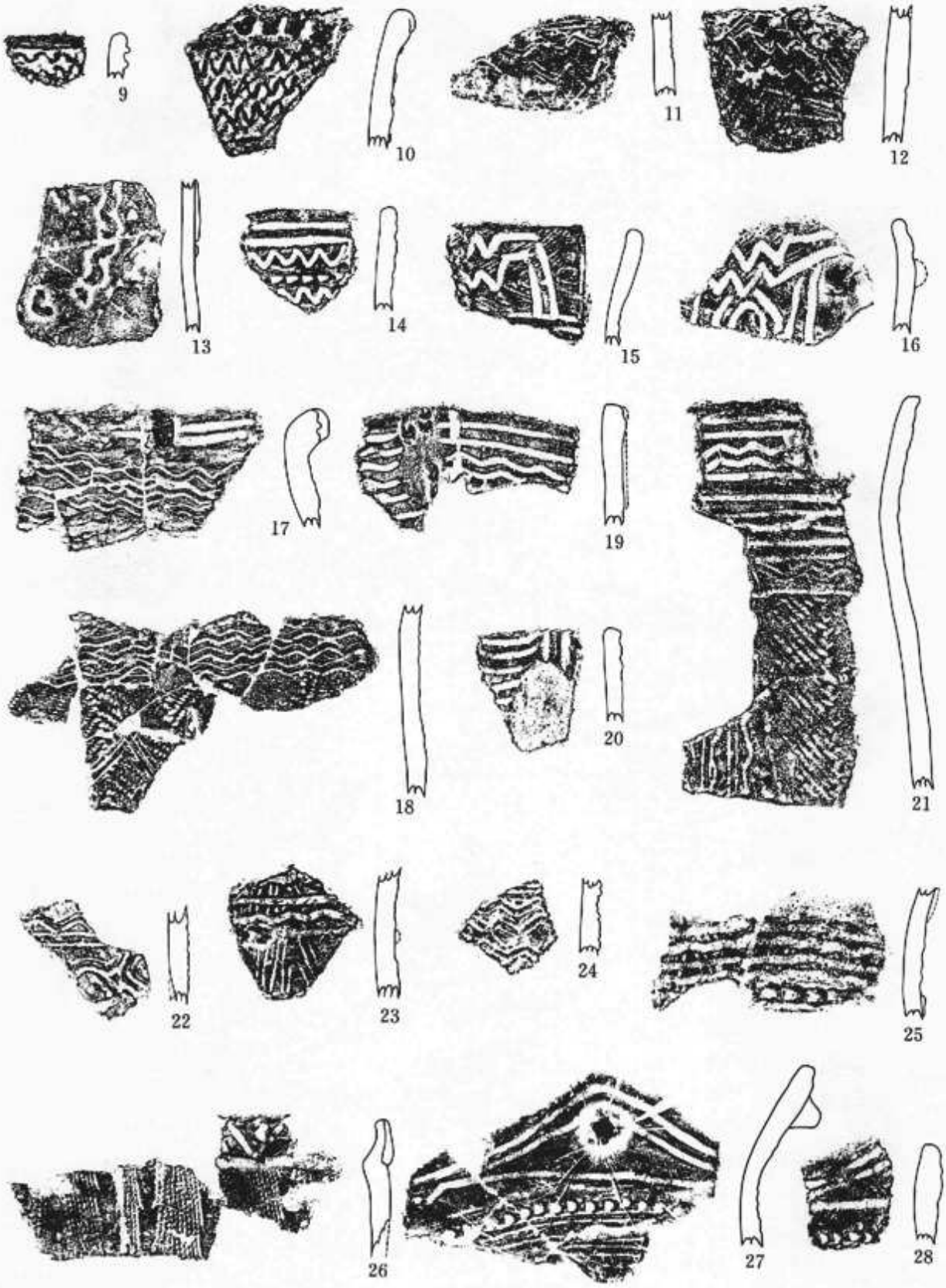
139～143は土師器の坏でロクロ使用、142は内面黒色処理されている。

144、145は土師器の甕の底部分で内外面ヘラナデ調整がみられるが非常に雑である。また、144の底面には木葉痕がみられる。

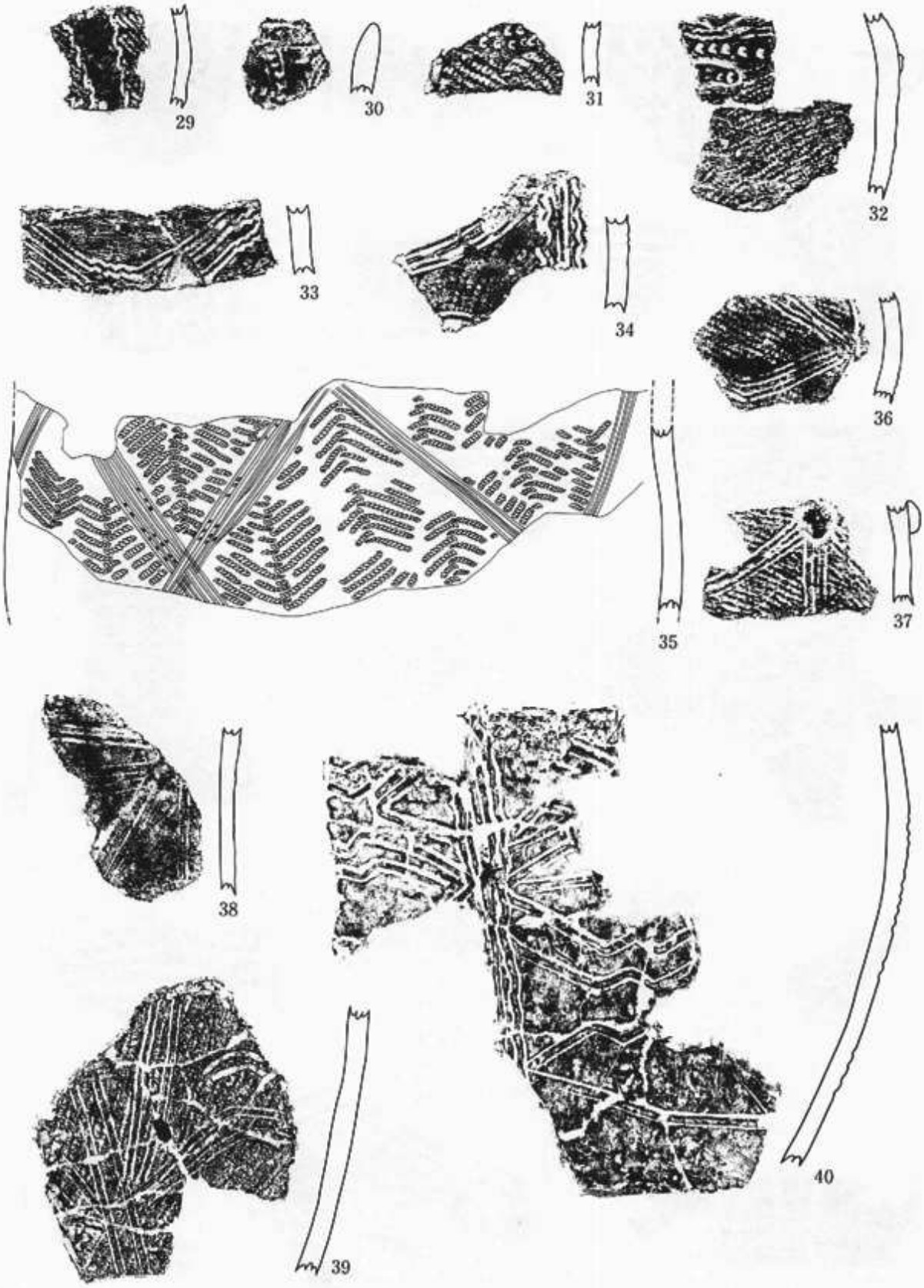
134、133、98は住居跡周辺からの出土であり、他は調査区西端の崖面に近い所からの出土である。

（２）土偶（第19図、113、写真図版９）

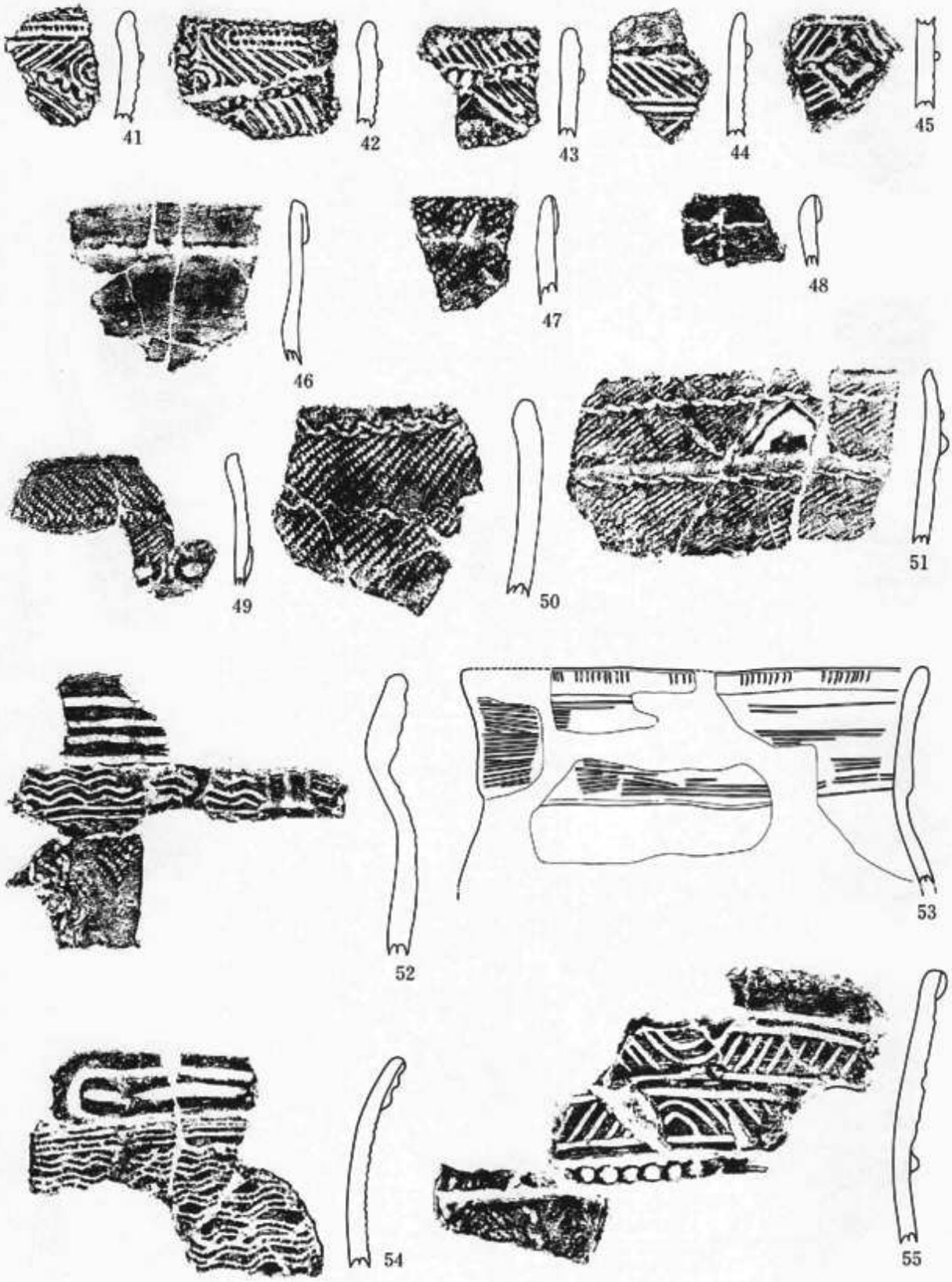
113の１点の出土である。身部長8.7cm、幅4.5cm、厚さ1.8cmの板状土偶である。腕と脚部 は欠失している。目の部分は穿孔され胸部に半月状に、また、背面には左右対称の鋸歯状文様が、それぞれ沈線によって施文されている。片側側面に２本の沈線が施文される。類例から前期に属するものと思われる。



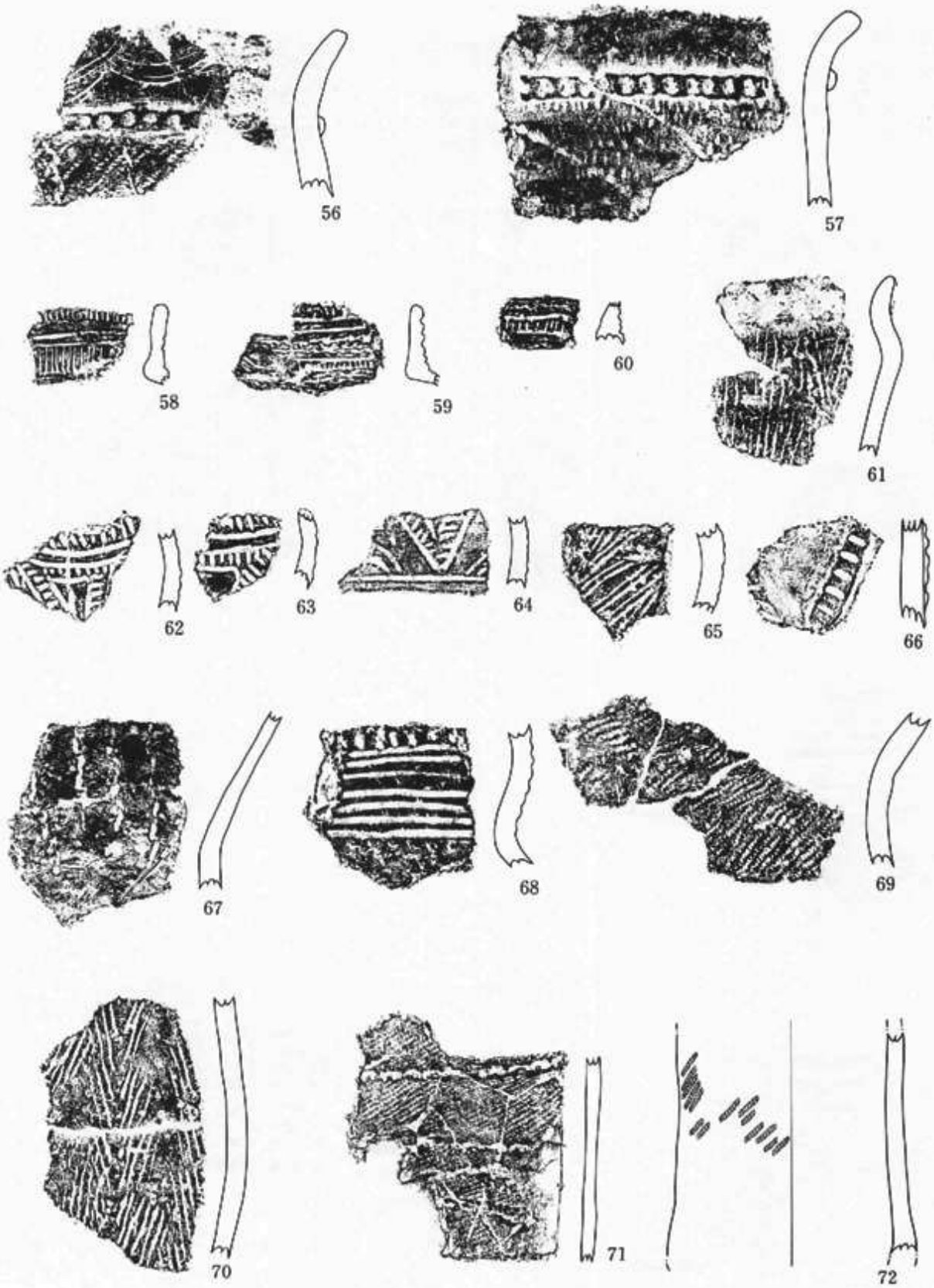
第14図　遺構外の出土遺物 土器 1



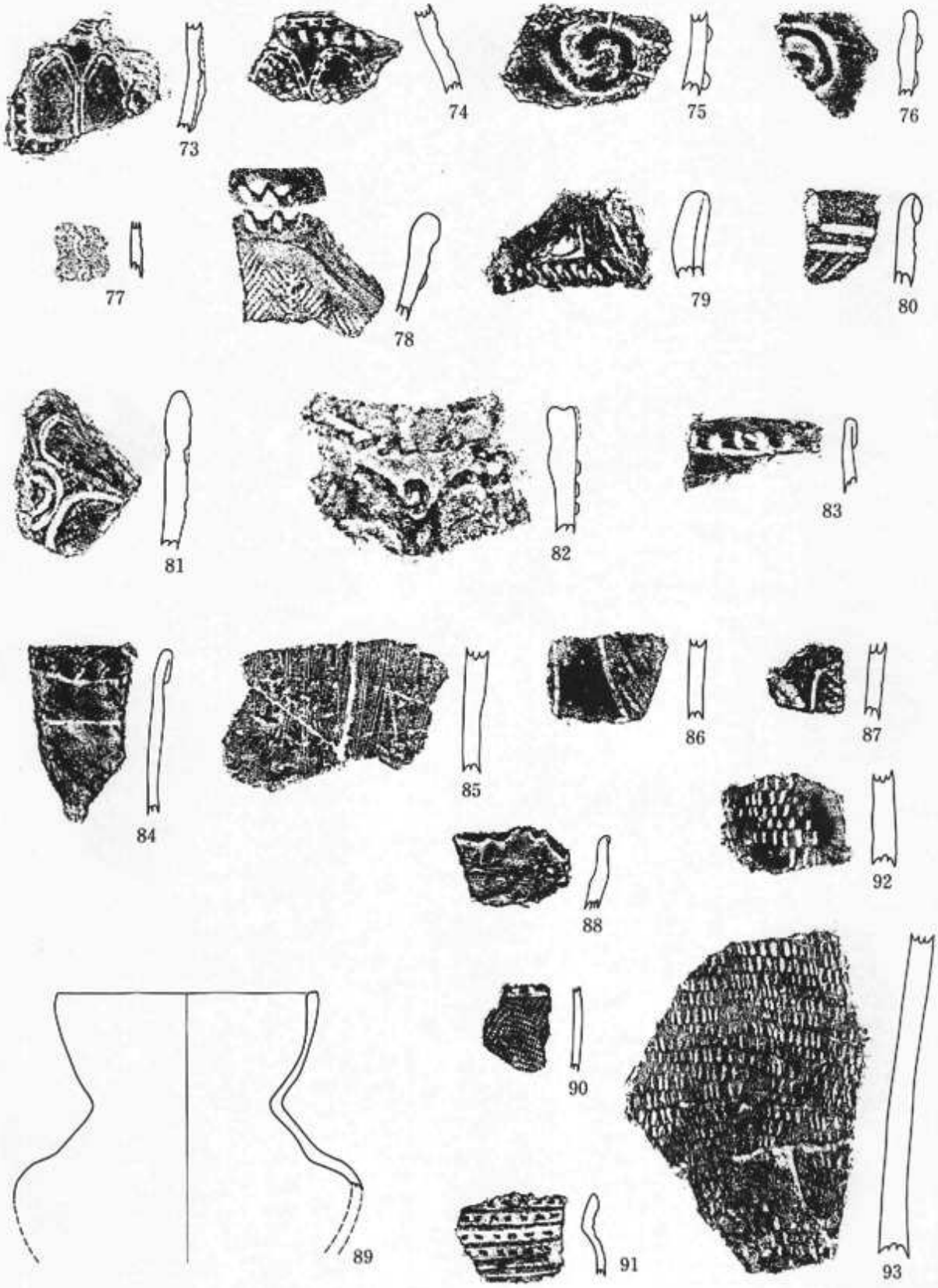
第15図　遺構外の出土遺物 土器２



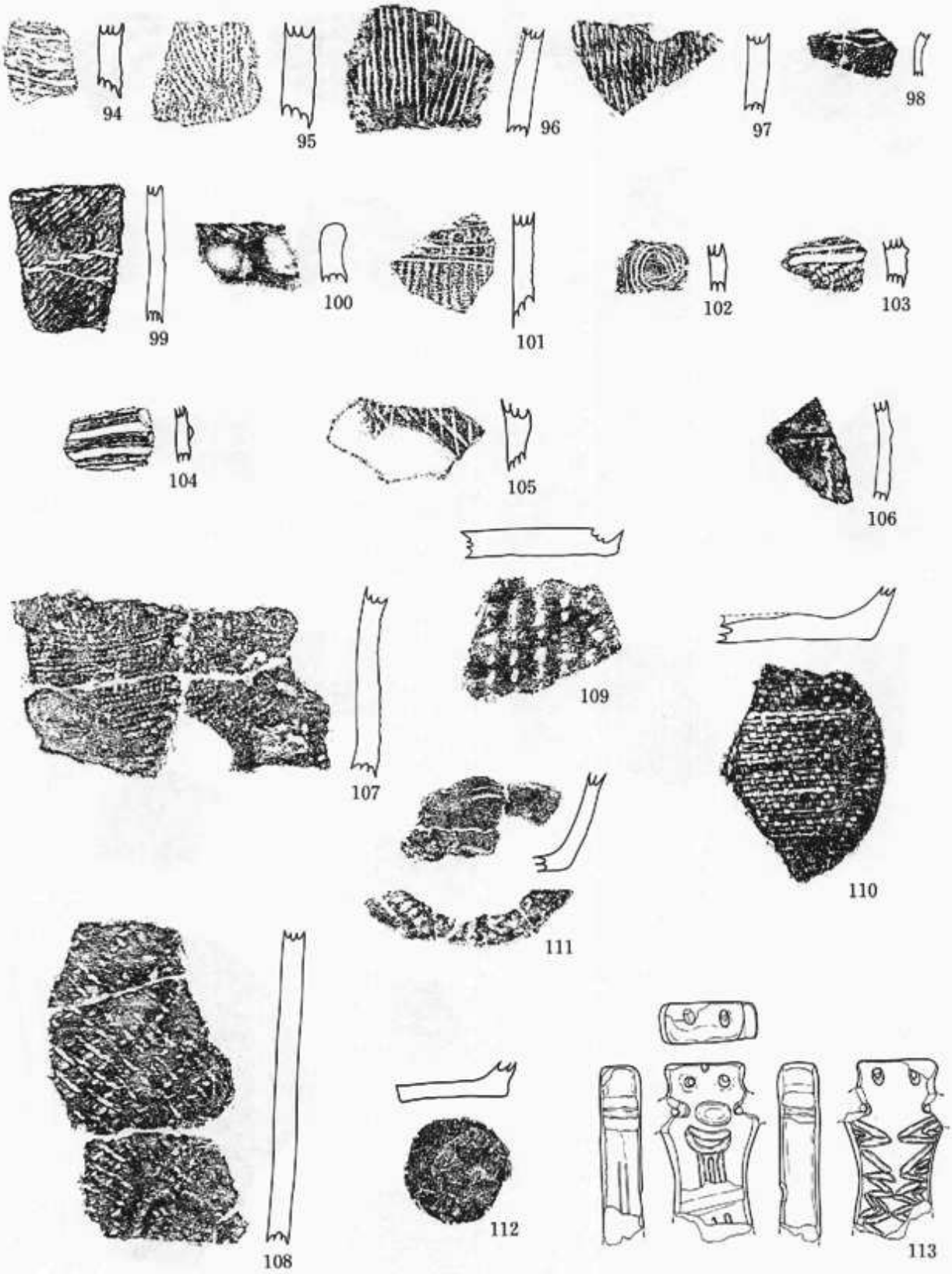
第16図　遺構外の出土遺物 土器3



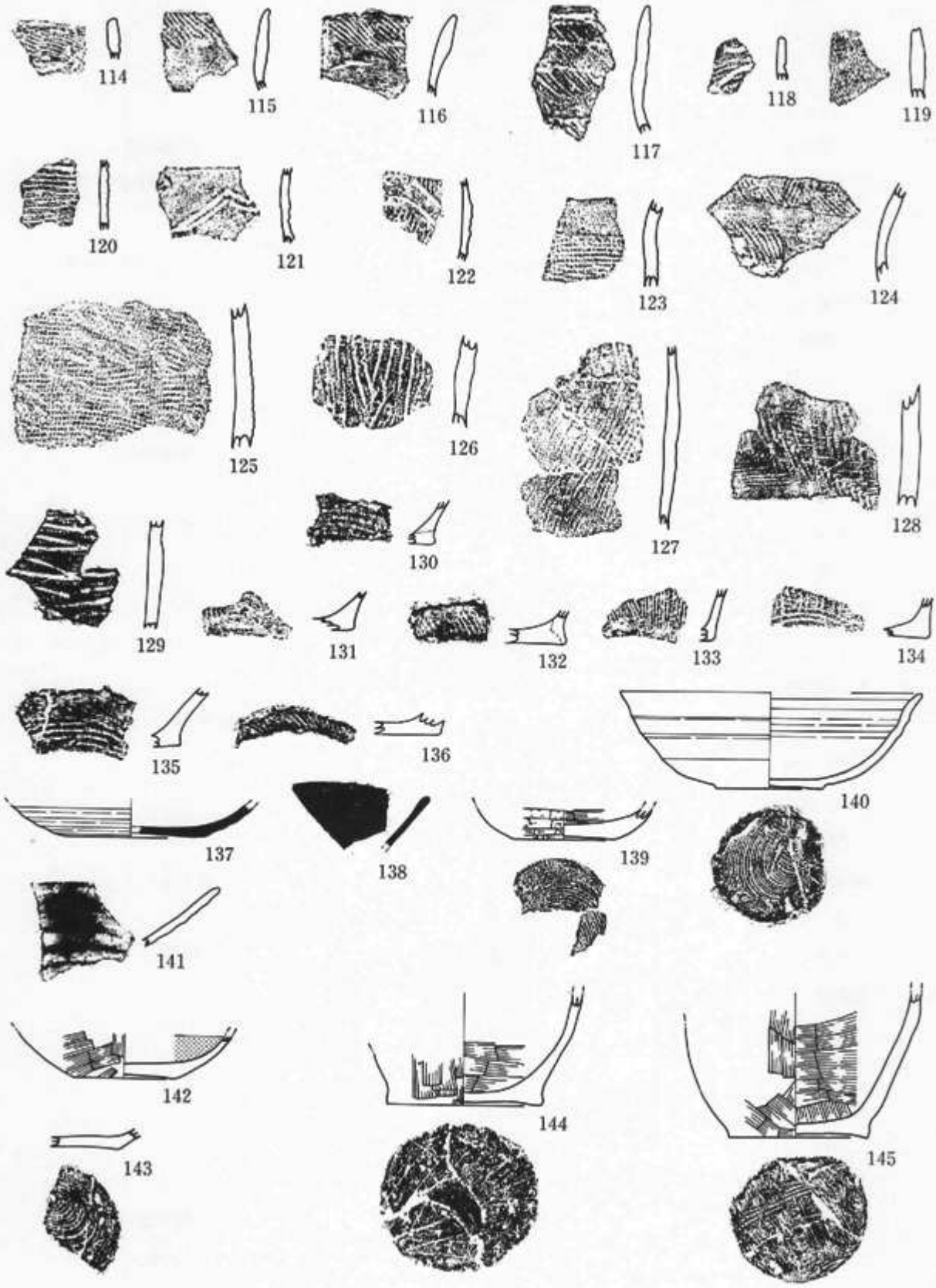
第17図　遺構外の出土遺物 土器４



第18図　遺構外の出土遺物 土器5



第19図　遺構外の出土遺物 土器６土偶



第20図　遺構外の出土遺物 土器７

（3）石器・石製品

本遺跡から出土した石器、石製品は剥片石器類（石鏃、石匙、篦状石器、不定形石器）は31点、礫石器類（石鍬、石斧、磨石、石錘、凹石、敲石、石皿、砥石）172点、両面調整石器1点、石製品3点である。礫石器類の中でも石錘66点出土し全体の31.9%を占める。

ほとんどはⅡ層（一部Ⅲ層）からの出土であり、すべて実測し掲載した。なお、石器・石製品一覧表、石質集計表を後に掲載した。

1　石鏃（第21図　301～308、写真図版10）

8点の出土である。301～305は基部に抉入を有する凹基無茎鏃である。301、302は抉入が浅く、303～305は深い。形状は二等辺三角形を呈す。306、307は平基無茎鏃で先端が欠損している。307の形状は他より細身の二等辺三角形である。308は基部が丸みをもつ円基鏃である。

2　石匙（第21図　309～312、写真図版10）

4点の出土である。いずれも縦型石匙である。310は抉入部の幅が2.7cmと他より幅広くなっている。いずれも片面調整で両縁調整されている。

3　篦状石器（第21図　313～314、写真10図版）

2点の出土である。314は欠損している。313、314ともに両面調整を施しているが雑である。

4　不定形石器（第21～22図　315～330、写真10図版）

不定形な剥片に細部調整を施したものを一括した。形状、大きさ、刃部加工の仕方によって4つに細分した。

a類　削器・掻類器

12点の出土である。315～320は片縁細部調整、321、322、323は片面・両縁細部調整、324は両縁調整が施されている。325は刃部部分調整、326は横長剥片で片面細部調整を施している。

b類　抉入石器（ノッチ）

2点の出土である。327、328はノッチ部分は数回の剥離調整がみられるほか両面の一部に細部調整がなされている。

c類　細部加工剥片（リタッチド・フレイク）

329、330の2点である。両面のごく一部に細部調整がみられる。

5　石斧（第23～24図　331～340、写真図版11）

打製石斧と磨製石斧が出土している。

a類　打製石斧

7点の出土である。形態からみると多少の違いはあるが撥形に分類されるものである。333～335は完成品であるが331、332、336、337は欠損している。いずれも両面加工が施されている。完成品をみると刃部はほぼ円刃である。333は刃部摩滅痕跡がみられる。

石質は331は粘板岩、332、333、335、336、337は流紋岩である。

b類　磨製石斧

3点の出土である。338は断面形が隅丸方形状を呈し、刃部は両刃である。339は欠損しているものの338同様の断面形態であろう。340も基端が欠損しているが同様である。刃部の形態は338は両凸刃直刃、340は両凸刃偏刃となっている。

6　磨石（第24～28図　341～388、写真図版12～14）

自然礫を素材として、その縁辺または平面を研磨に用いたため、その使用痕が研磨面として残っている石器である。また、敲打痕も同時に合わせ持つものが多いが磨石として一括した。34点の出土である。棒状あるいは偏平な自然礫を素材としていることから、素材の形状と横断面形の形状等を考慮しながら3分類した。

a類　横断面形が三角形に近いもの

棒状あるいは三角柱状の縁辺や稜部を使用している。341～352は1面だけに磨面がみられる。353～355は2面または3面の磨面がみられる。356～365は磨痕、敲打痕の重複の使用痕のあるものである。360は磨痕と凹状の痕跡があり、362は磨痕、敲打痕、凹状の痕跡、363は2面の磨面と敲打痕がそれぞれみられる。

b類　横断面形が楕円形および不整のもの

366、369、370は自然礫の広い面を使用しているのである。368、374、372は複数の使用面がみられる。また、366、372は礫の先端部に使用痕が施されている。

c類　素材の形状が偏平状またはそれに近いもの

375～382は2面および複数の使用痕があるものである。375はとくに光沢を帯ている。383～388は1面だけの使用痕である。

7　敲石（第28～29図　389～394、写真図版14～15）

棒状又は偏平、球状の礫の先端部および縁辺部に敲打痕を有するものを一括した。389～391、394は棒状の礫の先端部に敲打痕を有する。393は磨面と敲打痕の重複する使用痕がみられる。

8　凹石（第29～32図　395～422、写真図版16～17）

自然礫に磨り凹める、または敲打して凹めた結果できた凹を有するものである。

a類　凹だけの使用痕をもつものである。

395～403は片面1個の凹を有するものである。404～407は両面に1個ずつ、408～410は2個以上の凹を有するものである。

b類　凹と磨痕の重複する使用痕を有するものである。

411～422の12点である。素材は偏平な楕円礫で、全て片面だけでなく、複数面の使用である。

9　**石皿**（第32・33図　423～429、写真図版17）

中央を凹めた皿状の石器である。

7点の出土である。423は欠損であるが高い縁がみられる。421は明瞭な縁はみえないが中央部が僅かに凹み滑らかである。

10　**礫石錘**（第33～37図　430～496、写真図版18～19）

偏平な自然礫に結縛用の打つ欠き痕跡が長軸および単軸方向に施されているもの。打ち欠きされる部位によって2分類した。

a類　長軸方向に打つ欠いたもの。(430～476)

47点の出土である。計測値の平均をみると長さ7.4cm、幅5.9cm、厚さ1.9cm、重量113.7gである。なお、重量別では100g未満は18個、100g以上26個、200g以上3個であり、最大250g、最小60gである。457、475、476は片面または両面に磨り痕跡がみられる。また、446はざらざらした溝状の痕跡が施されている。

b類　短軸方向に打ち欠いたもの。(477～496)

19点の出土である。計測値の平均をみると長さ5.7cm、幅7.5cm、厚さ1.8cm、重量104.2gである。重量別では100g未満8個、100g以上10個、200g以上1個であり、最大250g、最小50gである。480、495はざらざらした溝状の痕跡がある。また、496は凹みがみられる。

11　**砥石**（第38図　497～502、写真図版19～20）

研磨痕跡あるいは擦り痕跡がみられるもの。497は偏平な自然礫を素材としている。片面に磨り痕状の浅い研磨痕跡がある。501は両面に細長い幅5mmくらいの帯び状の凹をもつ擦り条痕がみられる。498～500、502は複数面が研磨され、線状の擦り痕がみられる。石質は流紋岩である。

12　**両面調整礫器**（第40図　504、写真図版20）

504の1点の出土ある。粘板岩を偏平に打ち欠いたものである。

13　**石製品**（第38図　503、505～506、写真図版20）

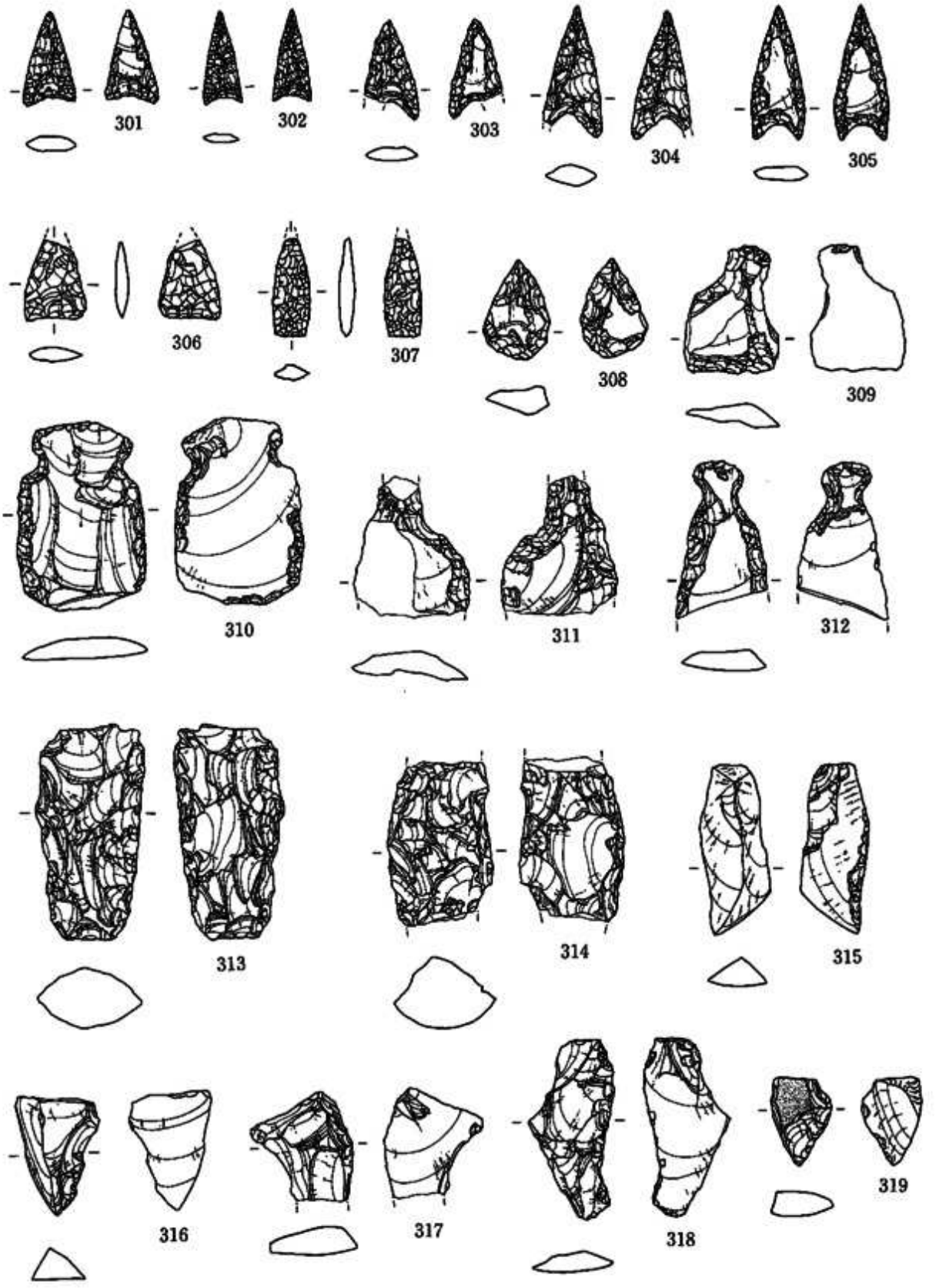
3点の出土である。503は自然礫の縁側の一部を欠いている。505は石質は硬質泥岩で風字硯の一部分と思われる。506は円盤形の有孔石製品である。重さ40gで中央部に両面から穿孔され、両面ともに丁寧に研磨されている。また、全周に網目状の擦痕が施されている。紡錘車と思われる。

小結

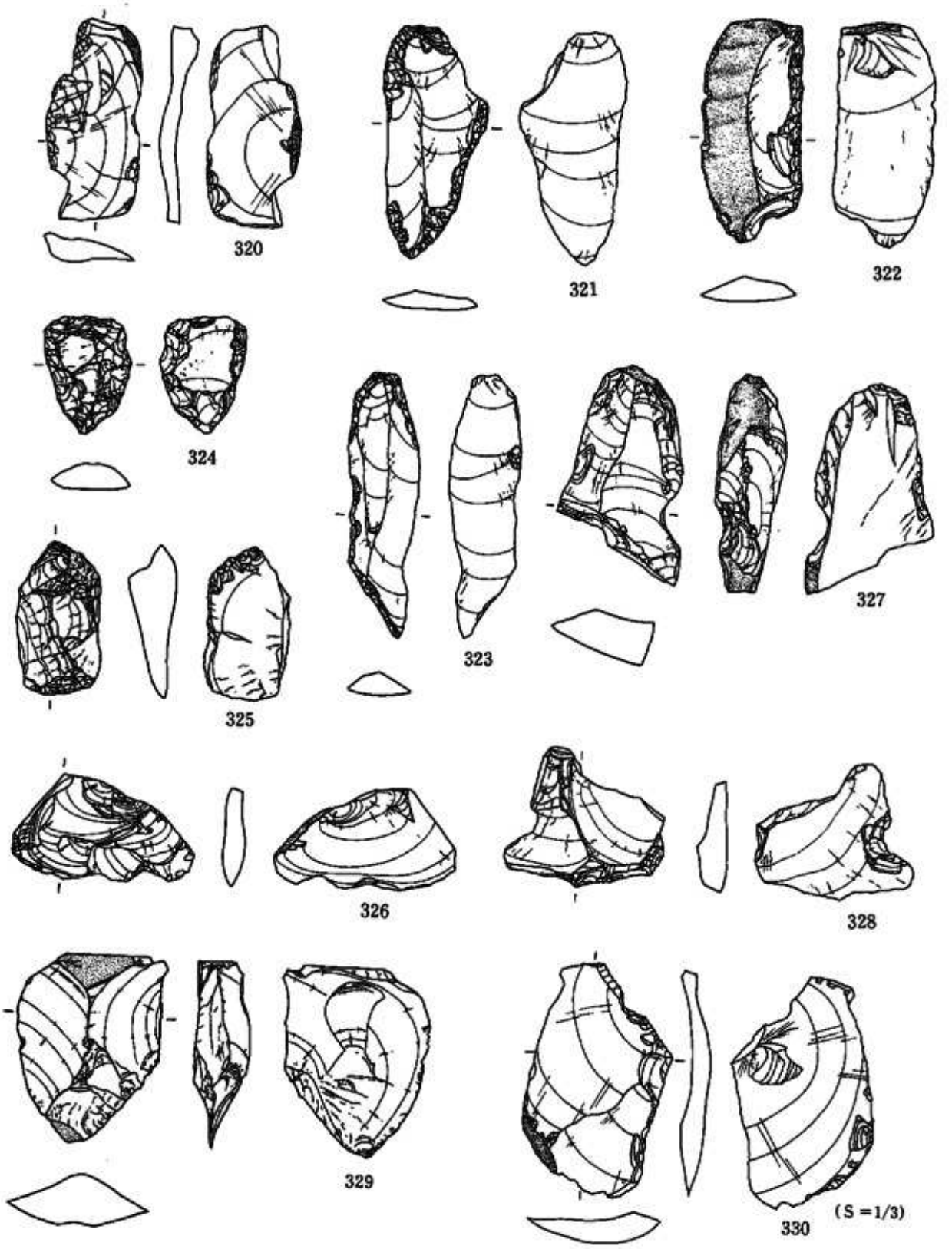
本遺跡で出土した石器及び石製品についての石質は第3表のようになっている。剥片石器は流紋岩、珪質泥岩、細粒凝灰岩、珪長質凝灰岩、鉄石英、粘板岩を素材としている。石錘は緑色凝灰岩（34個）、輝石安山岩（22個）が際立っている。磨石や凹石などはいろんな種類の石を素材としていることがわかる。なお、産地としては大部分が奥羽山脈で北上山地は数点だけである。

第3表　石質集計表

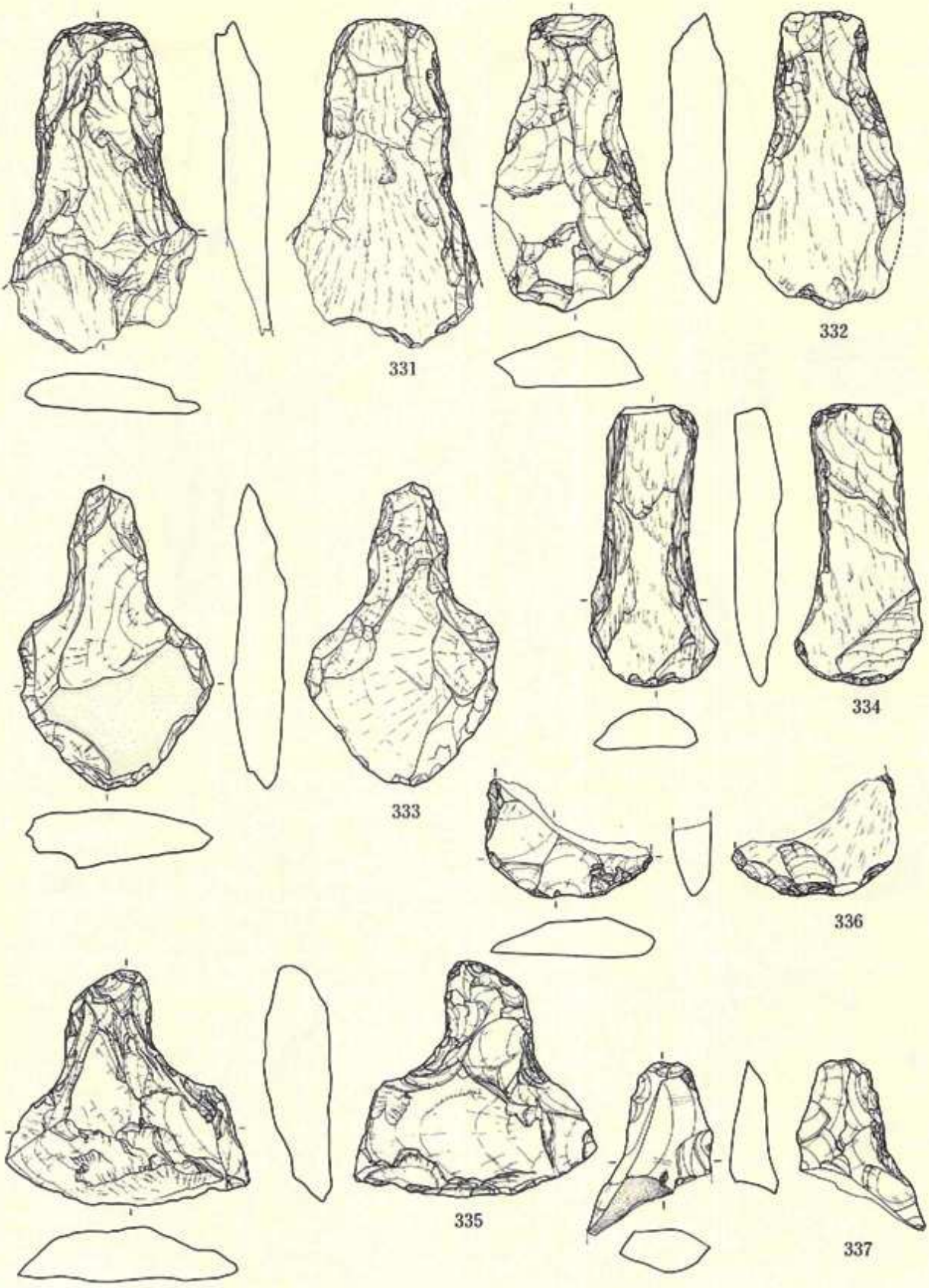
No.	器種 ＼ 石質	石鏃	石匙	篦状	不定形	リタッチドフレ	石錘	石斧	磨石	敲石	凹石	石皿	砥石	石製品	両面調整剥片	計	割合%
1	流紋岩	2	2					5					3			12	5.8
2	珪質泥岩	1			2											3	1.5
3	硬質泥岩	1	2	1	2	1	2	2					1	1		13	6.3
4	細粒凝灰岩	1		1	7											9	4.4
5	珪良質細粒凝灰岩	2			1											3	1.5
6	鉄石英	1			2											3	1.5
7	粘板岩					1		1	2					1		5	2.4
8	緑色凝灰岩						34	2	6		8		1	1		52	25.2
9	輝石安山岩						22		16	2	12	3				55	26.7
10	凝灰質砂岩						9									9	4.4
11	デイサイト								1							1	0.5
12	プロピライト								4	1			1			6	2.9
13	花崗閃緑岩								5		2					7	3.4
14	閃緑岩								1							1	0.5
15	淡緑色砂質凝灰岩								2	1						3	1.5
16	両輝石安山岩								11	2	6	4				23	11.2
17	デサイト質凝灰岩													1		1	0.5
計		8	4	2	14	2	67	10	48	6	28	7	6	3	1	206	
	割合%	3.9	1.9	1.0	6.8	1.0	32.5	4.9	23.3	2.9	13.6	3.4	2.9	1.5	9.5		



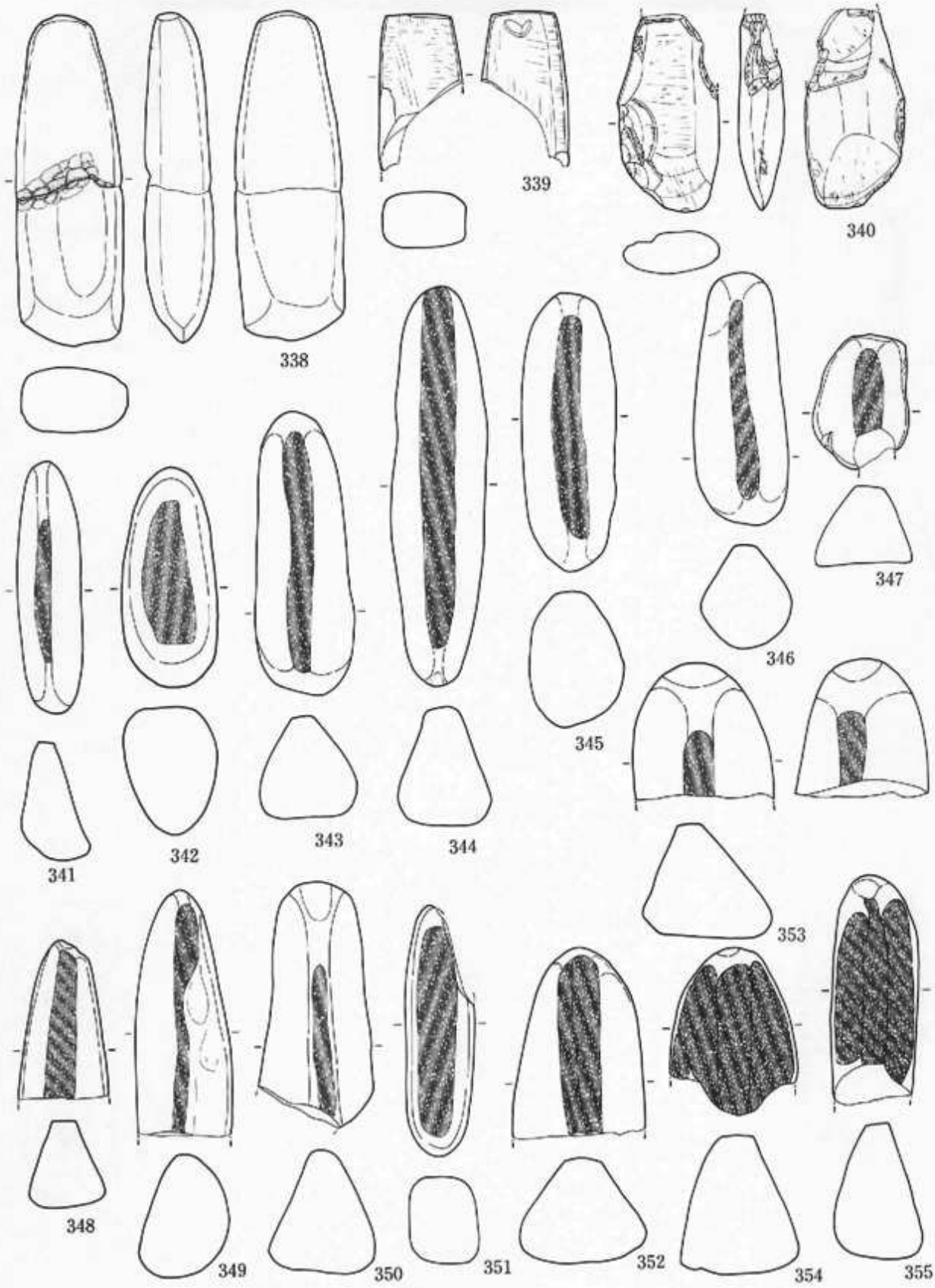
第21図　遺構外の出土遺物 石器 1



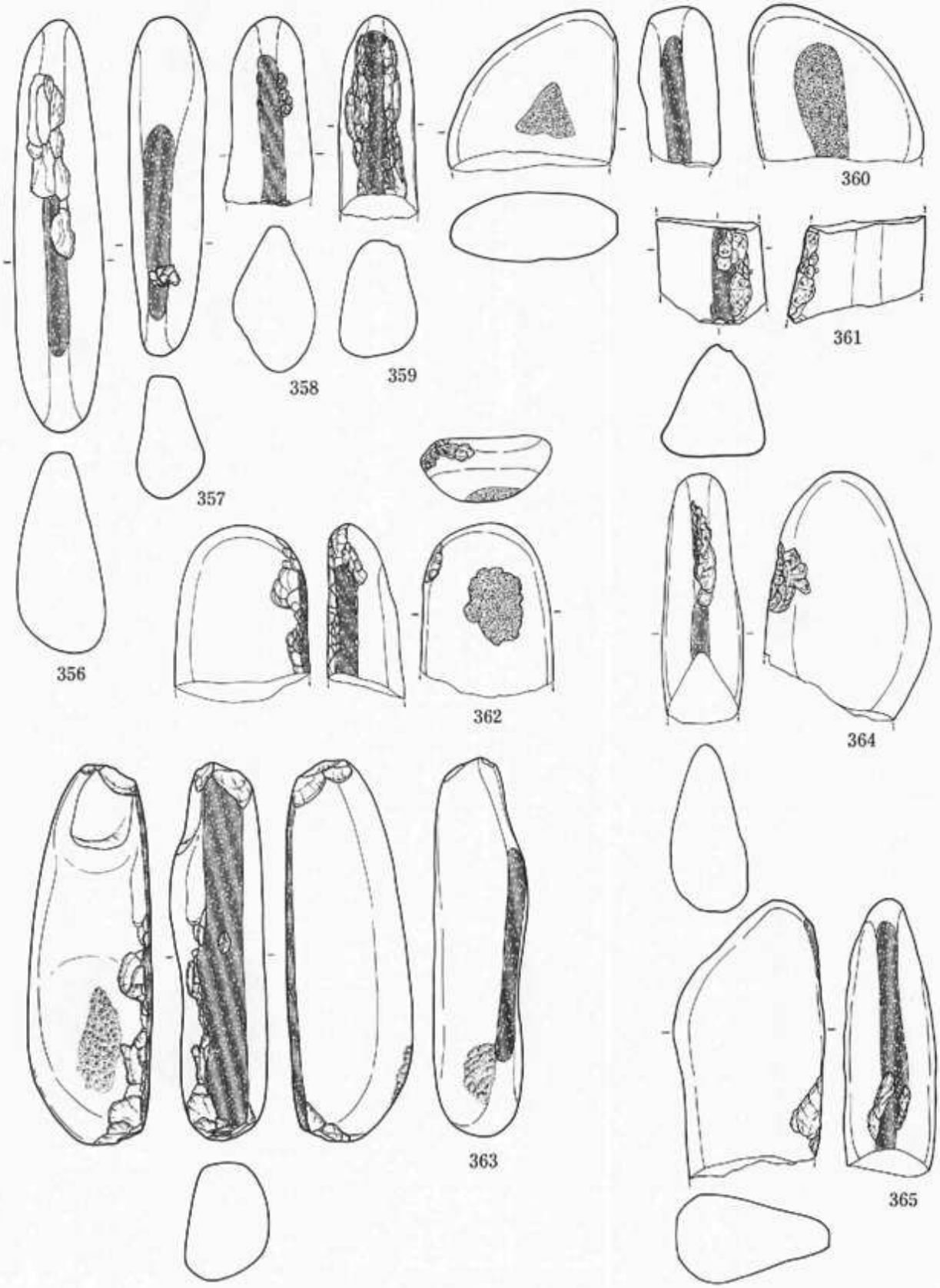
第22図　遺構外の出土遺物 石器２



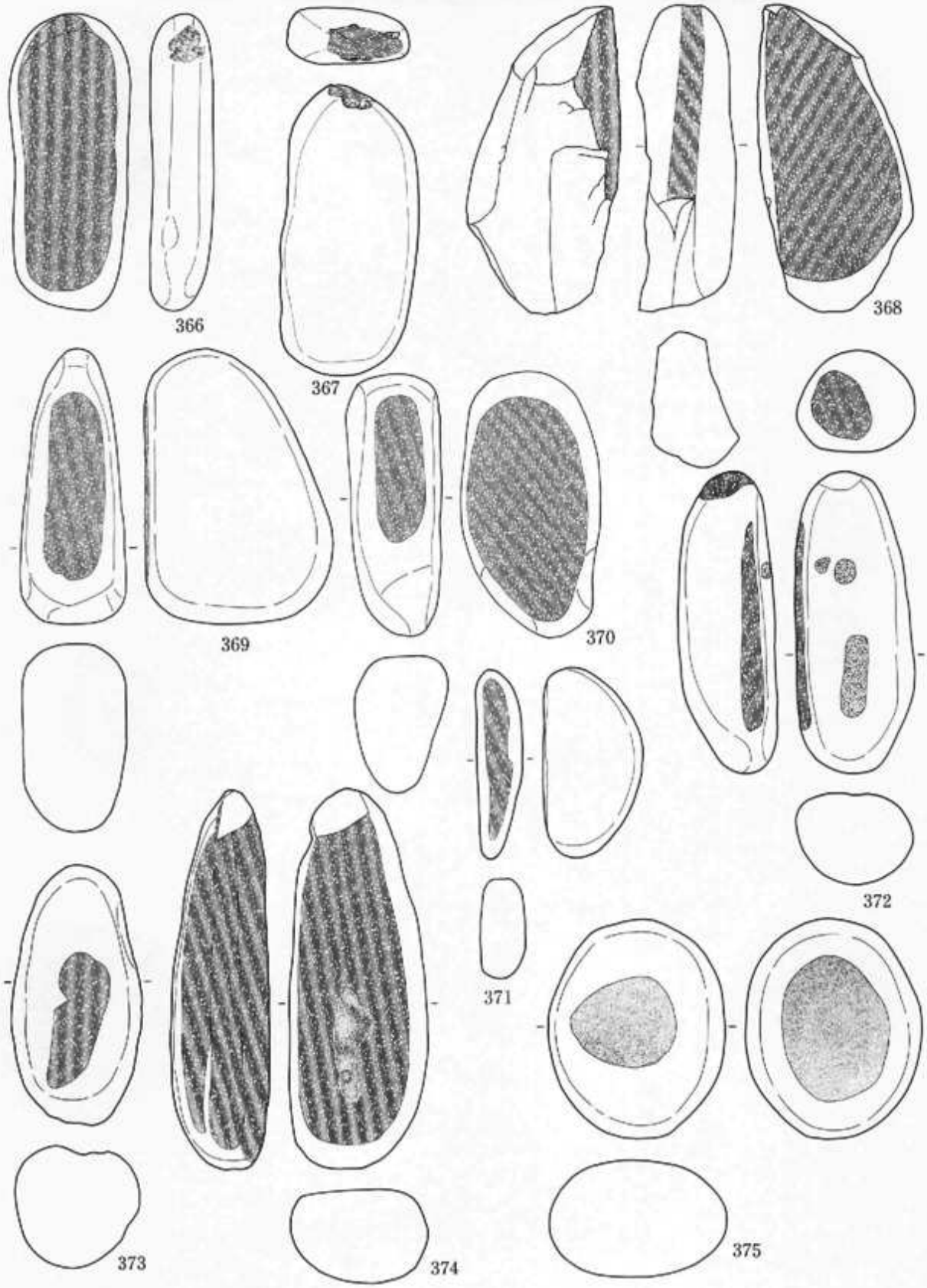
第23図　遺構外の出土遺物 石器３



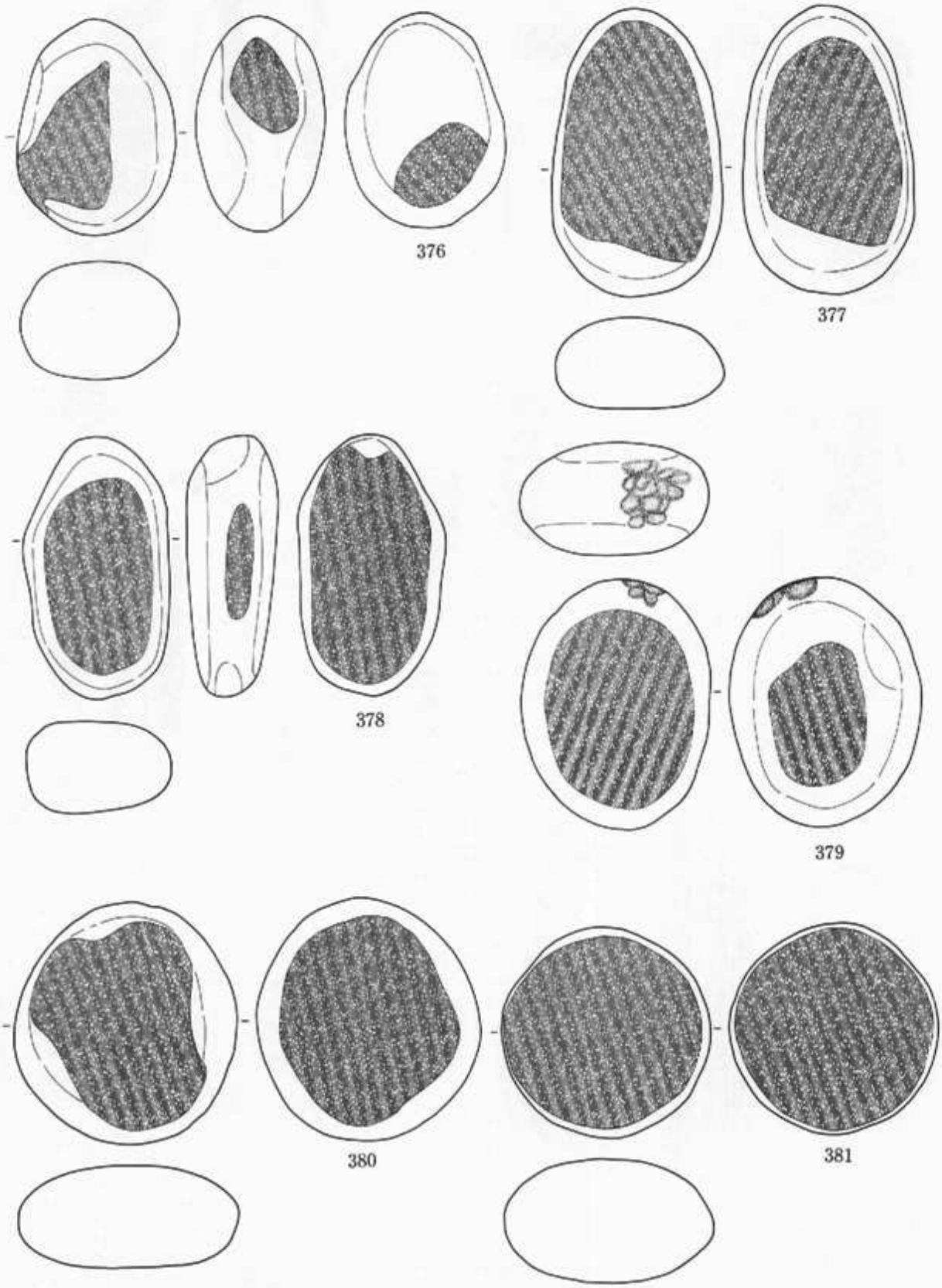
第24図　遺構外の出土遺物 石器4



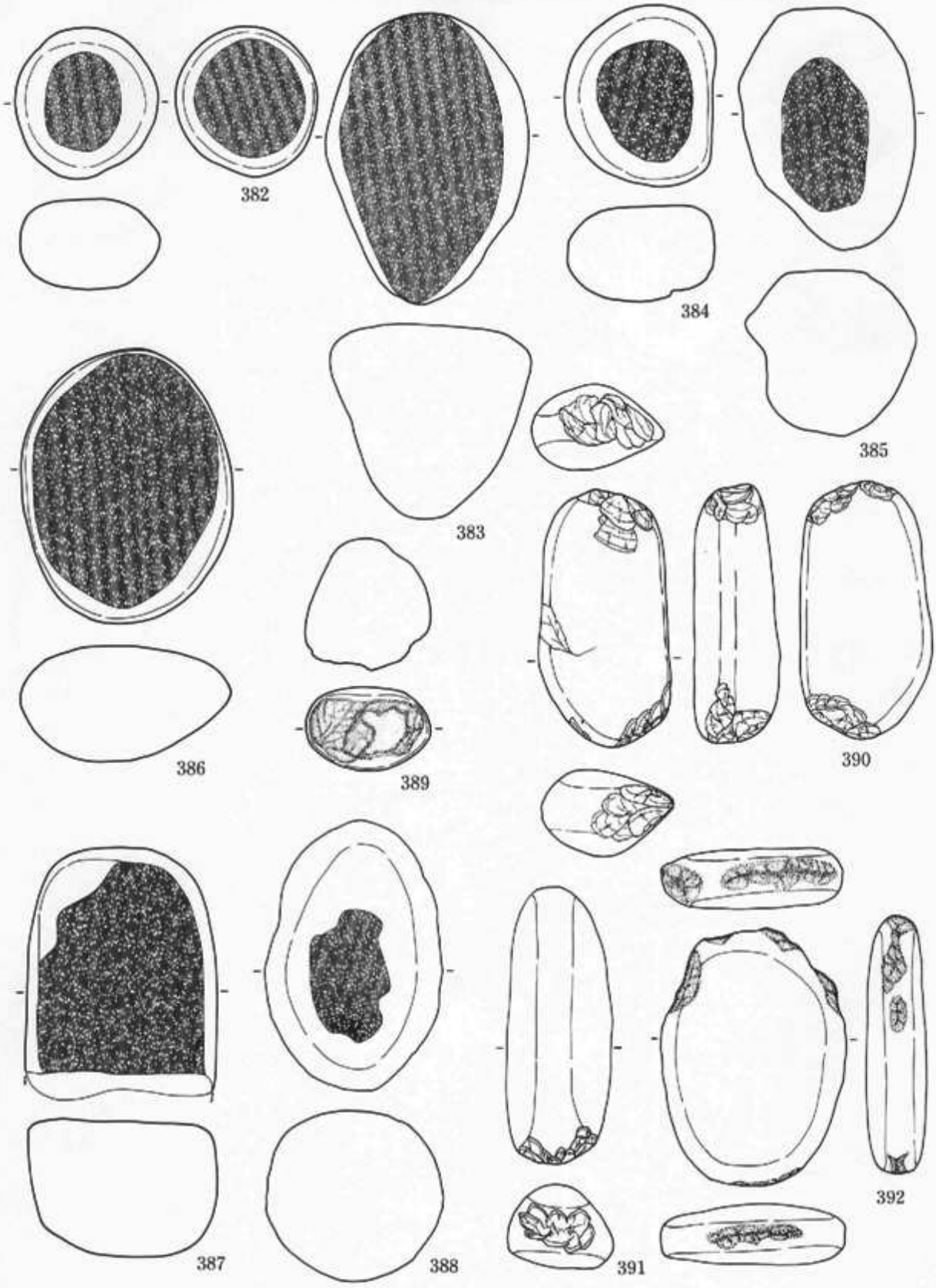
第25図　遺構外の出土遺物 石器5



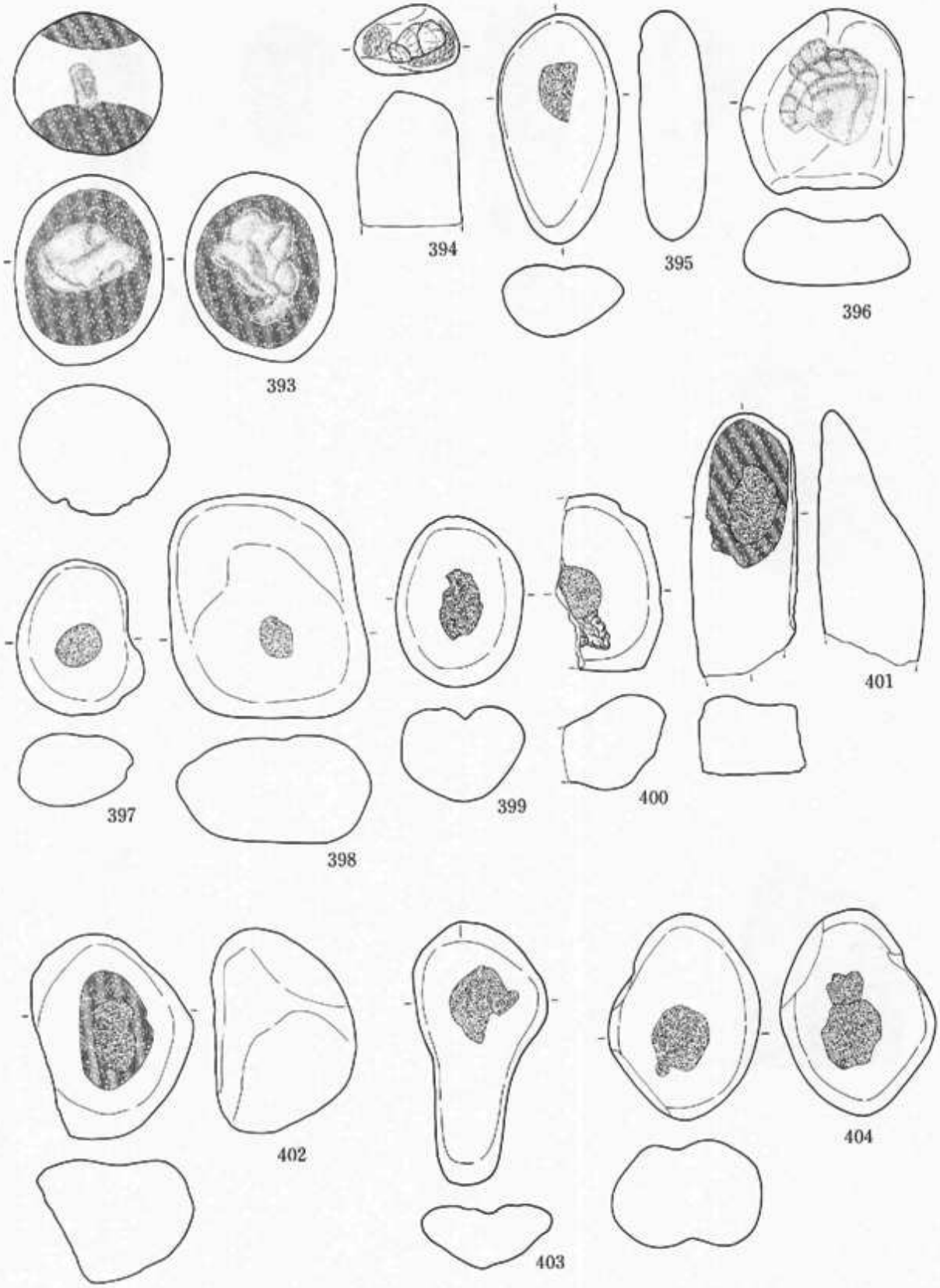
第26図　遺構外の出土遺物 石器6



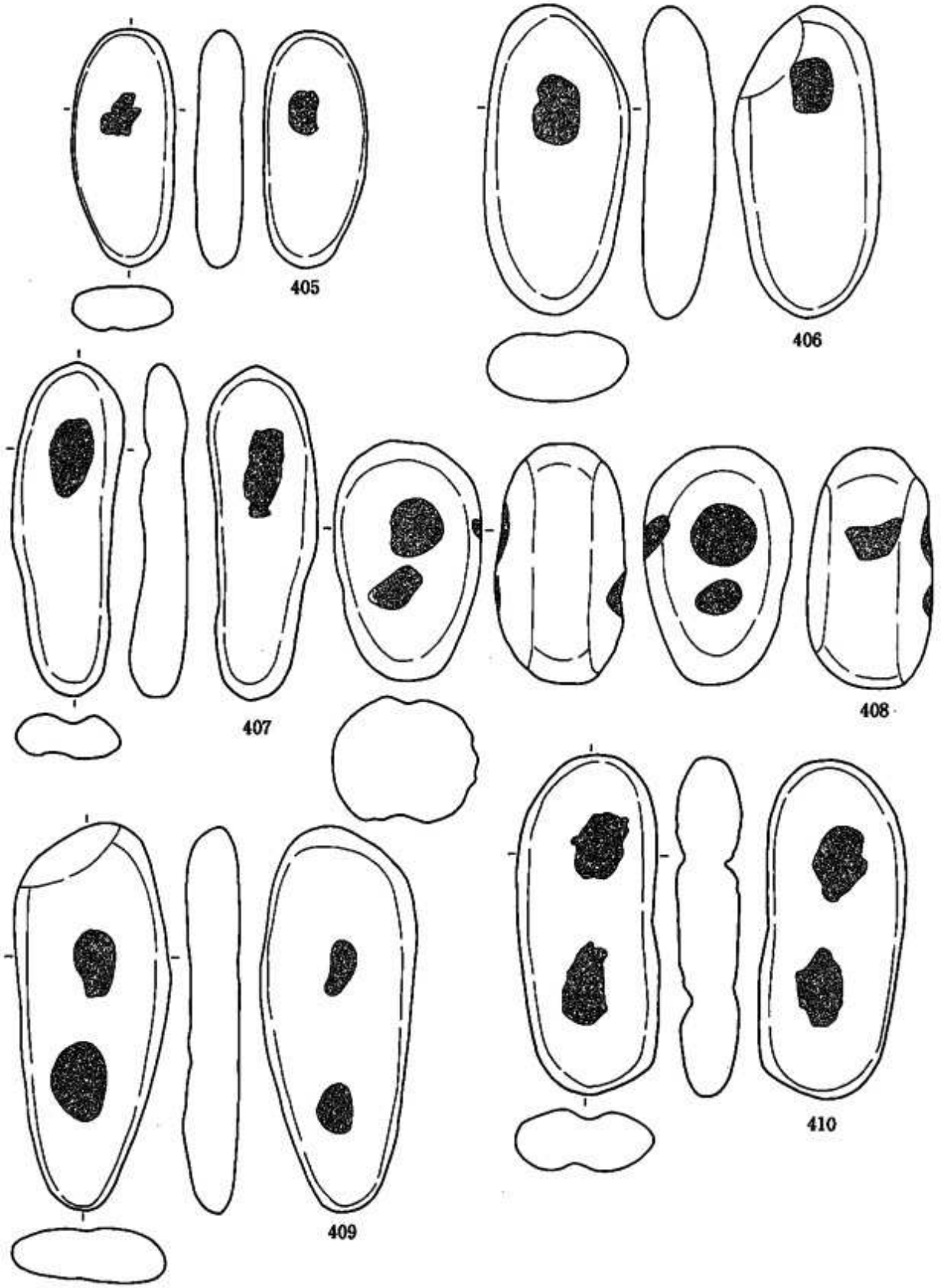
第27図　遺構外の出土遺物 石器７



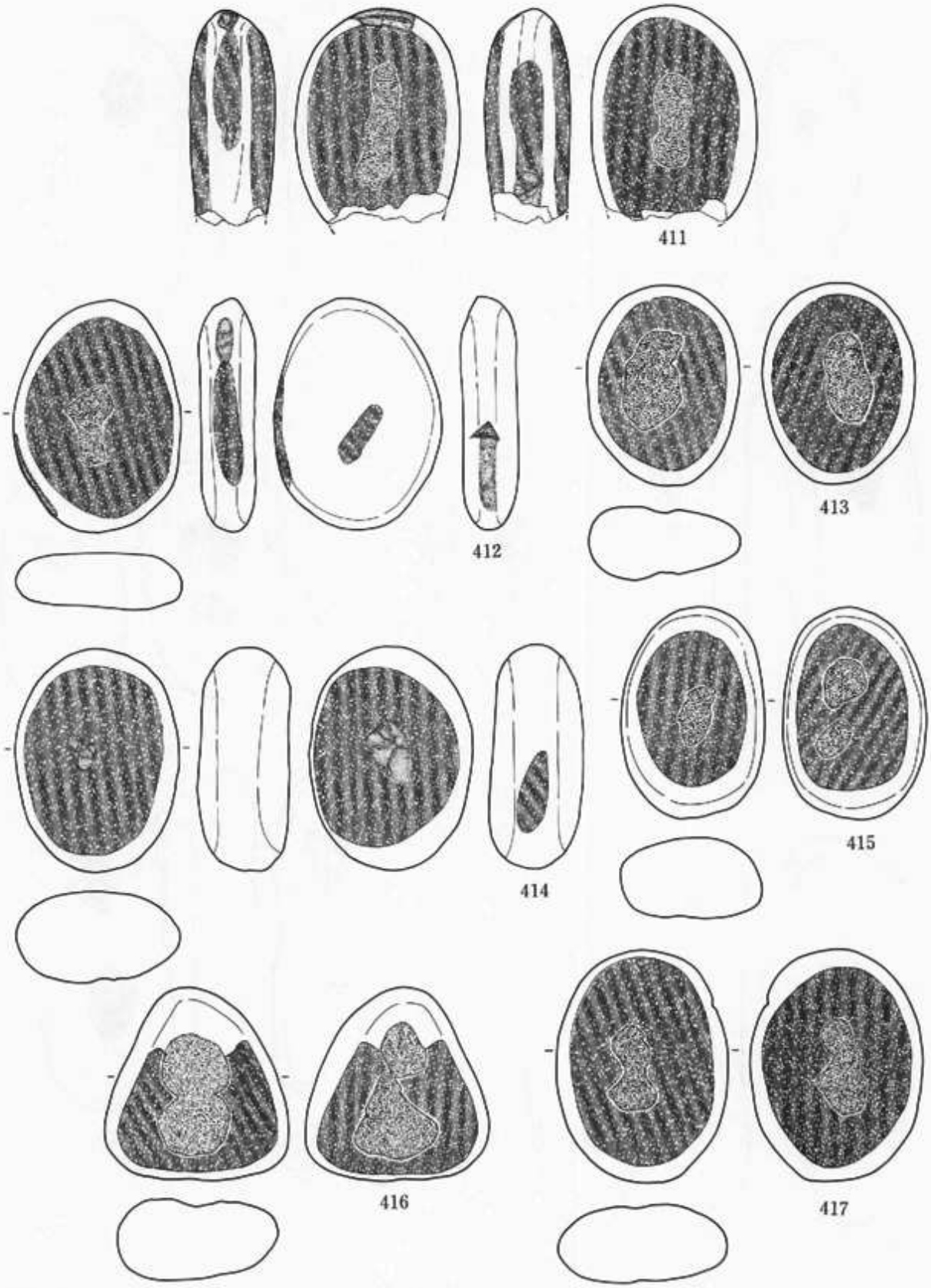
第28図　遺構外の出土遺物 石器８



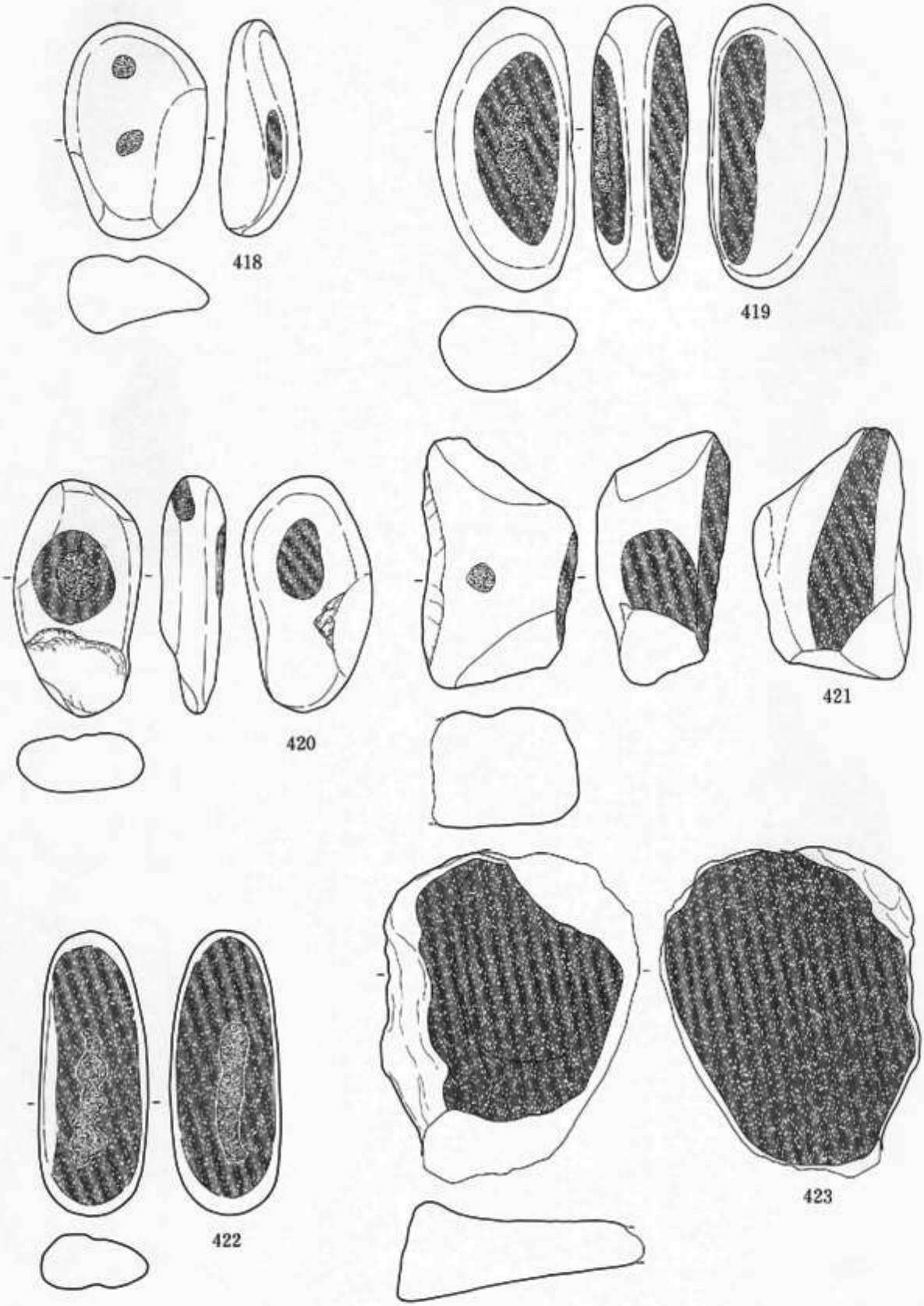
第29図　遺構外の出土遺物 石器９



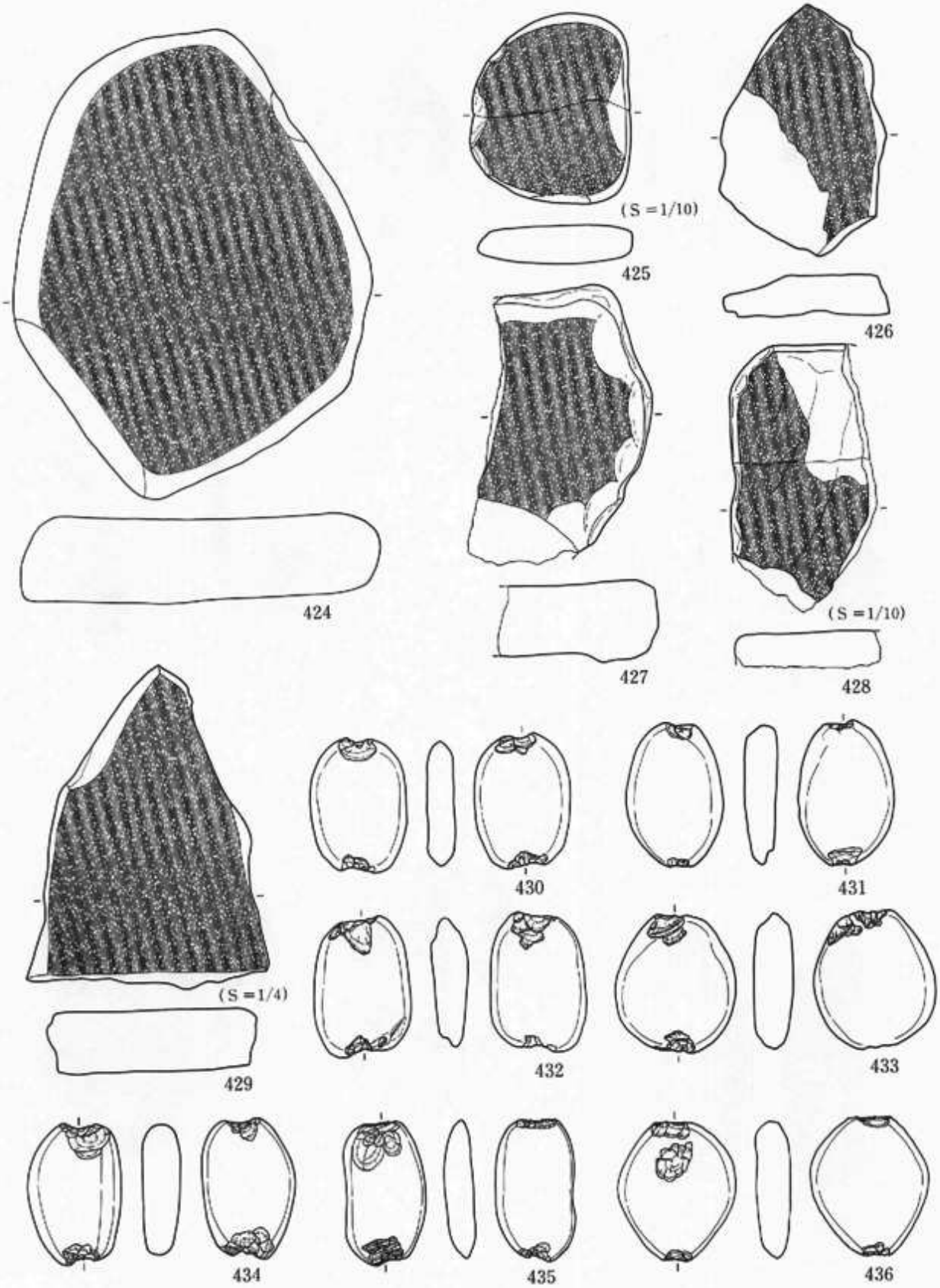
第30図　遺構外の出土遺物 石器10



第31図　遺構外の出土遺物 石器11

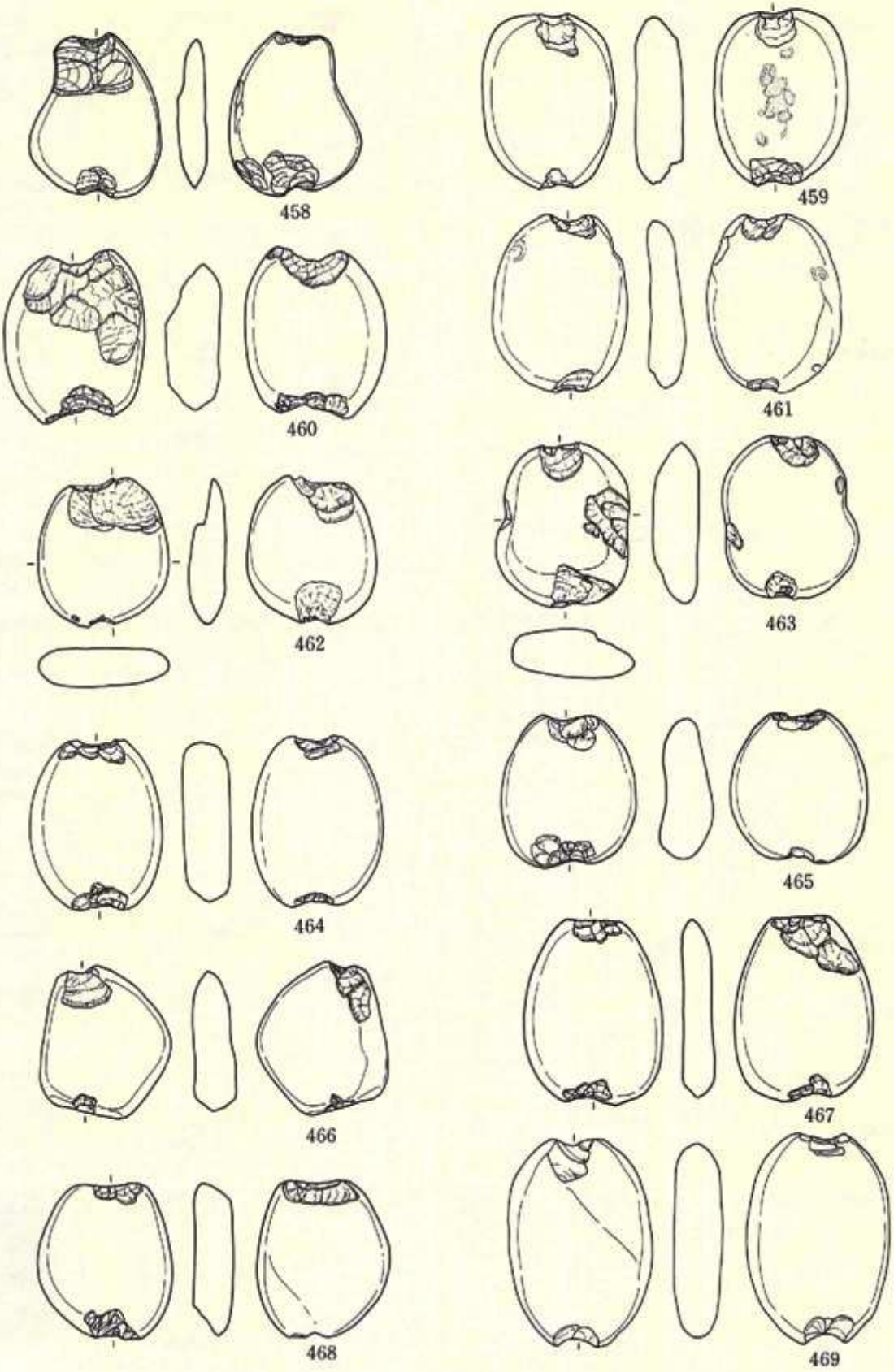


第32図　遺構外の出土遺物 石器12

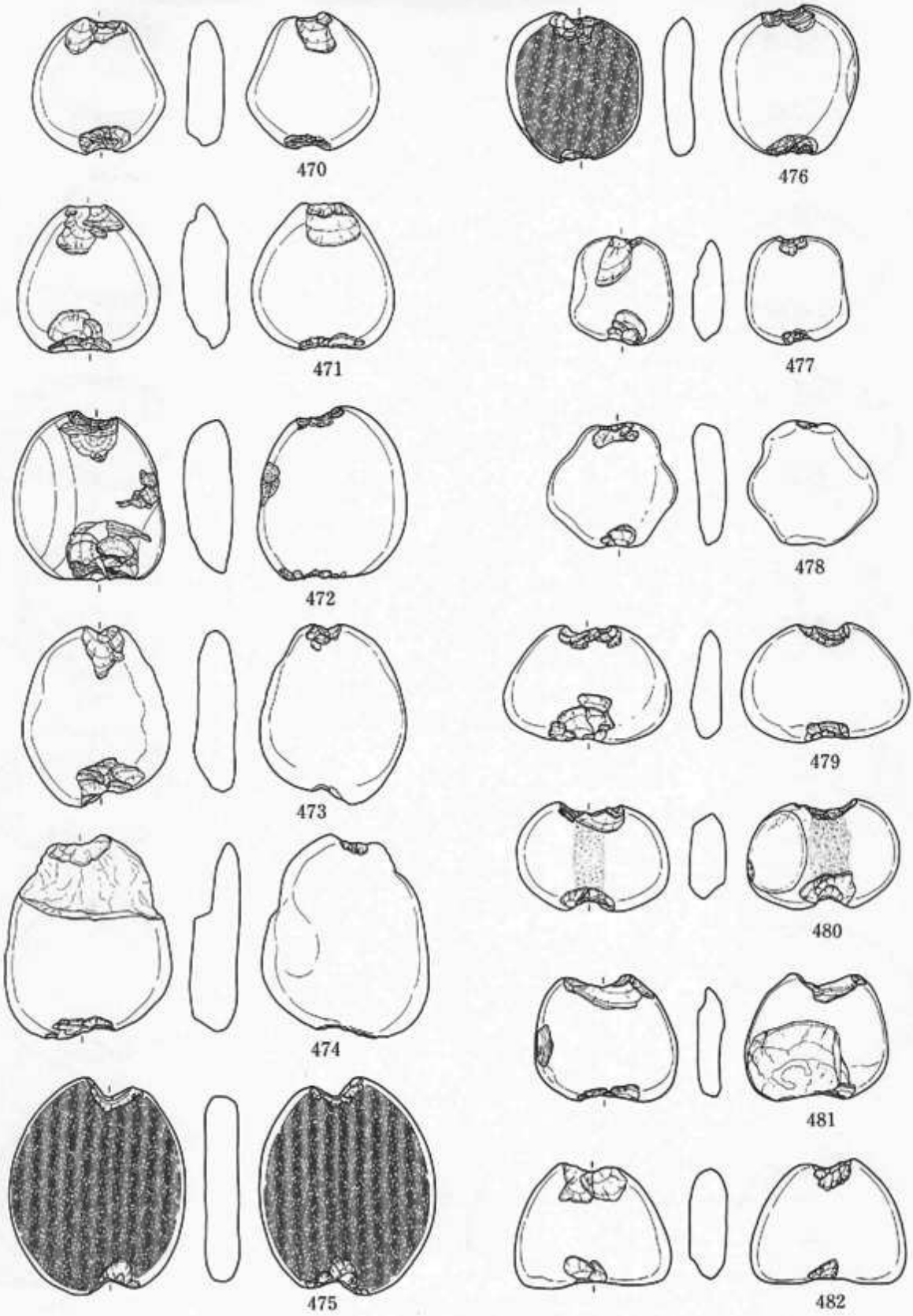


第33図　遺構外の出土遺物 石器13

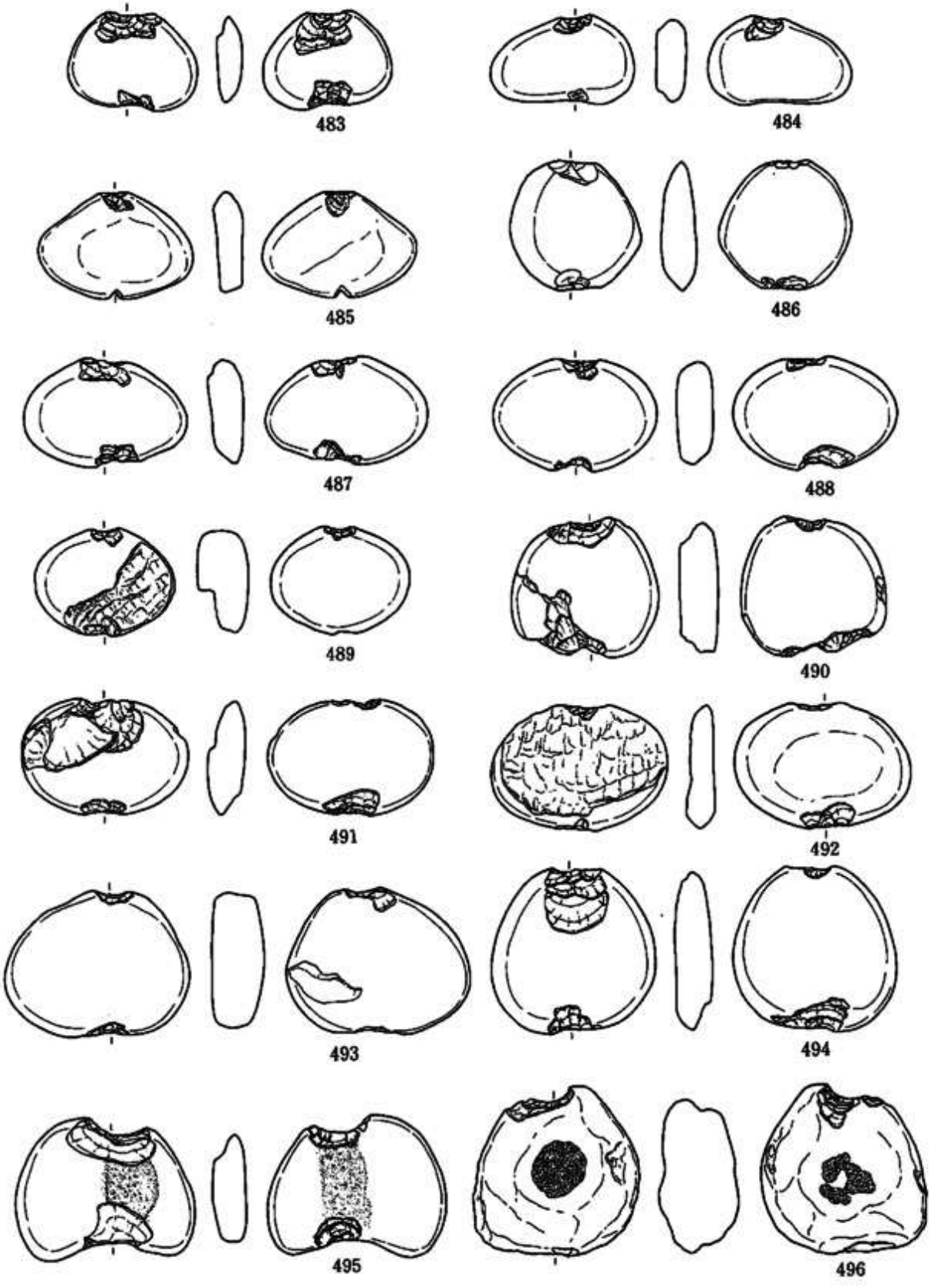
第34図　遺構外の出土遺物 石器14



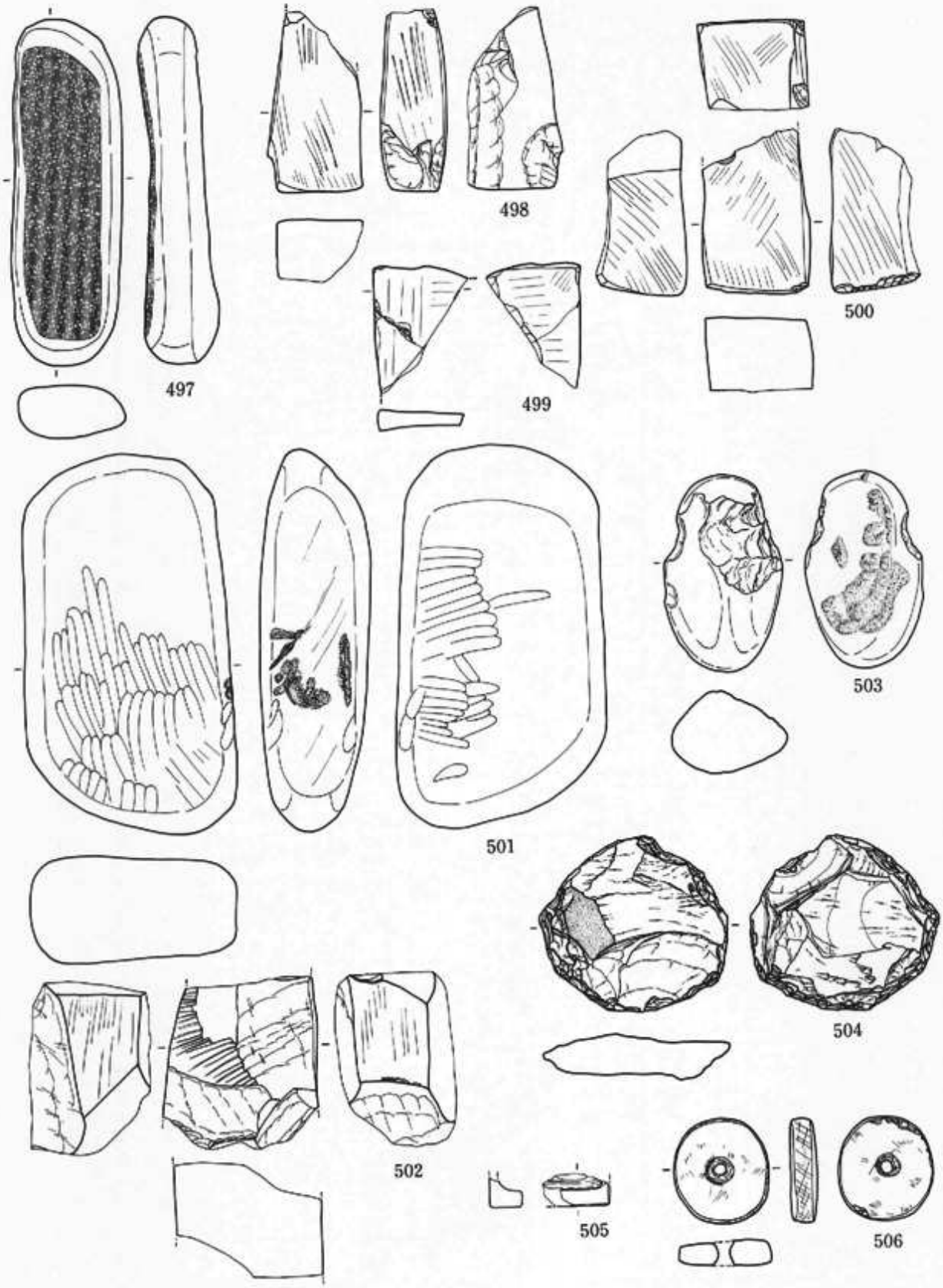
第35図　遺構外の出土遺物 石器15



第36図　遺構外の出土遺物 石器16



第37図　遺構外の出土遺物 石器17



第38図　遺構外の出土遺物 石器18

第4表　石器・石製品一覧表(1)

掲載番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	産地	登録番号
301	石鏃	Ⅳ B 2 c	3.1	1.8	0.5	1.6	流文岩	奥羽山脈	303
302	石鏃	道路	3.1	1.3	0.3	0.7	珪質泥岩	奥羽山脈	302
303	石鏃	Ⅰ A 5 i	3.3	1.8	0.4	1.9	硬質泥岩	奥羽山脈	304
304	石鏃	Ⅳ A 2 i	4.3	2	0.5	3.1	流紋岩	奥羽山脈	306
305	石鏃	Ⅰ A 区	4.5	1.8	0.5	3.2	細粒凝灰岩	奥羽山脈	305
306	石鏃	Ⅳ A 1 i	(2.7)	2.1	0.5	2.6	珪長質細粒凝灰岩	奥羽山脈	308
307	石鏃	Ⅴ A 6 g	3.3	1.2	0.5	1.7	珪長質細粒凝灰岩	奥羽山脈	307
308	石鏃	Ⅰ A 5 h	3.3	2.2	0.9	5.7	鉄石英	不詳	301
309	石匙	Ⅲ A 7 h	4.5	3.2	0.8	7	硬質泥岩	奥羽山脈	312
310	石匙	Ⅳ B 6 a	6.2	4.3	0.7	25.4	硬質泥岩	奥羽山脈	310
311	石匙	Ⅲ A 4 i	4.5	3.9	0.7	16.1	流紋岩	奥羽山脈	311
312	石匙	Ⅳ B 8 a	5.3	3	0.7	9.8	流紋岩	奥羽山脈	309
313	篦状	Ⅲ A 4 d	7.2	3.7	2	50.8	細粒凝灰岩	奥羽山脈	313
314	篦状	Ⅱ A 0 h	5.5	4.5	2.5	53.5	硬質泥岩	奥羽山脈	314
315	不定形(サイド)	Ⅲ 区	5.6	2.3	1	11.4	細粒凝灰岩	奥羽山脈	318
316	不定形(サイド)	Ⅰ A 1 h	3.9	2.8	1.1	11.2	鉄石英	不詳	325
317	不定形(サイド)	道路	3.6	3.4	1	8.3	細粒凝灰岩	奥羽山脈	326
318	不定形(サイド)	Ⅰ A 3 h	6	2.9	0.7	10.8	硬質泥岩	奥羽山脈	321
319	不定形(サイド)	Ⅱ A 8 j	2.9	2	0.8	4.7	細粒凝灰岩	奥羽山脈	320
320	不定形(サイド)	Ⅶ A 6 i	9.8	4.6	1.3	56	珪長質細粒凝灰岩	奥羽山脈	324
321	不定形(サイド)	Ⅳ A 粗	7.7	3.5	0.6	16.6	細粒凝灰岩	奥羽山脈	316
322	不定形(サイド)	Ⅳ B 8 b	7.4	3.3	0.9	24.5	細粒凝灰岩	奥羽山脈	317
323	不定形(サイド)	Ⅱ A 0 j	8.8	2.4	0.7	17.6	珪質泥岩	奥羽山脈	328
324	不定形(サイド)	Ⅱ A 区	3.9	2.9	0.9	8.4	細粒凝灰岩	奥羽山脈	315
325	不定形(エンド)	Ⅲ B 3 c	5.1	2.8	1.6	23.3	鉄石英	不詳	319
326	不定形(エンド)	Ⅲ A 5 i	3.5	6	0.7	17.5	珪質泥岩	奥羽山脈	327
327	不定形(快入)	Ⅲ A 3 i	7.2	4.2	1.4	50.9	細粒凝灰岩	奥羽山脈	330
328	不定形(快入)	Ⅰ A 4 h	4.6	5.3	1	17.9	硬質泥岩	奥羽山脈	329
329	リタッチドフレーク	Ⅶ B 0 a	6.3	4.8	1.8	57.5	粘板岩	夏油川	322
330	リタッチドフレーク	Ⅵ A 7 h	11.5	6.8	1.3	89	硬質泥岩	奥羽山脈	323
331	石斧	Ⅱ A 5 f	15.5	9.4	2.4	370	粘板岩	北上山地	398
332	石斧	Ⅱ A 3 i	14.9	8	3	340	流紋岩	奥羽山脈	399
333	石斧	Ⅴ A 5 g	15.2	9.7	2.8	350	流紋岩	奥羽山脈	406
334	石斧	Ⅲ B 3 g	14	5.5	2	270	緑色凝灰岩	奥羽山脈	401
335	石斧	Ⅲ A 2 e	11.9	12.3	3.3	340	流紋岩	奥羽山脈	400
336	石斧	Ⅲ A 8 j	6	8.4	2	70	流紋岩	奥羽山脈	402
337	石斧	Ⅴ A 9 g	(6.7)	(5)	2	79	流紋岩	奥羽山脈	407
338	石斧	Ⅲ B 8 c	16.6	5.4	3.3	510	緑色凝灰岩	奥羽山脈	403
339	石斧	Ⅳ 区	(7.8)	4.1	2.8	140	硬質泥岩	奥羽山脈	405
340	石斧	Ⅲ B 3 b	9.9	5	2.1	160	硬質泥岩	奥羽山脈	404
341	磨石(三角)	Ⅲ B 3 g	12.8	3.3	6.1	310	輝石安山岩	奥羽山脈	413
342	磨石(三角)	Ⅳ A 0 j	11.1	4.9	6.5	420	輝石安山岩	夏油川	486
343	磨石(三角)	Ⅳ 区	14.5	5	5.2	500	輝石安山岩	奥羽山脈	411
344	磨石(三角)	Ⅳ A 2 h	20.2	5	6	810	輝石安山岩	奥羽山脈	416
345	磨石(三角)	Ⅲ A 7 g	14	4.9	6.9	690	輝石安山岩	奥羽山脈	409
346	磨石(三角)	Ⅱ A 6 a	12.8	4.8	5.3	380	輝石安山岩	奥羽山脈	408
347	磨石(三角)	Ⅲ B 3 f	6.7	4.8	3.9	190	両輝石安山岩	奥羽山脈	418
348	磨石(三角)	Ⅲ B 3 f	(8)	4.6	4.5	220	緑色凝灰岩	奥羽山脈	419
349	磨石(三角)	Ⅳ 区	(12.4)	4.9	6.3	520	淡緑色砂質凝灰岩	奥羽山脈	426
350	磨石(三角)	Ⅳ A 2 h	(12.5)	5.8	6.4	600	花崗閃緑岩	夏油川	427
351	磨石(三角)	Ⅳ A 0 h	(12.6)	3.5	4.4	270	粘板岩	北上山地	485
352	磨石(三角)	Ⅰ A 5 g	(9.6)	6.7	5.5	460	輝石安山岩	奥羽山脈	422

第4表　石器・石製品一覧表(2)

掲載番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	産地	登録番号
353	磨石（三角）	Ⅳ A 6 h	(6.9)	6.8	5.9	360	花崗閃緑岩	夏油川	421
354	磨石（三角）	Ⅴ A 0 i	(8.5)	6.5	7.1	420	緑色凝灰岩	奥羽山脈	420
355	磨石（三角）	Ⅳ B 2 a	(11.6)	4.6	7	450	輝石安山岩	奥羽山脈	423
356	磨石（三角）	Ⅱ A 2 e	20.5	4.5	10	1,370	緑色凝灰岩	奥羽山脈	417
357	磨石（三角）	Ⅱ A 1 f	16.8	3.9	6.2	510	緑色凝灰岩	奥羽山脈	412
358	磨石（三角）	Ⅴ A 6 i	(9.3)	7.2	3.1	397	プロピライト	奥羽山脈	490
359	磨石（三角）	Ⅲ B 3 d	(10.1)	4	5.9	360	両輝石安山岩	奥羽山脈	424
360	磨石（三角）	Ⅴ A 2 g	(7.9)	8.5	3.5	300	淡緑色砂質凝灰岩	奥羽山脈	425
361	磨石（三角）	Ⅴ A 4 j	(5)	(5.2)	5.5	217	プロピライト	奥羽山脈	430
362	磨石（三角）	Ⅴ A 5 g	(8.7)	4.7	3.3	300	緑色凝灰岩	奥羽山脈	484
363	磨石（三角）	Ⅱ A 2 e	19	6.3	5.9	770	輝石安山岩	奥羽山脈	414
364	磨石（三角）	Ⅴ A 6 i	(12.5)	8.3	4.1	437	輝石安山岩	奥羽山脈	431
365	磨石（三角）	Ⅴ A 3 h	(13.1)	7.6	4.5	545	プロピライト	奥羽山脈	429
366	磨石（楕円形）	道路	14.8	6	3	460	両輝石安山岩	奥羽山脈	478
367	磨石（楕円形）	Ⅴ A 3 h	14.5	6.9	3.5	552	プロピライト	奥羽山脈	487
368	磨石（楕円形）	Ⅳ A 粗	15.3	7.8	6.8	650	粘板岩	北上山地	428
369	磨石（楕円形）	Ⅳ A 7 h	13.6	9.4	5.3	894	輝石安山岩	夏油川	489
370	磨石（楕円形）	Ⅴ A 9 j	13.1	7	4.4	620	輝石安山岩	夏油川	483
371	磨石（楕円形）	Ⅴ A 3 i	9.4	5	2.3	149	緑色凝灰岩	奥羽山脈	488
372	磨石（楕円形）	Ⅱ A 5 g	15.2	6	4.6	590	輝石安山岩	奥羽山脈	410
373	磨石（楕円形）	Ⅱ A 0 h	13.1	6.6	6.2	630	両輝石安山岩	奥羽山脈	437
374	磨石（楕円形）	Ⅳ A 8 h	19.1	7	4.9	930	両輝石安山岩	奥羽山脈	415
375	磨石（偏平）	Ⅱ A 3 i	11.1	9	6	910	閃緑岩	奥羽山脈	477
376	磨石（偏平）	Ⅲ B 9 d	10.6	7.9	6	600	輝石安山岩	奥羽山脈	472
377	磨石（偏平）	Ⅳ A 5 h	14.3	8.5	4.5	740	輝石安山岩	奥羽山脈	479
378	磨石（偏平）	Ⅲ B 粗	13	7.3	4.7	630	両輝石安山岩	奥羽山脈	474
379	磨石（偏平）	Ⅱ A 0 e	12.5	9.5	5.6	920	花崗閃緑岩	夏油川	467
380	磨石（偏平）	Ⅳ A 2 i	12	11	5.1	920	デイサイト	奥羽山脈	473
381	磨石（偏平）	Ⅰ A 6 i	10.5	10.5	6.2	940	両輝石安山岩	奥羽山脈	468
382	磨石（偏平）	Ⅲ A 0 d	7.6	7.2	4.5	340	花崗閃緑岩	奥羽山脈	470
383	磨石（偏平）	Ⅳ B 2 c	14.5	10.2	9.8	1,620	両輝石安山岩	奥羽山脈	471
384	磨石（偏平）	Ⅳ B 2 a	9	7.5	4.7	490	輝石安山岩	奥羽山脈	469
385	磨石（偏平）	Ⅱ A 5 h	12	8.8	8.2	1,230	両輝石安山岩	奥羽山脈	475
386	磨石（偏平）	Ⅱ A 0 e	13.7	10.6	5.8	1,170	両輝石安山岩	奥羽山脈	476
387	磨石（偏平）	道路	(12.6)	9.8	7	1,570	両輝石安山岩	奥羽山脈	480
388	磨石（偏平）	Ⅳ A 3 i	13.5	8.9	8.6	1,438	花崗閃緑岩	夏油川	491
389	敲石	Ⅲ A 1	4.2	6.2	6.5	200	両輝石安山岩	奥羽山脈	463
390	敲石	Ⅳ B 3 b	12.8	6.6	4.3	520	プロピライト	奥羽山脈	464
391	敲石	Ⅳ B 3 b	13.8	5.2	4.3	455	輝石安山岩	夏油川	465
392	敲石	Ⅴ A 9 i	13	9.2	3	442	輝石安山岩	夏油川	466
393	敲石	Ⅲ A 5 d	9.5	7.4	6.4	560	両輝石安山岩	奥羽山脈	461
394	敲石	Ⅱ A 1 j	3.4	5.2	(6.7)	150	淡緑色砂質凝灰岩	奥羽山脈	459
395	凹石	Ⅴ A 3 j	11.3	6	3.5	279	輝石安山岩	夏油川	448
396	凹石	Ⅰ A 4 h	8.8	8.1	3.8	380	両輝石安山岩	奥羽山脈	462
397	凹石	Ⅲ A 4 e	7.6	6.2	3.6	190	緑色凝灰岩	奥羽山脈	460
398	凹石	Ⅲ A 2 d	11.1	9.9	5.4	920	輝石安山岩	奥羽山脈	433
399	凹石	Ⅶ A 6 i	8.4	6.3	4.5	325	緑色凝灰岩	奥羽山脈	457
400	凹石	Ⅶ B 7 a	8.7	(5.2)	4.5	279	輝石安山岩	夏油川	455
401	凹石	Ⅴ A 9 i	(12.6)	(5.2)	3.9	486	輝石安山岩	夏油川	454
402	凹石	Ⅴ A 6 h	10.1	7.8	6	630	輝石安山岩	夏油川	454
403	凹石	Ⅶ B 7 a	13	6.5	4	303	輝石安山岩	夏油川	447
404	凹石	Ⅰ A 6 j	10.2	7.6	5.3	440	輝石安山岩	奥羽山脈	434

第4表　石器・石製品一覧表(3)

掲載番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	産地	登録番号
405	凹石	V A 9 j	11.8	5.1	2.4	172	緑色凝灰岩	奥羽山脈	449
406	凹石	Ⅶ B 6 b	15.5	7	3.5	576	輝石安山岩	夏油川	446
407	凹石	Ⅶ B 6 b	16.6	5.2	2.7	291	緑色凝灰岩	奥羽山脈	450
408	凹石	V A 3 h	12	7.4	6.3	819	輝石安山岩	夏油川	452
409	凹石	Ⅶ A 7 h	19.3	7.7	2.7	580	緑色凝灰岩	奥羽山脈	451
410	凹石	Ⅶ B 6 b	16.9	7	3	495	緑色凝灰岩	奥羽山脈	445
411	凹石	V A 2 g	(10.6)	4.3	4.2	570	花崗閃緑岩	夏油川	444
412	凹石	Ⅳ B 1 b	11.7	8.4	2.8	390	両輝石安山岩	奥羽山脈	443
413	凹石	Ⅳ B 1 c	10	7.7	3.7	330	両輝石安山岩	奥羽山脈	439
414	凹石	Ⅰ A 7 g	11.1	8.3	4.6	620	両輝石安山岩	奥羽山脈	442
415	凹石	V A 区	10.5	7.2	4	460	花崗閃緑岩	夏油川	438
416	凹石	Ⅰ A 7 g	9.6	9.2	4.2	440	両輝石安山岩	奥羽山脈	435
417	凹石	Ⅱ A 9 d	11.6	8.7	3.9	590	両輝石安山岩	奥羽山脈	436
418	凹石	V A 6 h	10.6	7.1	3.8	324	緑色凝灰岩	奥羽山脈	482
419	凹石	V A 6 h	14	6.8	4.2	530	緑色凝灰岩	奥羽山脈	458
420	凹石	V A 4 h	(11.6)	6.3	3.1	260	輝石安山岩	夏油川	453
421	凹石	Ⅰ A 5 h	12.3	7.7	5.8	720	輝石安山岩	奥羽山脈	441
422	凹石	Ⅳ B 0 c	14.1	5.4	2.8	300	輝石安山岩	奥羽山脈	440
423	石皿	Ⅰ A 6 j	16.3	12.8	5	990	両輝石安山岩	奥羽山脈	494
424	石皿	Ⅵ B 0 i	23.3	18.1	4.5	3,000	輝石安山岩	夏油川	498
425	石皿	Ⅲ A 2 f	28.8	24.7	6	6,000	両輝石安山岩	奥羽山脈	495
426	石皿	Ⅳ B 2 b	12.6	8.5	2.1	290	輝石安山岩	奥羽山脈	493
427	石皿	Ⅳ B 区	42.5	28.4	12.2	18kg	両輝石安山岩	奥羽山脈	496
428	石皿	Ⅳ B	40.6	22.3	5.7	9,000	両輝石安山岩	奥羽山脈	497
429	石皿	Ⅰ A 7 i	16.3	12.2	3.2	970	輝石安山岩	奥羽山脈	492
430	石錘（タテ）	Ⅱ A 0 j	6.8	4.9	1.4	80	輝石安山岩	奥羽山脈	340
431	石錘（タテ）	Ⅱ A 1 h	7.3	4.8	1.6	80	緑色凝灰岩	奥羽山脈	333
432	石錘（タテ）	Ⅱ A 1 h	7.1	4.8	1.8	80	緑色凝灰岩	奥羽山脈	337
433	石錘（タテ）	Ⅲ B 4 a	7	6.1	2	100	輝石安山岩	奥羽山脈	360
434	石錘（タテ）	Ⅲ A 5 d	7.2	4.7	1.9	90	緑色凝灰岩	奥羽山脈	339
435	石錘（タテ）	Ⅱ A 6 i	7.3	4.1	1.5	60	緑色凝灰岩	奥羽山脈	336
436	石錘（タテ）	V A 7 h	6.9	5.9	1.7	83	輝石安山岩	夏油川	373
437	石錘（タテ）	Ⅱ A 1 h	6.6	5.6	2	110	凝灰質砂岩	奥羽山脈	344
438	石錘（タテ）	Ⅳ A 0 h	6.8	5	2.2	110	輝石安山岩	奥羽山脈	341
439	石錘（タテ）	Ⅰ A 4 g	8.4	5.6	1.2	80	緑色凝灰岩	奥羽山脈	345
440	石錘（タテ）	Ⅲ A 6 i	6.8	5.5	1.3	60	凝灰質砂岩	奥羽山脈	334
441	石錘（タテ）	Ⅱ A 2 h	7.6	5.2	2.2	120	緑色凝灰岩	奥羽山脈	338
442	石錘（タテ）	道路	6.8	5.7	2.2	120	緑色凝灰岩	奥羽山脈	347
443	石錘（タテ）	Ⅳ B 6 c	7.4	6.1	1.8	120	凝灰質砂岩	奥羽山脈	355
444	石錘（タテ）	Ⅶ A 0 i	6.2	5	1.8	70	硬質泥岩	奥羽山脈	332
445	石錘（タテ）	Ⅱ A 6 h	6.2	5.2	1.7	90	輝石安山岩	奥羽山脈	352
446	石錘（タテ）	Ⅳ A 3 g	7.4	6	1.5	70	凝灰質砂岩	奥羽山脈	343
447	石錘（タテ）	Ⅱ A 1 h	6.4	5.5	1.4	80	緑色凝灰岩	奥羽山脈	361
448	石錘（タテ）	Ⅲ A 6 j	6.2	5.7	2.2	100	輝石安山岩	奥羽山脈	335
449	石錘（タテ）	Ⅰ A 7 j	7	5.7	1.8	100	緑色凝灰岩	奥羽山脈	357
450	石錘（タテ）	Ⅶ A 7 h	6.7	4.5	2	74	輝石安山岩	夏油川	372
451	石錘（タテ）	Ⅰ A 5 h	7	5.7	2	100	輝石安山岩	奥羽山脈	348
452	石錘（タテ）	Ⅱ B 7 a	6.7	6.1	1.6	80	輝石安山岩	奥羽山脈	390
453	石錘（タテ）	Ⅲ B 3 a	6.9	5.4	2.3	120	緑色凝灰岩	奥羽山脈	358
454	石錘（タテ）	Ⅲ A 2 f	7.8	5.2	2	120	緑色凝灰岩	奥羽山脈	353
455	石錘（タテ）	Ⅱ A 2 h	6.5	6.1	2.4	140	緑色凝灰岩	奥羽山脈	391
456	石錘（タテ）	Ⅱ A 1 h	6.3	5.1	2	80	緑色凝灰岩	奥羽山脈	342

第4表　石器・石製品一覧表(4)

掲載番号	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	産地	登録番号
457	石錐（タテ）	Ⅱ A 1 h	7.5	4.6	1.9	80	緑色凝灰岩	奥羽山脈	350
458	石錐（タテ）	Ⅰ A 0 h	7.8	6.2	1.5	80	緑色凝灰岩	奥羽山脈	365
459	石錐（タテ）	Ⅶ A 4 i	8.2	6.3	2.2	155	緑色凝灰岩	奥羽山脈	370
460	石錐（タテ）	Ⅲ B 9 c	8.1	6.3	2.6	180	緑色凝灰岩	奥羽山脈	363
461	石錐（タテ）	道路	8.4	6.3	1.7	120	緑色凝灰岩	奥羽山脈	359
462	石錐（タテ）	Ⅴ B 8 c	6.9	6.2	1.7	80	緑色凝灰岩	奥羽山脈	371
463	石錐（タテ）	Ⅳ 区	7.7	6.4	2.2	160	輝石安山岩	奥羽山脈	354
464	石錐（タテ）	Ⅱ A 0 i	7.9	6.2	2.2	120	緑色凝灰岩	奥羽山脈	362
465	石錐（タテ）	Ⅱ A 3 h	7.2	6.5	2.5	140	緑色凝灰岩	奥羽山脈	396
466	石錐（タテ）	Ⅱ A 1 h	7.2	6.2	2	100	緑色凝灰岩	奥羽山脈	395
467	石錐（タテ）	Ⅳ B 0 a	8.8	6.5	1.5	130	緑色凝灰岩	奥羽山脈	366
468	石錐（タテ）	Ⅱ B 7 a	7.3	6.4	1.9	140	凝灰質砂岩	奥羽山脈	351
469	石錐（タテ）	Ⅳ B 2 c	9.9	6.8	2.3	250	輝石安山岩	奥羽山脈	346
470	石錐（タテ）	Ⅲ A 9 i	6.6	6.4	1.8	100	緑色凝灰岩	奥羽山脈	349
471	石錐（タテ）	道路	6.1	7	2.2	150	緑色凝灰岩	奥羽山脈	356
472	石錐（タテ）	Ⅰ A 8 g	8.2	7.3	2.4	200	緑色凝灰岩	奥羽山脈	364
473	石錐（タテ）	Ⅳ B 0 a	8.8	7.1	2	150	緑色凝灰岩	奥羽山脈	369
474	石錐（タテ）	Ⅳ B 5 a	9.9	8.1	2.3	200	輝石安山岩	奥羽山脈	368
475	石錐（タテ）	Ⅲ A 5 f	10.7	8.6	1.6	180	輝石安山岩	奥羽山脈	367
476	石錐（タテ）	Ⅲ A 5 d	7.3	6.6	1.5	110	緑色凝灰岩	奥羽山脈	394
477	石錐（ヨコ）	Ⅱ B 0 c	5.2	5	1.5	60	緑色凝灰岩	奥羽山脈	389
478	石錐（ヨコ）	Ⅱ A 1 h	6	6.3	1.6	80	硬質泥岩	奥羽山脈	393
479	石錐（ヨコ）	Ⅳ B 4 a	5.7	8.1	1.6	80	緑色凝灰岩	奥羽山脈	384
480	石錐（ヨコ）	Ⅰ A 4 i	5.3	7.4	1.8	90	凝灰質砂岩	奥羽山脈	374
481	石錐（ヨコ）	Ⅳ A 6 i	6.2	6.9	1.2	50	凝灰質砂岩	奥羽山脈	382
482	石錐（ヨコ）	Ⅳ B 3 c	6.2	7.6	1.9	100	緑色凝灰岩	奥羽山脈	381
483	石錐（ヨコ）	Ⅲ A 1 d	4.9	6.4	1.3	50	輝石安山岩	奥羽山脈	376
484	石錐（ヨコ）	Ⅱ A 3 i	4.4	7.2	1.5	80	緑色凝灰岩	奥羽山脈	375
485	石錐（ヨコ）	Ⅱ A 1 h	5.3	7.7	1.5	90	輝石安山岩	奥羽山脈	377
486	石錐（ヨコ）	Ⅱ A 3 h	6.4	6.5	1.9	100	輝石安山岩	奥羽山脈	392
487	石錐（ヨコ）	Ⅱ A 1 h	5.4	8.2	1.8	110	輝石安山岩	奥羽山脈	380
488	石錐（ヨコ）	Ⅰ A 4 i	5.6	8.1	1.8	120	輝石安山岩	奥羽山脈	378
489	石錐（ヨコ）	Ⅱ A 3 h	5.3	6.9	2.5	100	輝石安山岩	奥羽山脈	383
490	石錐（ヨコ）	道路	7	7.3	1.9	140	輝石安山岩	奥羽山脈	379
491	石錐（ヨコ）	Ⅳ B 3 a	5.7	8.3	1.8	110	凝灰質砂岩	奥羽山脈	388
492	石錐（ヨコ）	Ⅱ A 6 i	6.2	8.8	1.4	100	緑色凝灰岩	奥羽山脈	386
493	石錐（ヨコ）	Ⅰ B 7 a	7.3	9.2	2.6	250	輝石安山岩	奥羽山脈	387
494	石錐（ヨコ）	Ⅱ A 6 g	8.2	8.2	1.9	170	緑色凝灰岩	奥羽山脈	397
495	石錐（ヨコ）	Ⅳ B 1 b	7.1	8.9	1.7	100	凝灰質砂岩	奥羽山脈	385
496	石錐（ヨコ）	Ⅰ A 5 i	8.4	8.3	4.1	340	輝石安山岩	奥羽山脈	432
497	砥石	Ⅴ A 8 h	(17.3)	6.4	2.6	530	プロピライト	奥羽山脈	500
498	砥石	Ⅶ B 0 a	(9)	4.7	3.1	179	流紋岩	奥羽山脈	502
499	砥石	Ⅰ A 4 i	(6.3)	(4.7)	1	40	硬質泥岩	奥羽山脈	499
500	砥石	Ⅶ A 7 j	8.2	5.4	4.5	282	流紋岩	奥羽山脈	501
501	砥石	Ⅲ B 区	19.1	10.6	5.3	1,910	緑色凝灰岩	奥羽山脈	481
502	砥石	Ⅴ A 5 g	(8.5)	(7.8)	5.5	480	流紋岩	奥羽山脈	503
503	石製品	道路	9.8	5.9	4.1	220	デイサイト質凝灰岩	奥羽山脈	506
504	両面調整礫器	Ⅲ B 3 a	8.8	9.4	2.1	210	粘板岩	北上山地	504
505	石製品	Ⅲ B 8 c	(1.7)	(3.3)	1.6	10	硬質泥岩	奥羽山脈	505
506	石製品	Ⅴ A 6 i	5.2	4.6	1.4	40	緑色凝灰岩	奥羽山脈	507

V まとめ

梅ノ木台地Ⅰ遺跡における調査の概要については今まで述べてきたとおりである。簡単に本遺跡の調査報告をまとめたい。

本遺跡は和賀川右岸の段丘の縁辺部に位置しており、北上市鬼柳から和賀町山口までの東北横断自動車道秋田線関連の発掘調査遺跡群のほぼ中間地点にある。

検出された遺構は縄文時代の陥し穴１基、焼土８基であり、竪穴住居や貯蔵穴などは認められなかった。しかし、縄文時代の前期から晩期の土器、石器等が出土していることから、近くに集落が存在していた可能性があり生活の場であったことが窺われる。

古代では平安時代の竪穴住居跡１棟が検出されている。残存状態がよくなく、遺物も少ないが、掲載番号２の坏は赤焼き土器で、平成２年度の上鬼柳Ⅲ遺跡発掘調査で検出された土師器窯跡から出土したものと器形が類似している。古代においても周辺に集落があったものと考えられる。

遺物の量は少ないものの、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、石製品が出土している。登録した土器のうち、時期別（時期不明の土器を除く）の割合をみると、縄文時代前期末葉と中期初頭の土器群が約60％、弥生土器16％、古代15％となっている。本報告書のⅠ群ないしⅡ群の大木６式および大木７ａ～７ｂ式併行の土器群が主体となっている。

この時期の遺跡は天神カ丘遺跡（大迫教委1974年）、北上市滝ノ沢遺跡（北上市教育委員会1983年）、金ケ崎町和光６区遺跡（岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター1987年）、江釣子村鳩岡崎遺跡（岩手県教委1982年）等が知られている。また、現在調査継続中である北上市和賀町媒孫遺跡から同時期の土器が多量に出土しており、平成元年度から３年度にかけて本遺跡を含めて東北横断自動車道秋田線関連の遺跡との比較検討が待たれるところである。

石器の器種別をみると石錘32.5％、磨石23.3％、凹石13.6％と礫石器の出土割合の多いのが目立つ。石錘は一か所でまとまって出土したのではなく散在していたものであり、その性格について不明であるが出土点数の違いはあるものの北上市滝ノ沢遺跡、和賀町媒孫遺跡と同傾向にあるように思われ、当時の生業、用具等を考える上で貴重な資料になるものと思う。

弥生土器は少量であるがⅤ区を中心に出土した。細片であり遺構も伴わないのではっきりしたことは分からないが、天王山系とおもわれる撚糸文施文の土器が多い。時期的には弥生時代後期に属するものと思われる。有孔石製品についてはこれらの土器と共伴することを付しておく。

縄文土器、弥生土器、石器の出土範囲はⅡ～Ⅴ区が主で西側ではあまりみられなかったことからこれらに該当する時期の集落は本遺跡の南側に存在する可能性があると思われる。

参考文献

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは「岩手埋文」と略記する

岩手埋文（1989年）「寺前Ⅰ・Ⅱ・片地家館跡発掘調査報告書」岩手埋文報告書140集

岩手埋文（1987年）「和光６区遺跡発掘調査報告書」岩手埋文報告書114集

岩手埋文（1986年）「手代森遺跡発掘調査報告書」岩手埋文報告書108集

草間俊一他（1974年）「天神ケ丘遺跡」岩手県大迫町教育委員会

岩手県教育委員会（1982年）「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－江釣子村鳩岡崎遺跡」岩手県文化財調査報告書第70集

北上市教育委員会（1983年）「滝ノ沢遺跡（1997～1982年度）」北上市文化財調査報告書33集

岩手埋文（1990年）「岩崎城西遺跡発掘調査報告書」岩手埋文報告書148集

岩手県一戸町教育委員会（1985年）「上野遺跡」一戸町文化財調査報告書13集

滝沢村教育委員会・岩手埋文（1986年）「湯舟沢遺跡」滝沢村文化財調査報告書第２集

小田野哲憲（1987年）「岩手の弥生式土器編年試論」岩手県博物館研究報告書第５号

大迫町教育委員会「町内遺跡群発掘調査報告書Ⅱ屋敷遺跡」大迫町埋蔵文化財報告書第14集

岩手埋文（1988年）「東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査馬立Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手埋文報告書第122集

加藤晋平・鶴丸俊明（1991年）「図録石器入門事典先土器」柏書房

鈴木道之助（1991年）「図録石器入門事典縄文」柏書房

興野義一（1969年）「大木式土器理解のために」Ⅴ～Ⅵ　考古学ジャーナル32，48　ニュー・サイエンス社

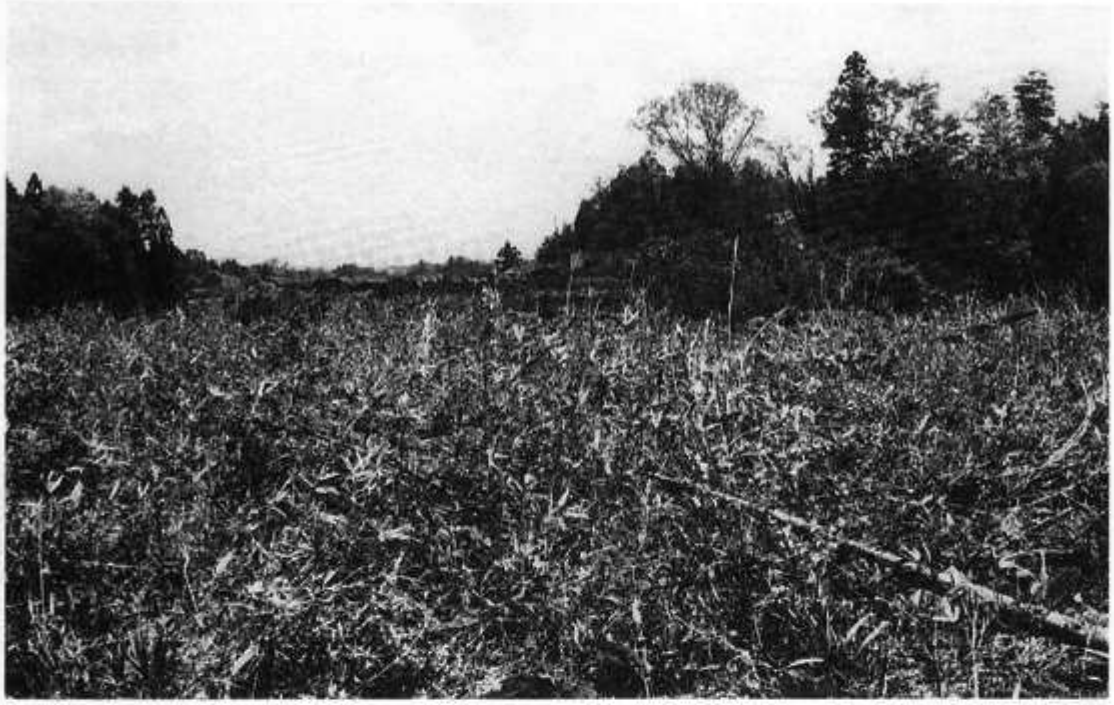
加藤晋平・小林達雄・藤本毅（1983年）「縄文文化の研究」３～５巻　雄山閣

永峰光一（1981年）「縄文土器大成２中期」講談社

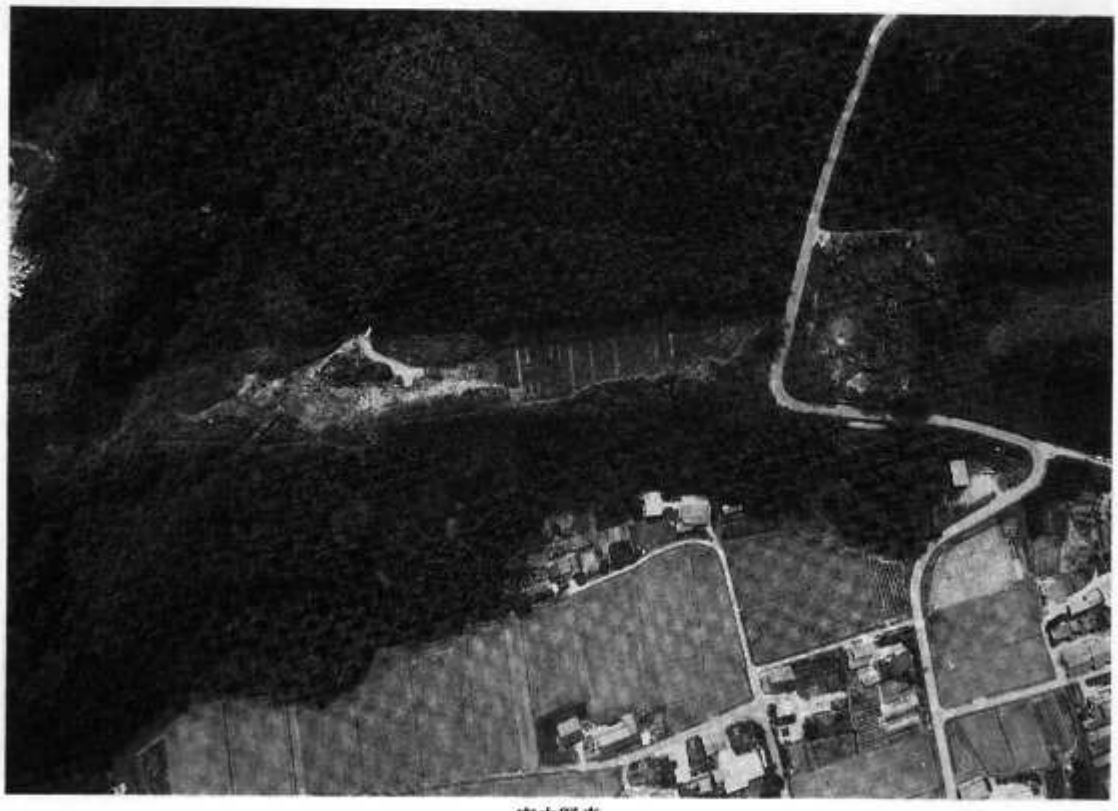
馬目順一（1978～1979年）「入門講座・弥生土器南東北」１～５　考古学ジャーナル148、151、154、156、159　ニュー・サイエンス社

橘　善光（1979年）「入門講座・弥生土器北東北」１～３　考古学ジャーナル160、162、166　ニュー・サイエンス社

写 真 図 版

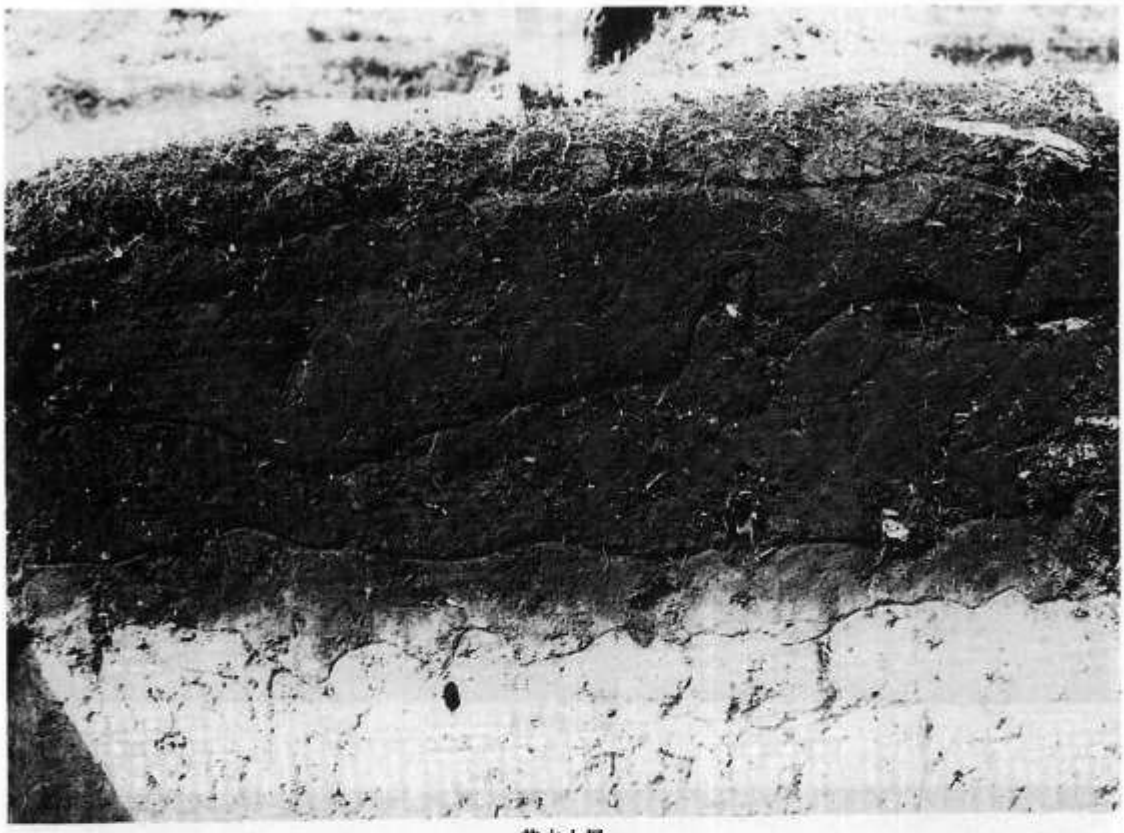


調査前風景

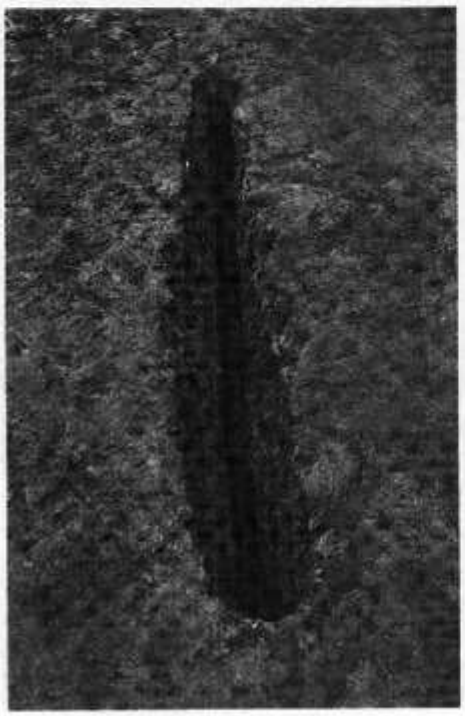


空中写真

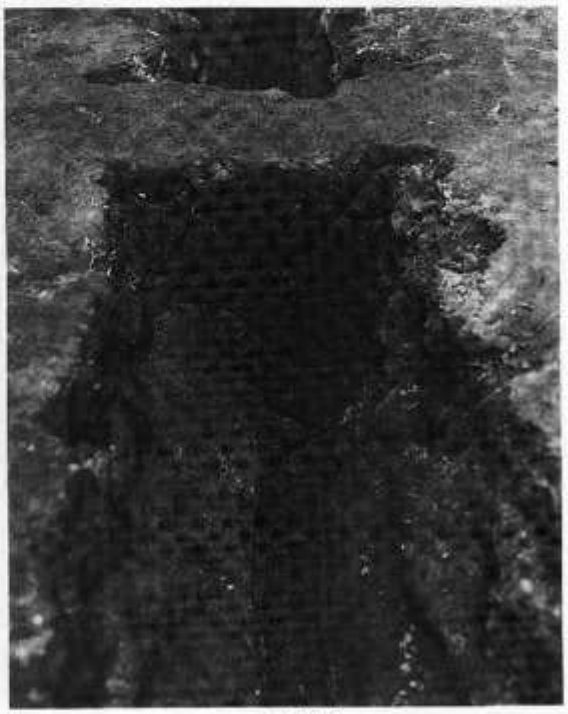
写真図版１　調査風景・空中写真



基本土層

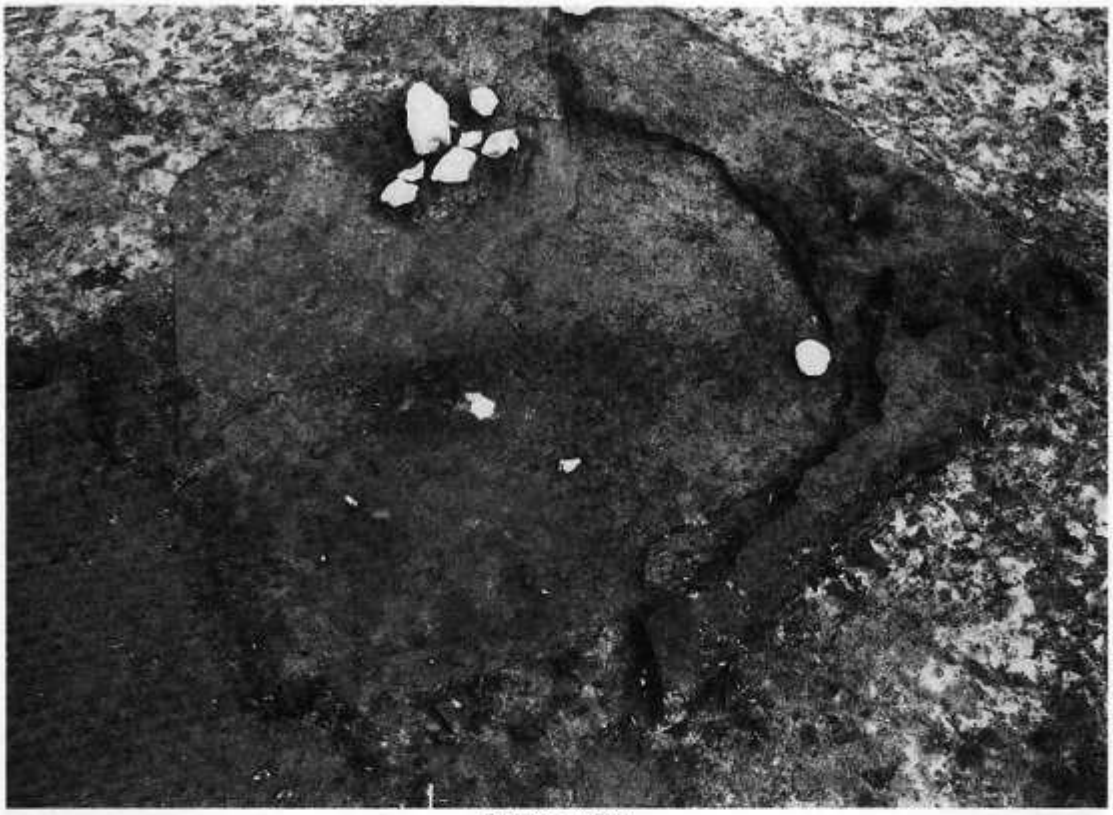


陥し穴状遺構



埋土断面

写真図版２　基本層序・陥し穴状遺構



竪穴住居跡全景

埋土断面

カマド

焼土断面

写真図版３　竪穴住居跡

7号焼土

8号焼土

7号焼土断面

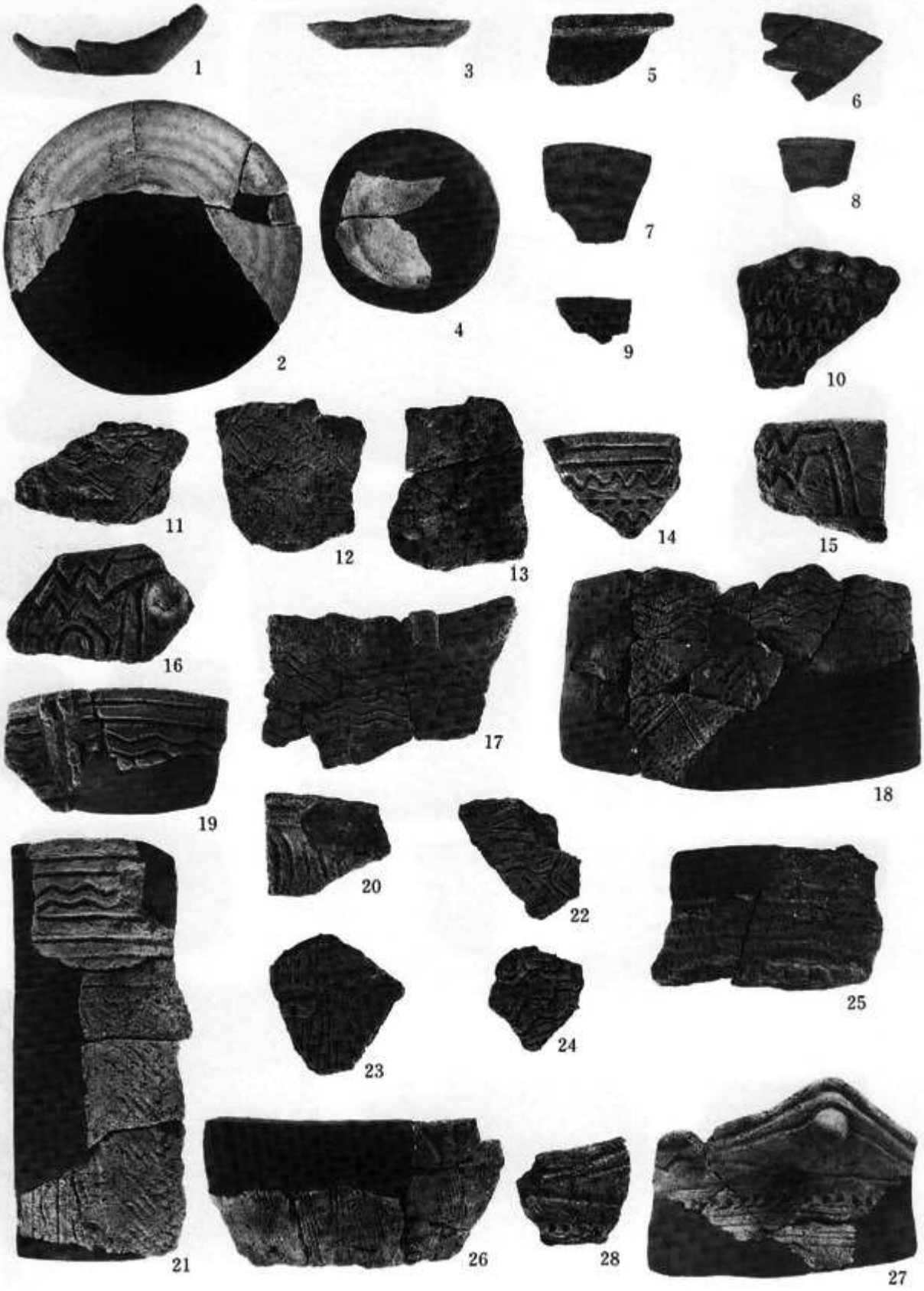
8号焼土断面

1号溝跡

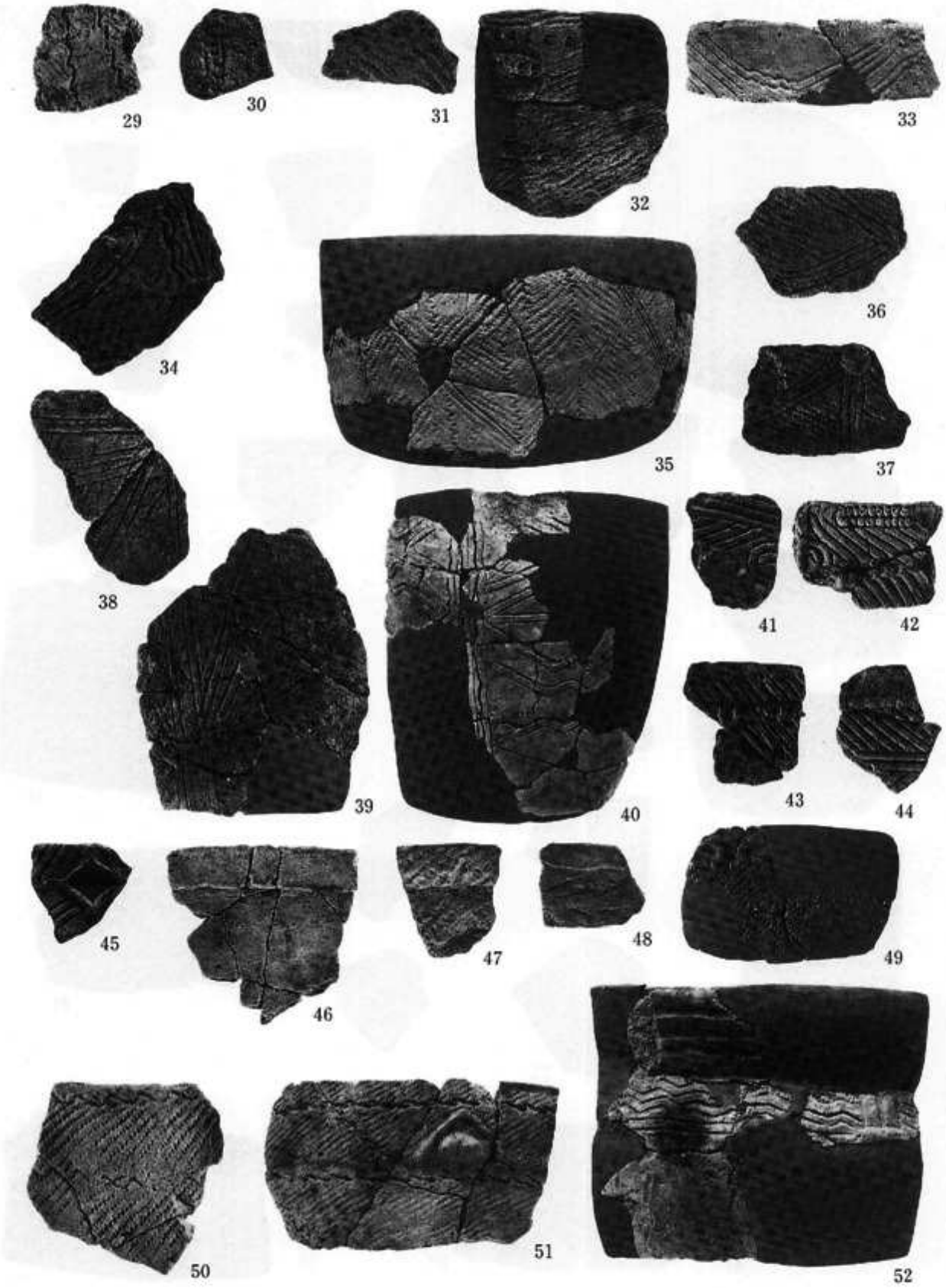
2号溝跡

2号溝跡 埋土断面

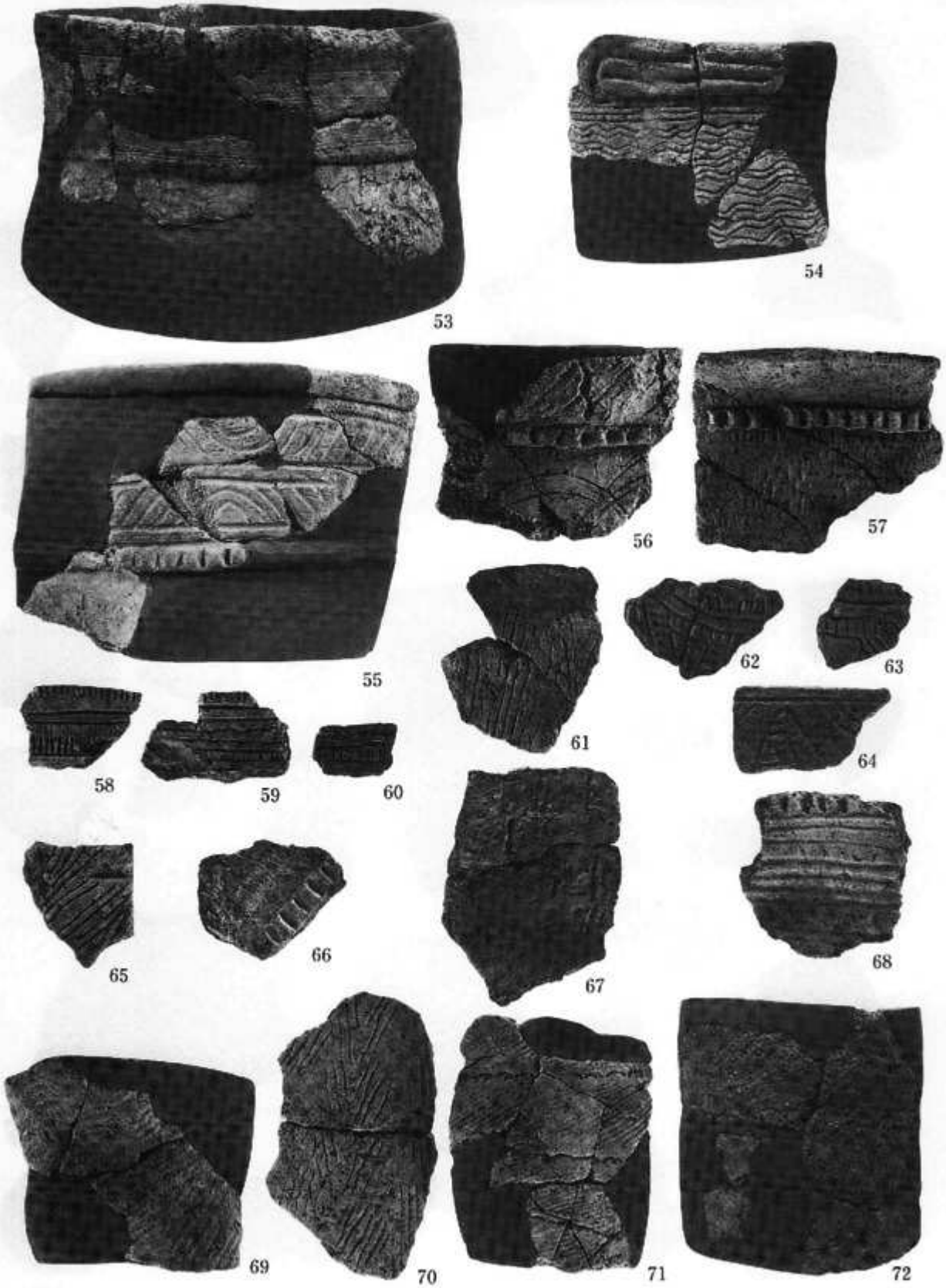
写真図版4　7・8号焼土、1・2号溝跡



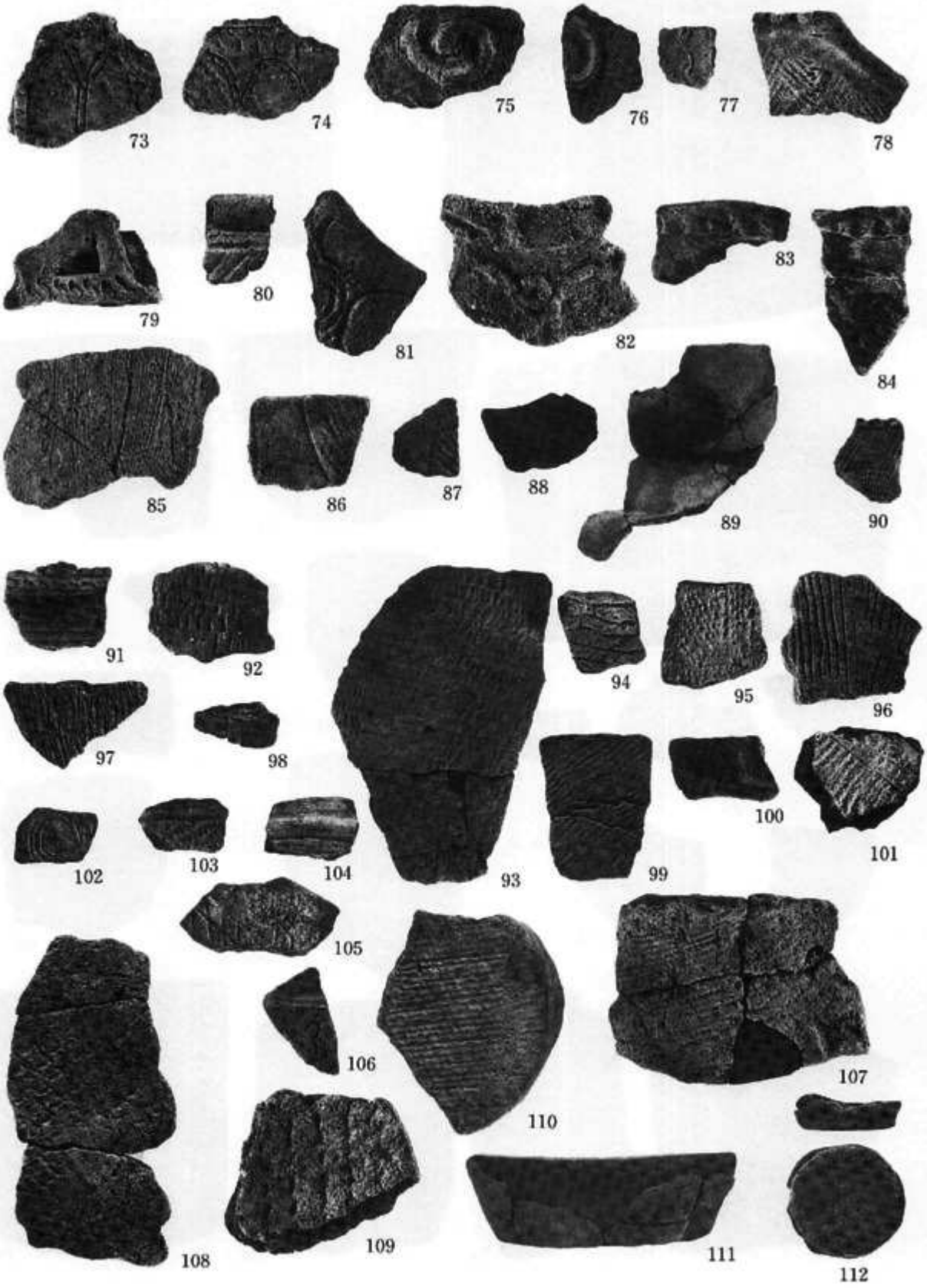
写真図版５　竪穴住居跡(1～8)・遺構外の出土遺物 土器１



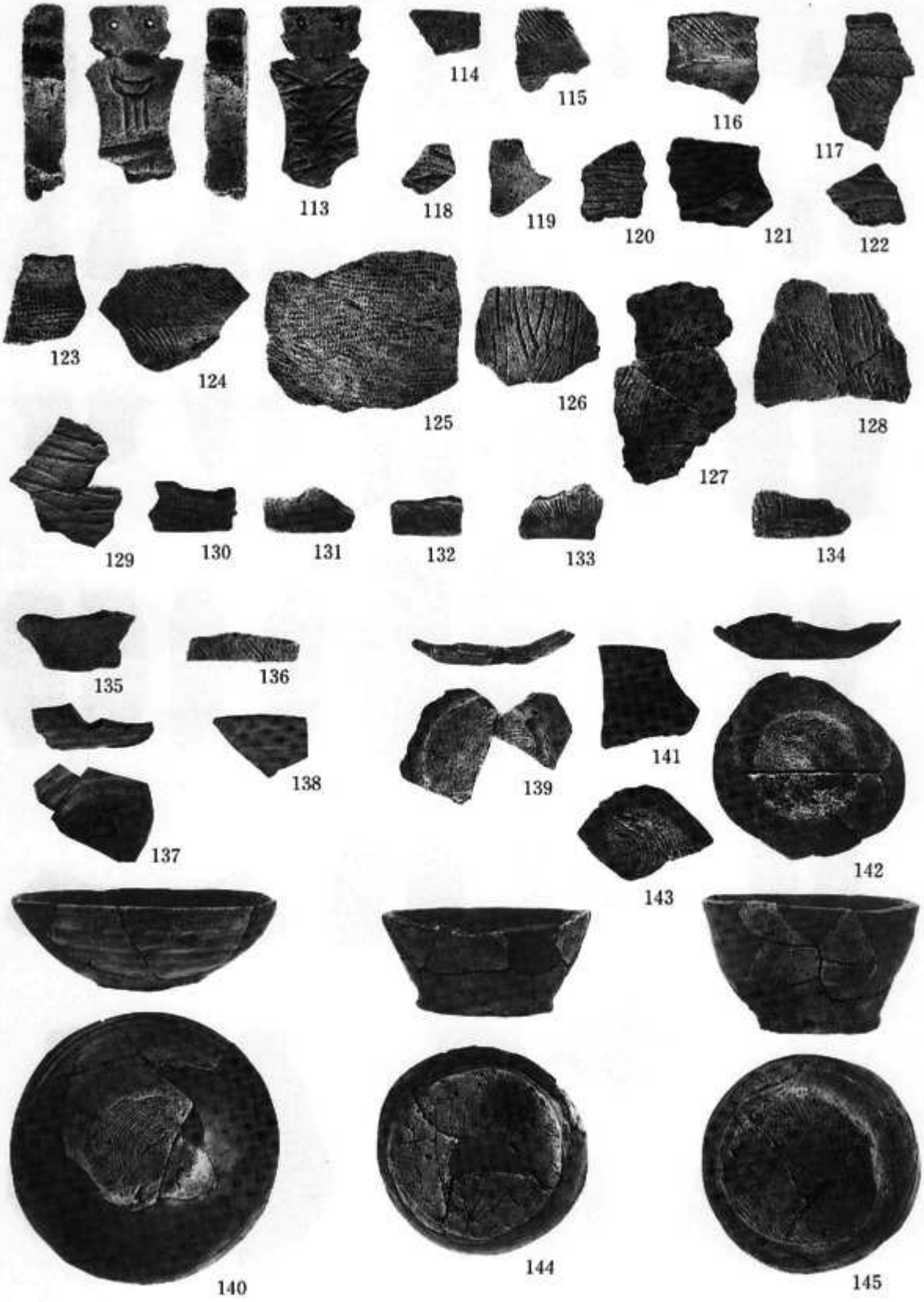
写真図版６　遺構外の出土遺物 土器２



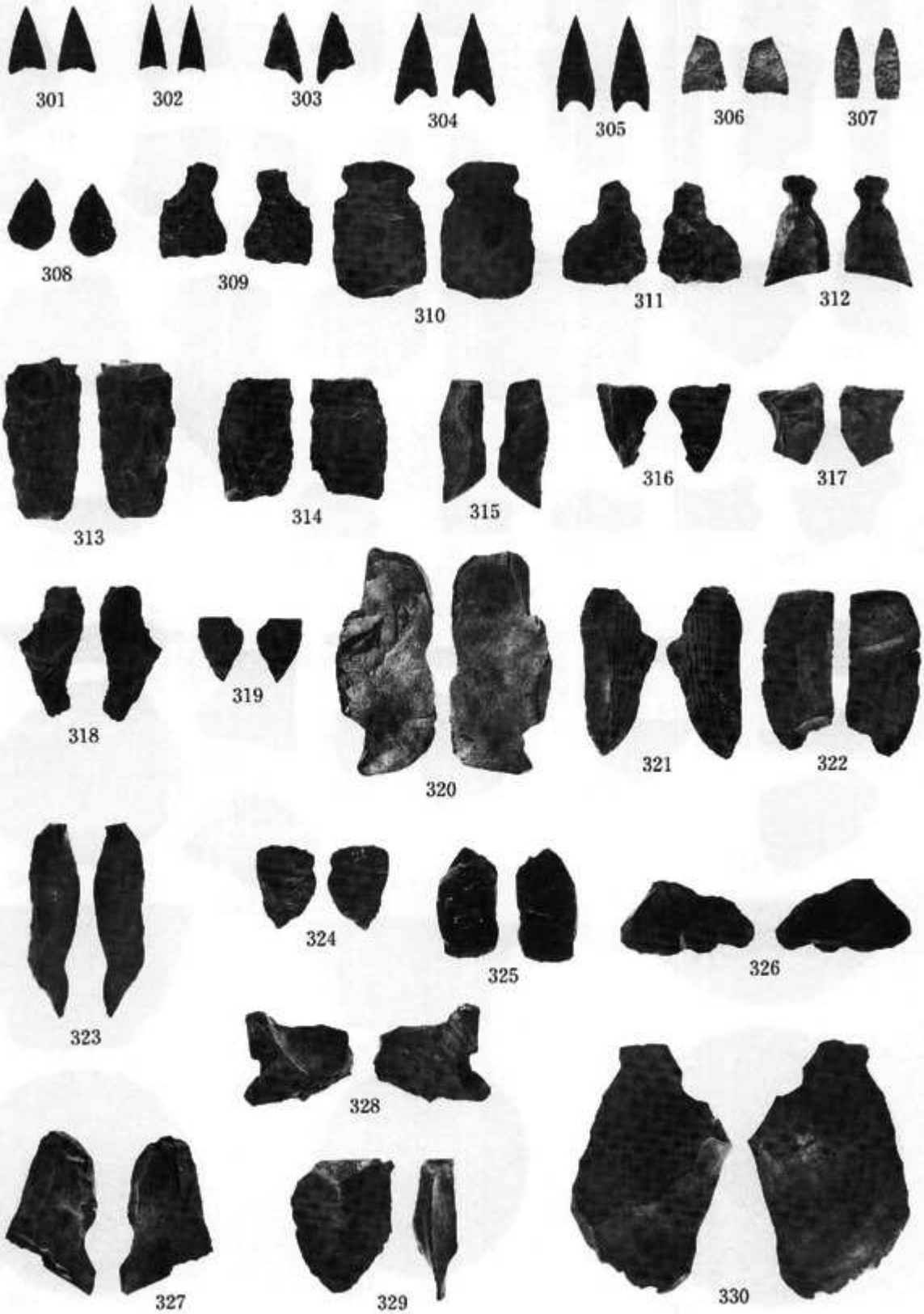
写真図版７　遺構外の出土遺物 土器３



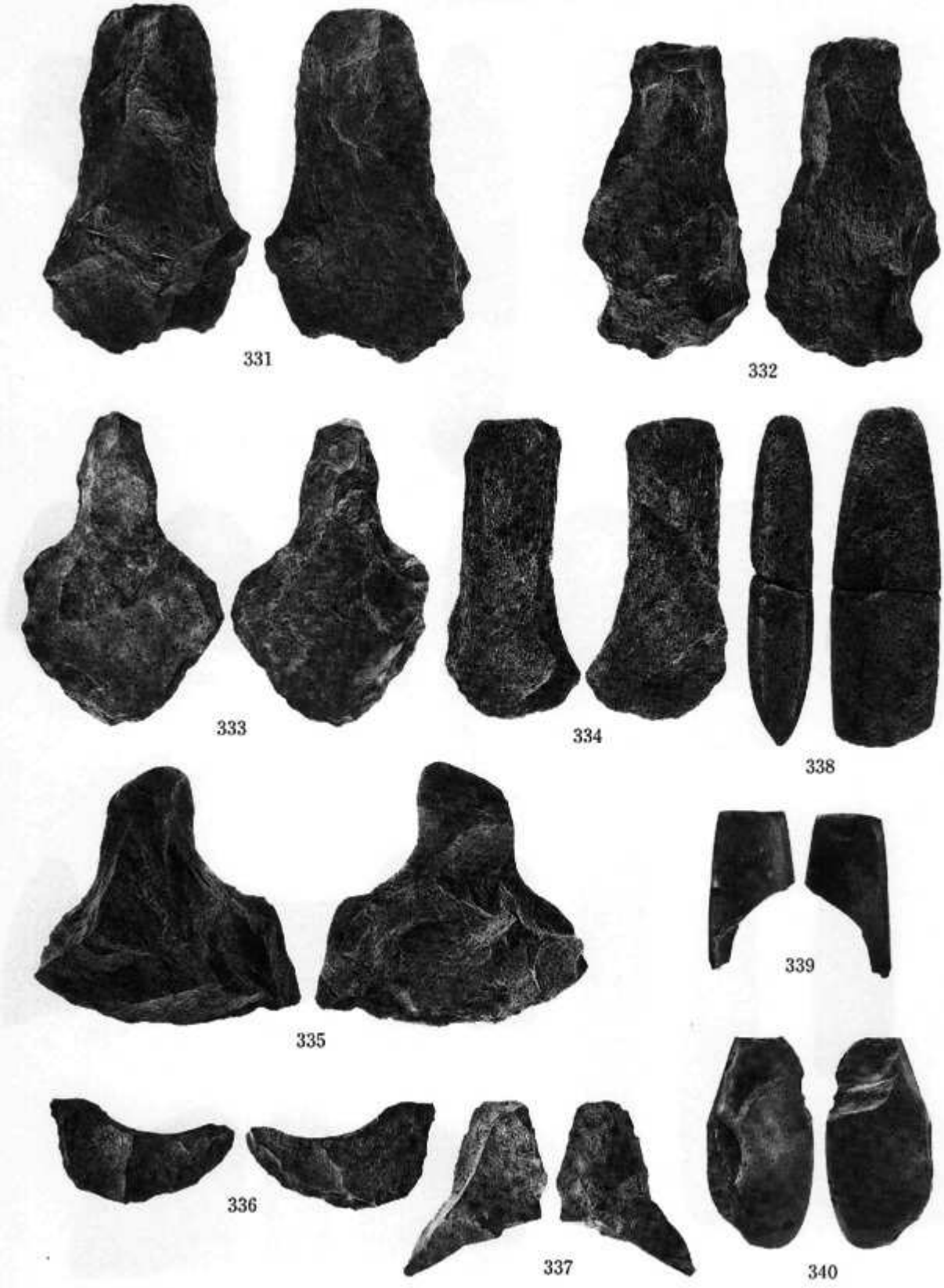
写真図版８　遺構外の出土遺物 土器４



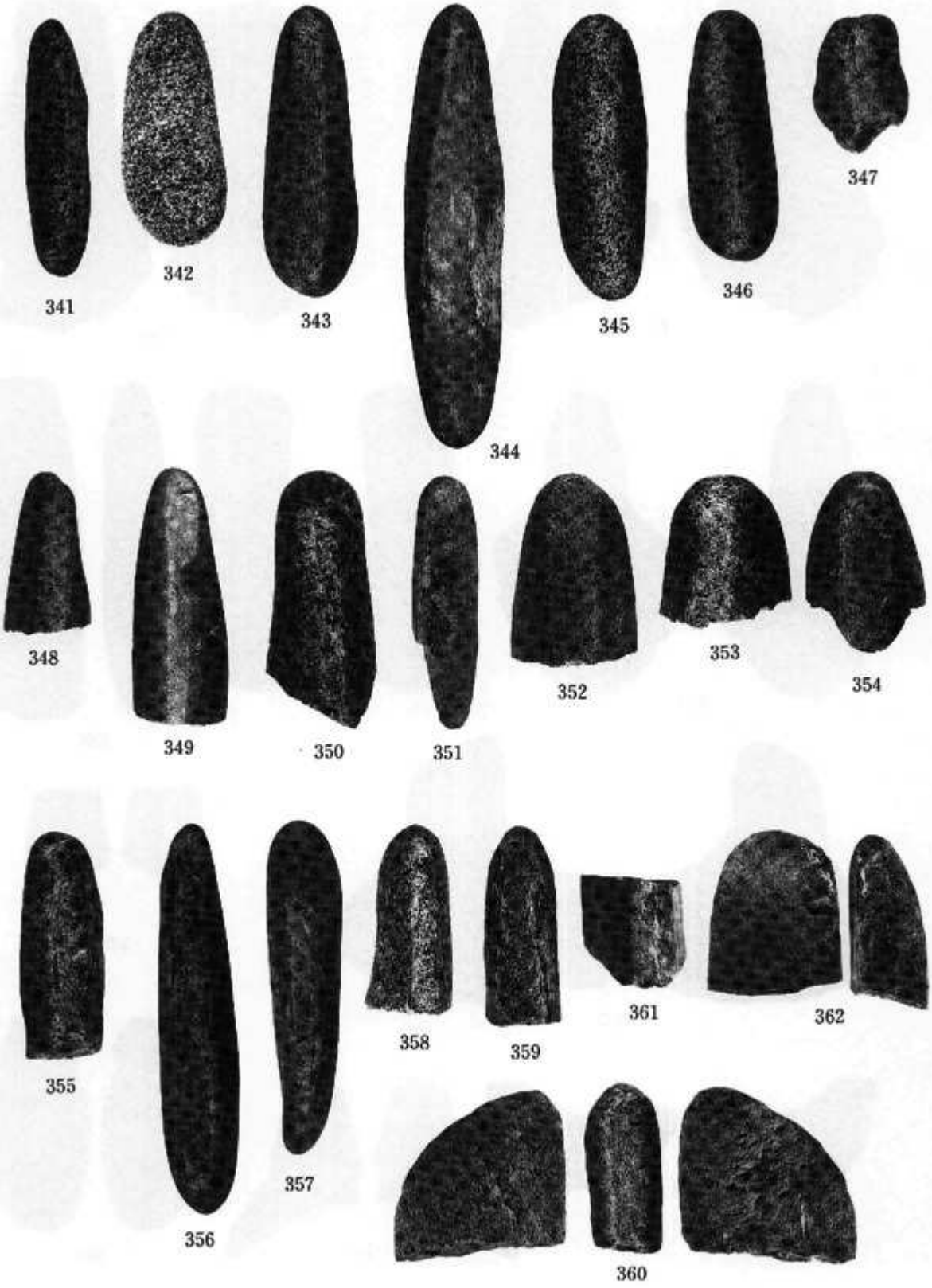
写真図版９　遺構外の出土遺物 土器５



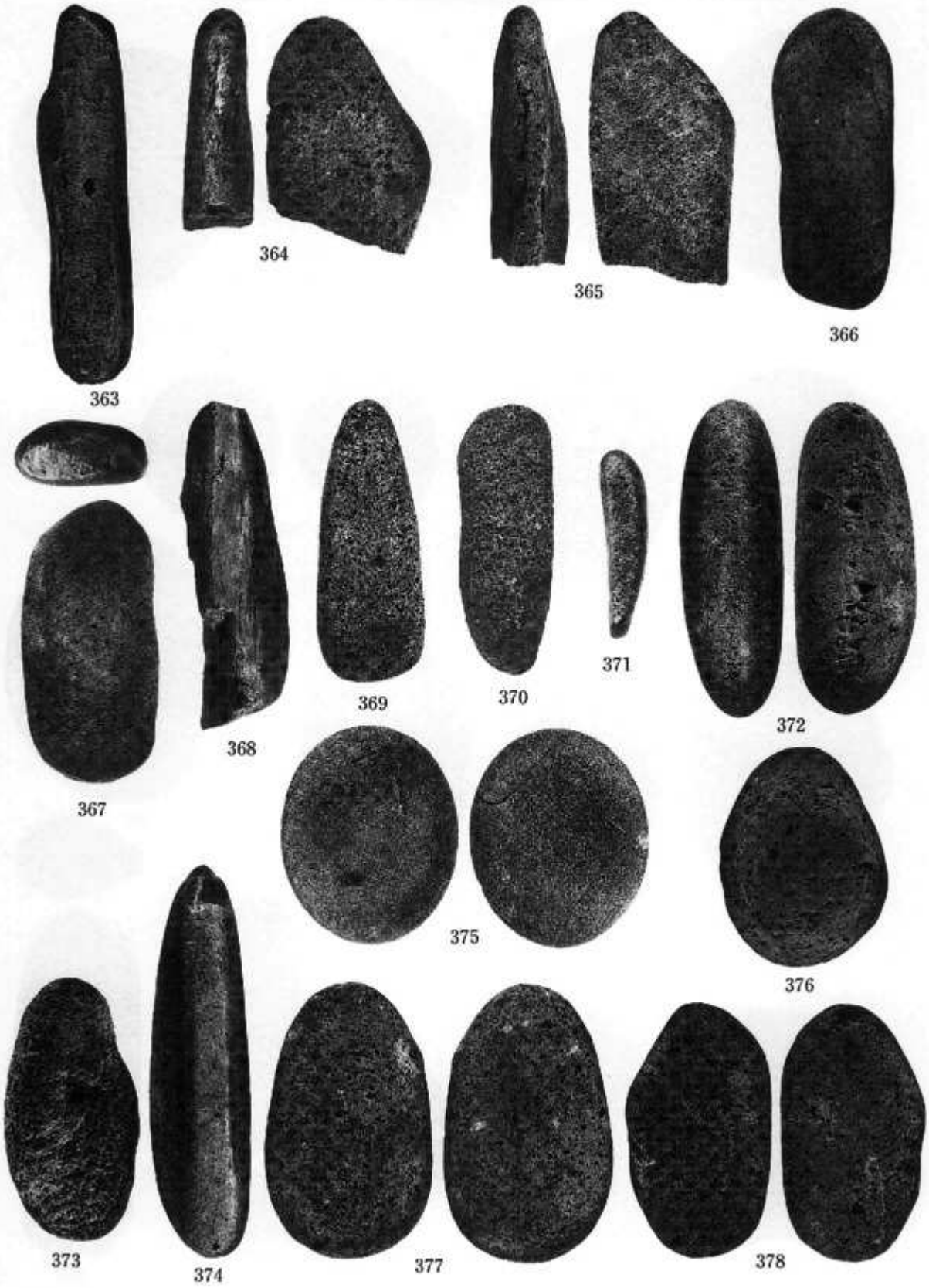
写真図版10　遺構外の出土遺物 石器 1



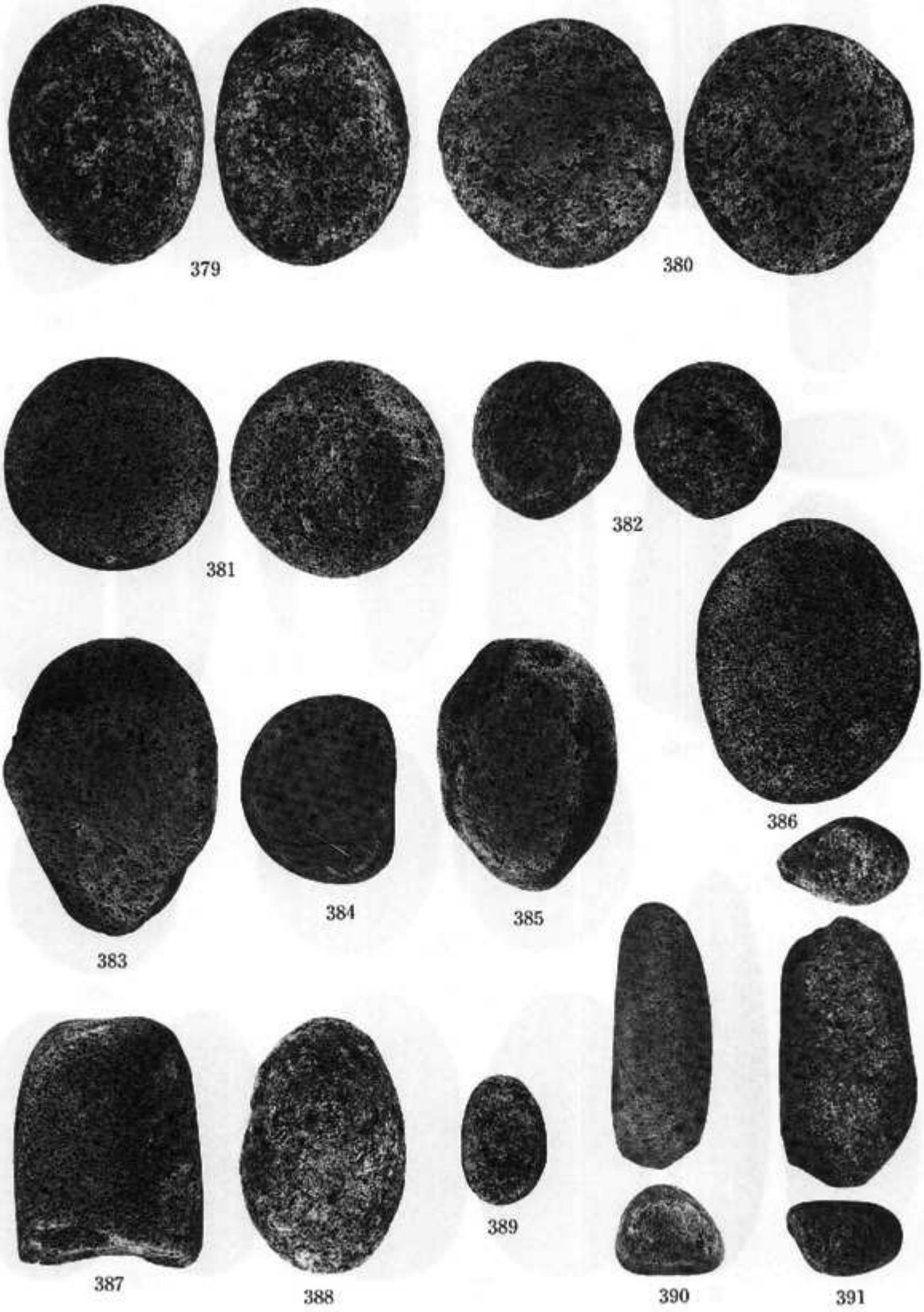
写真図版11　遺構外の出土遺物 石器２



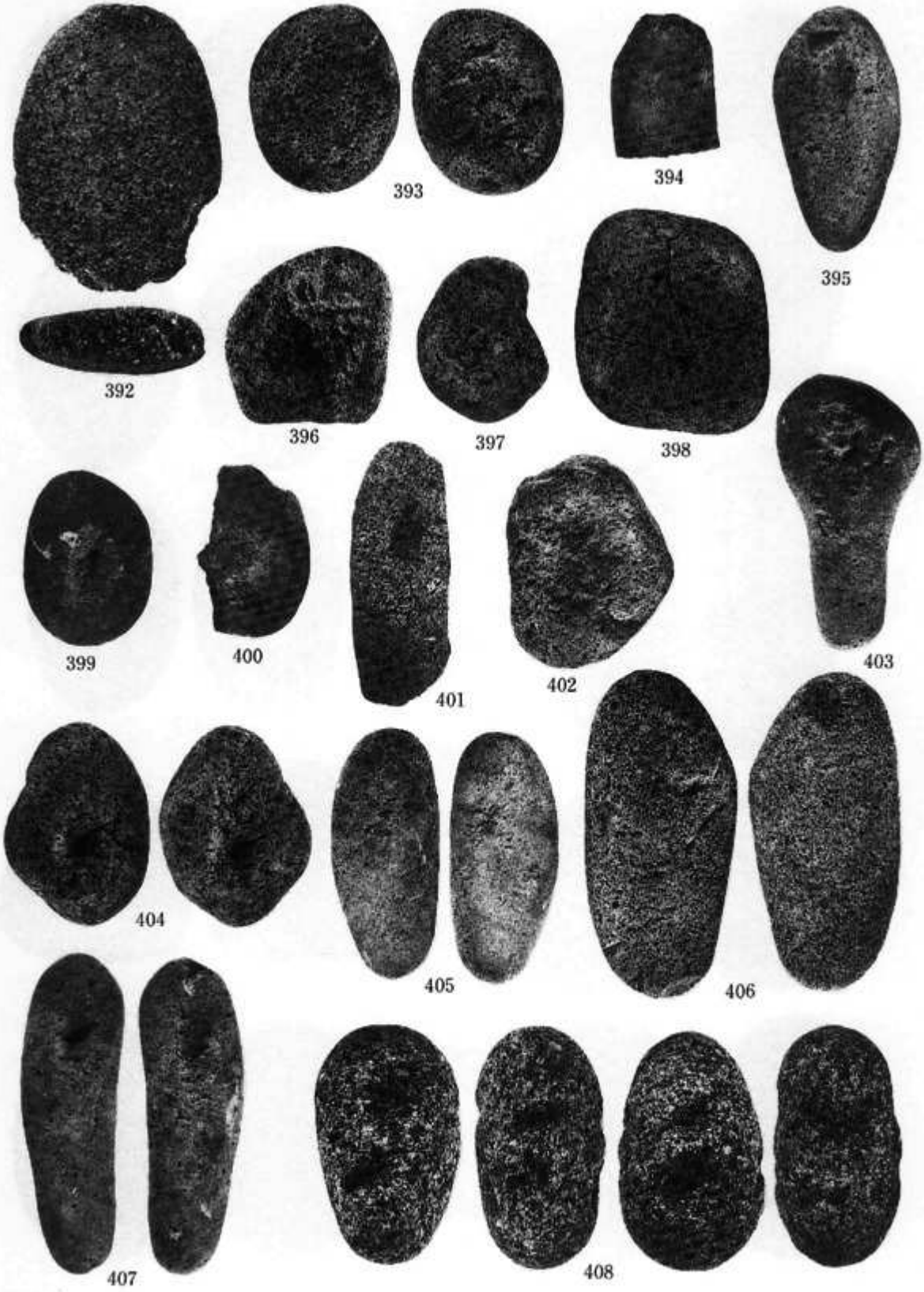
写真図版12　遺構外の出土遺物 石器３



写真図版13　遺構外の出土遺物 石器４



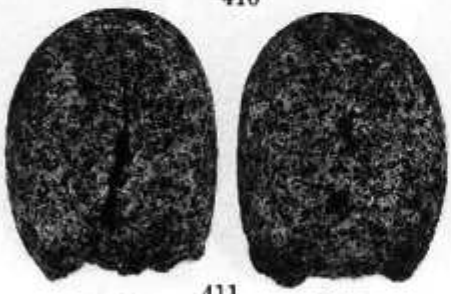
写真図版14　遺構外の出土遺物 石器５



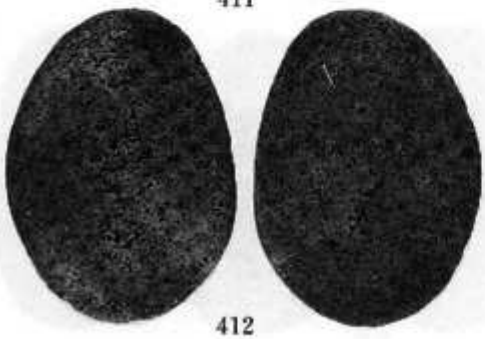
写真図版15　遺構外の出土遺物 石器6

409

410

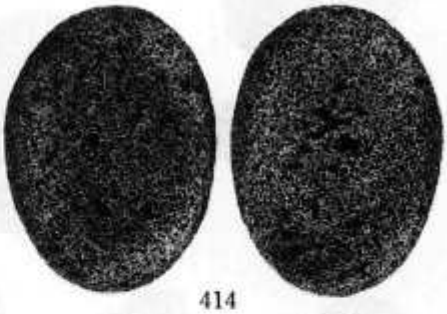


411

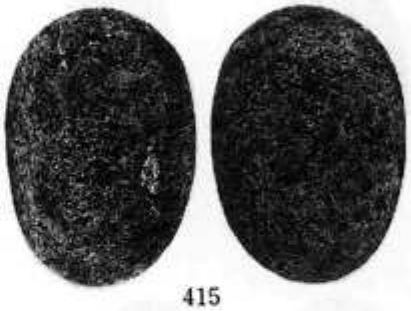


412

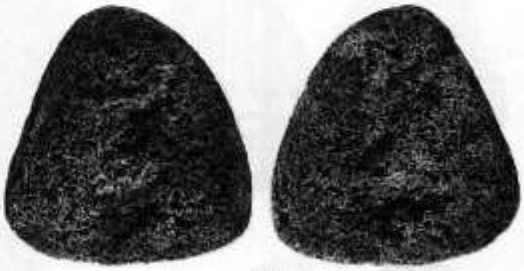
413



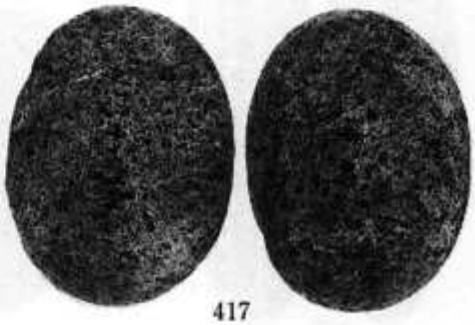
414



415

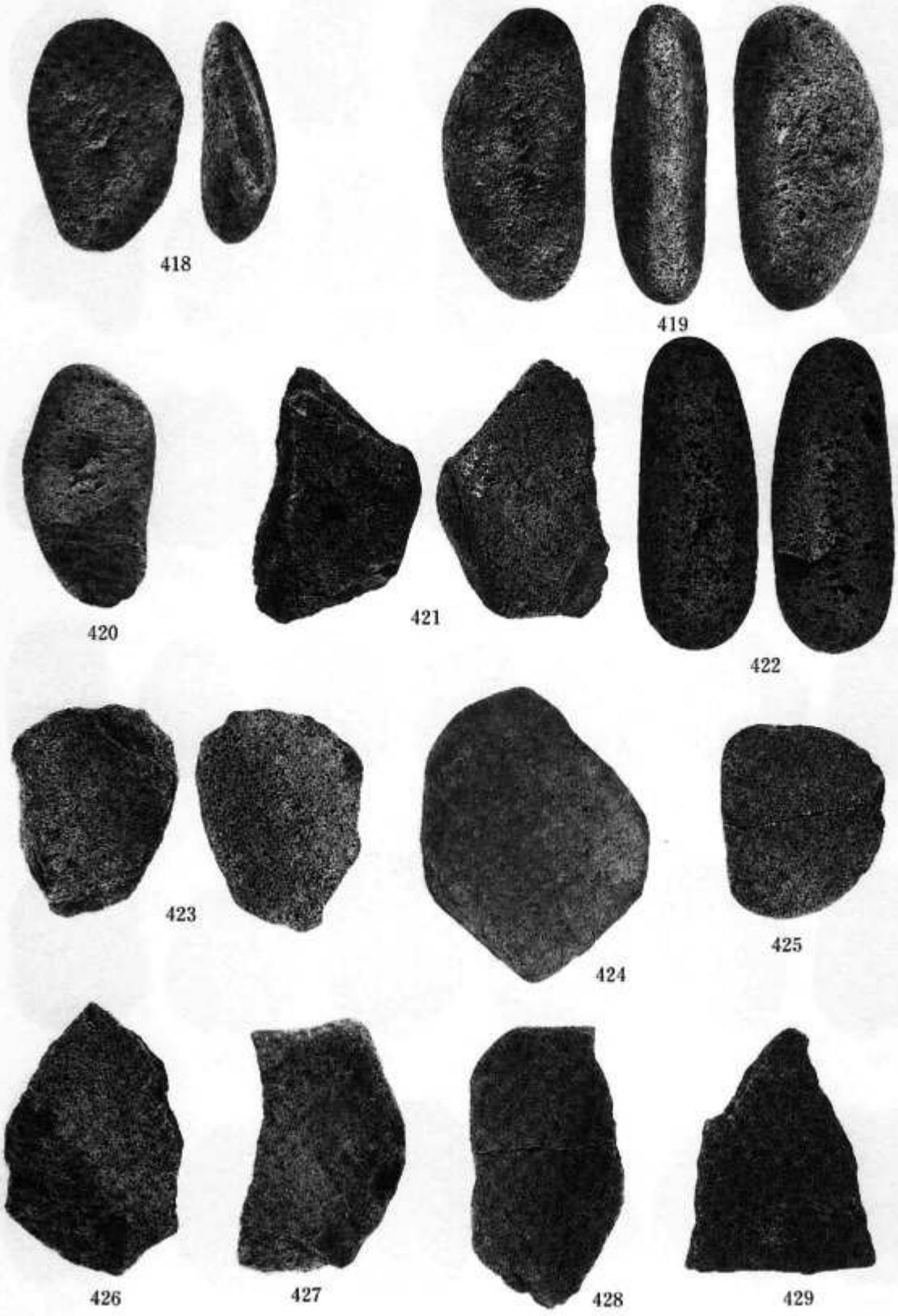


416

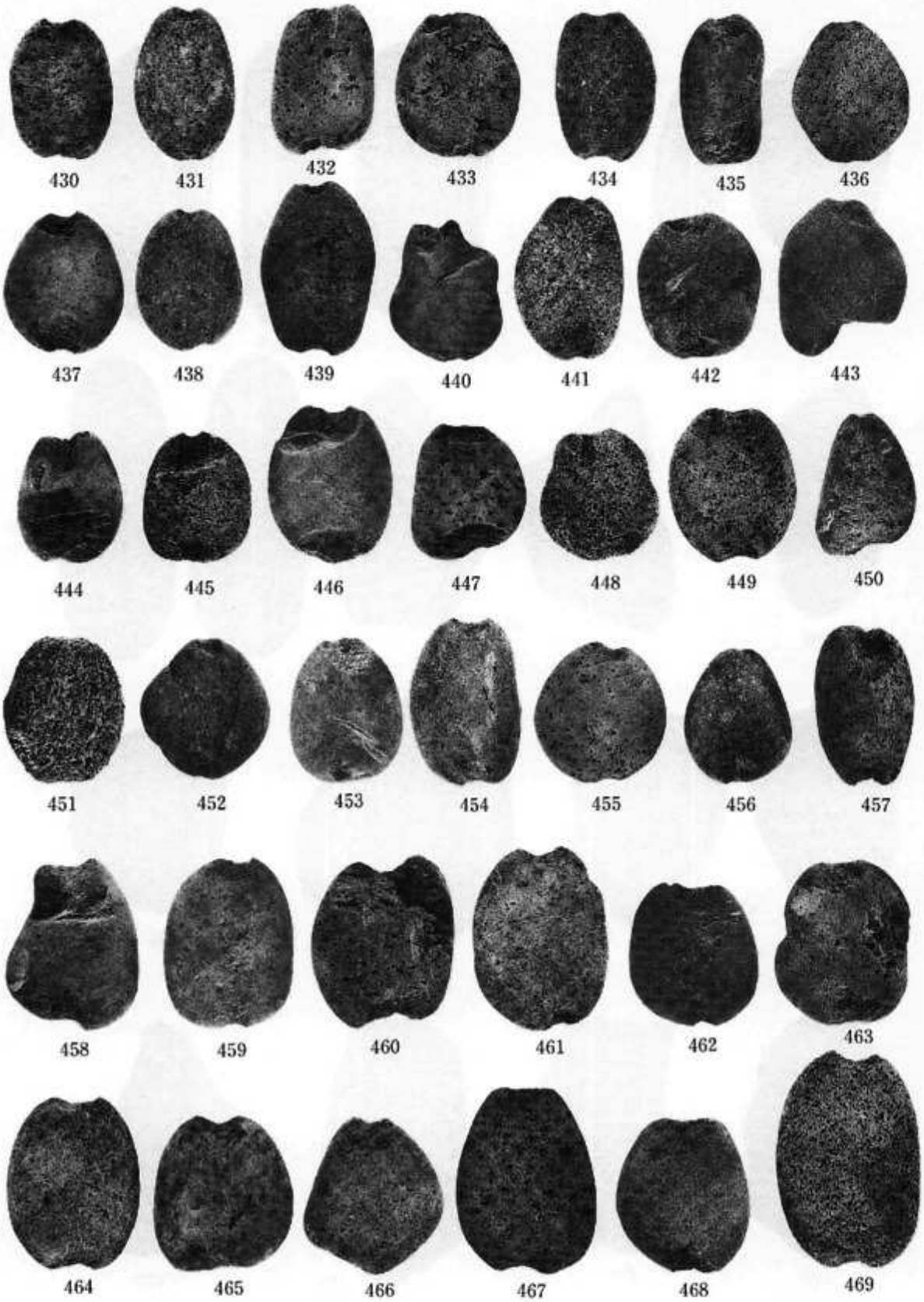


417

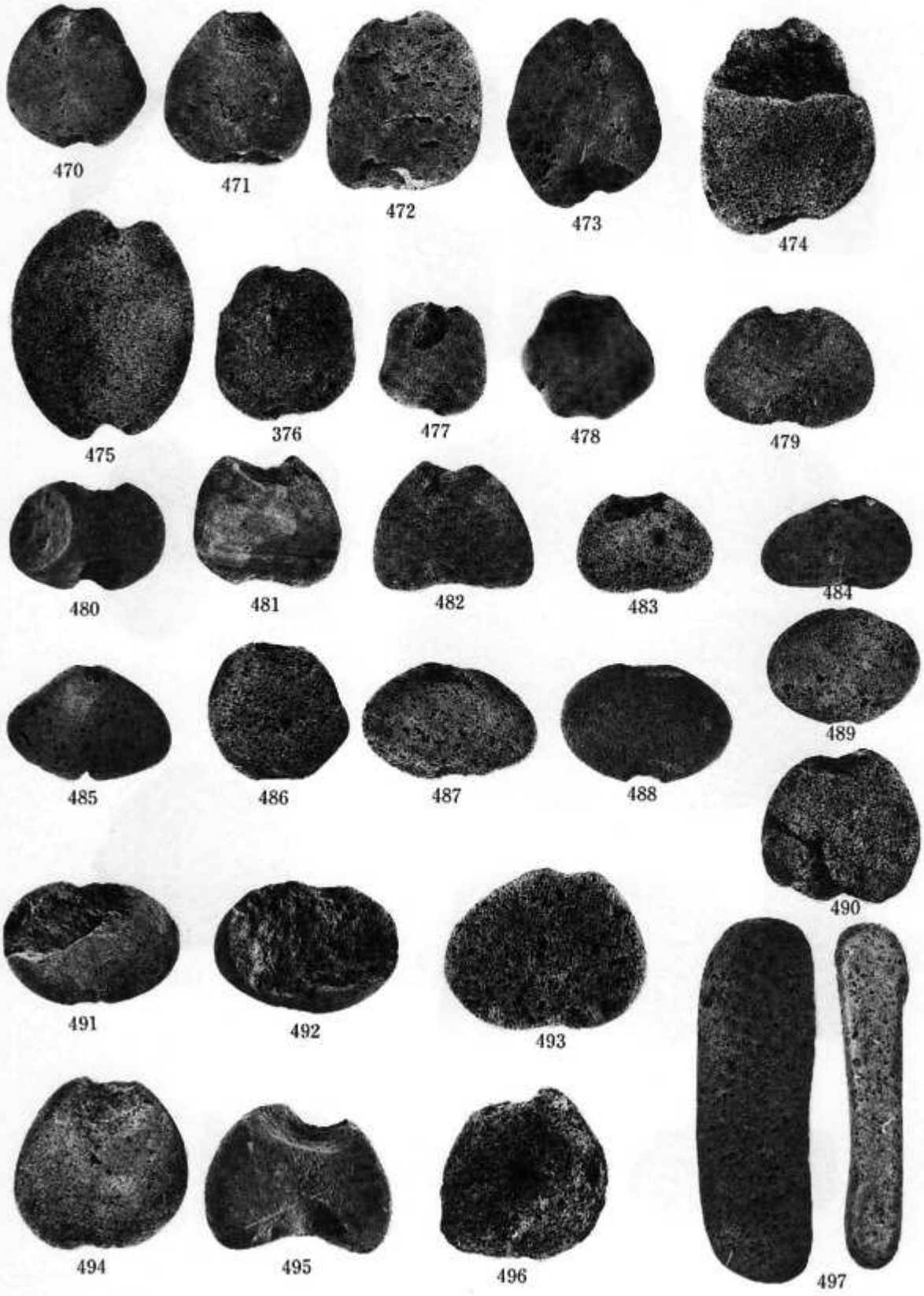
写真図版16　遺構外の出土遺物 石器７



写真図版17　遺構外の出土遺物 石器８

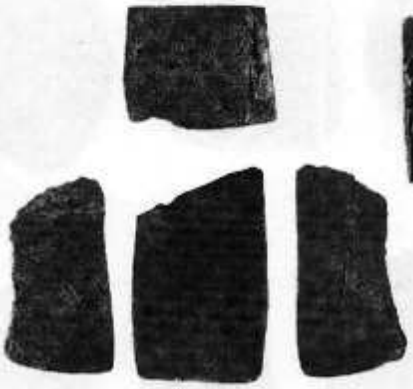


写真図版18　遺構外の出土遺物 石器9



写真図版19　遺構外の出土遺物 石器10

498



500

499

501

503

504

502

505

506

写真図版20　遺構外の出土遺物 石器11

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼所長	小笠原 喜一
副所長	高橋 敬明

[管理課]

管理課長（兼）	高橋 敬明
課長補佐	森岡 陽一
主事	佐藤 理

[調査課]

調査課長	村上 康昭
課長補佐（第一班）	佐々木 嘉直
課長補佐（第二班）	鈴木 恵治
主任文化財専門調査員	小野田 哲意
〃	三浦 謙一
〃	工藤 利幸
〃	高橋 与右エ門
〃	平井 進
〃	中川 重紀
〃	藤村 敏男
〃	高橋 義介
文化財専門調査員	斎藤 實
〃	佐瀬 隆
〃	千葉 孝雄
〃	斎藤 博司
〃	東海林 隆幹
〃	佐々木 弘
〃	川村 均
〃	鈴木 貞行
〃	伊東 格
〃	遠藤 修
〃	齋藤 邦雄
〃	神 敏明

[資料課]

資料課長	松村 義夫
主任文化財専門調査員	田頭 寿夫
嘱託	吉田 一男
〃	根橋 文一
運転技士兼技能員	佐藤 春男
文化財専門調査員	佐々木 信一
〃	小原 眞一
〃	村上 修
〃	酒井 宗孝
〃	松本 建速
〃	笹平 克子
〃	花坂 政博
〃	佐々木 務
〃	金子 昭彦
〃	濱田 宏
期限付専門職員	鎌田 精造
〃	阿部 勝則
〃	安藤 邦彦
〃	星 雅之
〃	引屋敷 学
〃	鈴木 知己
〃	藤村 隆
〃	千葉 悟
〃	熊谷 博由
〃	新倉 信一郎
〃	山口 博英
〃	川村 聡
〃	八重樫 のり子

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第162集

梅ノ木台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線関連遺跡発掘調査

印刷　平成３年10月25日

発行　平成３年10月31日

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185
ＴＥＬ (0196) 38－9001

印刷　㈱ 吉 田 印 刷
〒020 岩手県盛岡市名須川町23番27号
ＴＥＬ (0196) 25－2323

© ㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1991